
恋姫十無双・慶次伝 ~空の彼方に~

RH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫十無双・慶次伝 空の彼方に

【Nコード】

N4214X

【作者名】

RH

【あらすじ】

天下の傾奇者、前田慶次郎利益。その彼も齡七〇を越え、隠棲の地である米沢でその波乱に満ちた人生を完うしようとしていた。しかし、天はかの者がこのまま死ぬことを許さなかった。

『花の慶次』と『真・恋姫十無双』のクロス作品です。以前、同名の作品をArcadiaで連載しておりました。本作品は、その再構築版になります。まず、「はじめに」をお読み下さい。

はじめに

本作品は、2010年秋から2011年春にかけて Arcadia にて連載していた同名作品の再構築版となります。

実力不足のため、途中で連載を中止いたしました。

しかしながら、生活によりやく余裕が出たのを機に、改めて書いてみようと思った次第です。

自分のペースで、のんびり書いていければと考えております。

再構築版と述べましたが、話の展開は Arcadia に以前掲載したものに準じる予定です。

細かい部分を追加、または削除するつもりですが、基本的に同じ内容と考えて下さって結構です。

したがいまして、一度 Arcadia で読んだことがあるという方は、改めて読む必要はないかと存じます。

それでもお読みいただけるということでしたら、作者として幸甚に堪えません。

【注意！】

1．クロス作品であるため、両作品に愛着がある方は不愉快な思いをされる可能性があります。

2．作品の舞台は『真・恋姫†無双』になりますが、原作通りの展開にはなりません。

原作キャラの改ざん、原作改変がございます。

3．残酷な表現があります。登場人物が死ぬ可能性があります。

以上の点について「承知しかねる」という方は「回れ右」を推奨いたします。

第1章 慶次（1）

米沢近郊の堂森にある小さな屋敷の朝。

白髪の老人が、朝餉の席に着いた。長身大柄、鶴のように痩せた老人である。その名を、前田慶次郎利益という。

慶次郎はいつものように手を合わせると箸をとった。そしてまた、いつものようにまず漬け物に手を伸ばす。と、箸につままれた漬け物がぼとりと落ちた。

「む？」

もう一度、箸でつまもうとする。しかし、震える箸は、なかなか思う通りに動こうとはしなかった。震え続ける箸をしばし眺めた慶次は、箸を静かに置くと小さくうなずいた。

手を叩く。

「へえ」

下男のと平が顔を出した。三〇歳半ばの小男である。

「すまぬが、膳を下げてくれ」

「へえ？……な、なにかお気に障ることでも」

「いや、どうも食欲がなくてな」

「は、はあ」

慶次郎はそのまま席を立つと、奥の書院へと歩いて行った。納得

のいかない顔をして、与平は膳を下げる。

無理もない。老人でありながら、老人のようではない。それが慶次郎という男である。毎朝、ご飯のお代わりを欠かさぬ男であった。それが、一口も食わずに膳を下げてくれと言つ。与平は首を傾げた。

しばらくして、書院から慶次郎が戻ってきた。

「与平。ちょっと使いを頼まれてくれるか」

「へ、へい。どこまで」

「うむ。直江山城のところまで」

そういうと、慶次郎は封をした手紙を与平に渡す。

「そ、それではすぐに」

「まあ、急がぬともよい。ゆっくりと行け」

「はあ？」

「歩いて行け、良いな」

そう言つと、慶次郎はくるりと背を向けて書院に戻っていった。

与平はそんな主の背中を呆けた顔で見っていた。慶次郎が書院の中に消えると、慌てて頭を下げて屋敷を出ていく。

米沢の中心地にある直江山城守兼続の屋敷まで、この堂森の屋敷からは歩いて半刻（一時間）ほどである。

書院の中に、慶次郎は座っていた。白装束である。座ったまま、

書院の中を見渡した。

目の前の壁には、朱槍がかかっている。
鉄筋の入った、特製の長槍である。

もう、それをふるうだけの膂力はない。

右後ろの壁には、大きな鎧櫃が二つ。

河原田城の戦いでまとった、黒く焼きの入った南蛮鎧が入っている。

もう、それをまとうだけの体力はない。

左後ろの床の間には、三尺二寸五分厚重ねの長刀が飾ってある。
優美さとはかけ離れた、戦でしか使えない剛刀である。

もう、それを腰に差すことはないだろう。

左の脇には、大きな骨壺がある。

その中には、愛馬松風の骨が入っている。

彼女が逝って、もう五年が経つ。

目の前には、酒の入った大きなふくべ。

そして膳に乗ったおちよこが二つ。

直江山城が来れば、末期の酒を飲むことになるだろう。

慶次郎はいくさ人である。すなわち、死人である。いつ、何時でも死ぬ準備はできていた。それがたまたま、今日であったというだけである。

齢、七十三。生きるだけ、生きた。後悔はない。この時を、待っていたような気もする。

あの世で、自分を手ぐすね引いて待っている奴らも多いだろう
そして、女たち。

つい、口がにやけてしまう。あごをつるりを撫でた。

「む？」

ひっかかりがある。髭の剃り残しがあるようだ。無精髭のまま、
女たちに会うわけにはいかぬ。慶次郎はそばの小箆筥から、小刀と
古い手鏡を取り出した。

黒鞘の小刀の柄には、龍の透かし彫りが刻まれていた。直江山城
から贈られた品である。手鏡は京にいた頃、道ばたの古物商から買
ったものであった。

左手で手鏡を、右手で小刀を持つ。手鏡には、白髪の老人が映っ
ていた。

何か、心にひっかかるものがある。
何であるう。

自分の顔を見て、思い出されるもの。
はて、この白髪頭に……。

「うむ」

慶次郎は苦笑した。何のことはない。慶次郎は養父、前田利久の
顔を思い出したのであった。血はつながっていないなくとも、やはり親
子。顔は似るものかね。そんなことを思いつつ、心のひっかかりの
理由を探す。

はて、親父殿は死ぬときに何とおっしやられたのであったか……。

「おお」

思い出した。

親父殿は無念の人であった。最後まで、叔父の利家殿に荒子の城を取られたことを悔やんでいた。それは、おのれのためではなかった。愛する息子、慶次郎がその大器を納める場所を、自らの無力さによってなくしたことへの悔やみであった。

利久は酒を飲むと、決まって慶次郎にこう言った。

「お前が城持ちの武将であったなら、大名となることも夢ではなかったのに」

慶次郎は、そんな利久の話をいつも苦笑しながら聞いていた。自由が好きな男である。城持ちなど、面倒くさいことは御免被る。正直、叔父がその役割を代わってくれたことに感謝すらしていたのだ。

そして、親父殿の最後の言葉は　。

「お前が大名となった姿、見てみたかったな」

その言葉を、自らの死に際に思い出すとは　親父殿の心残りを、投げっぱなしにしていたことが心に残っていたか。

いやはや、これまでまったく失念していた。あの世で、どんな言い訳をすれば良いかね。苦笑する慶次郎の右手が、あらぬ方向に動いた。

一筋の血が、手鏡に落ちる。

「いかん、いかん」

小刀をおいて、手鏡の血を白装束の袖でぬぐう。と、手鏡が白く光り出した。

「なんと？」

光はますます強くなる。もはや、目の前は真っ白だ。慶次郎は急に前屈みになった。

光の中、手鏡があるとおぼしき場所に身体が吸い込まれている。手について身体を押さえようとしたのも束の間、慶次郎は意識を失った。

「慶次殿！」

直江山城守兼続は、書院のふすまを開けると部屋に飛び込んだ。

与平から渡された手紙には、末期の酒の相手を頼む旨が書かれていた。それを読んだ兼続は屋敷を飛び出し、馬に乗って全力で駆けしてきたのである。

着いてみると、堂森の屋敷は静かだった。人の気配がしない。すぐさま兼続は異変を察し、慶次が待つと書いていた書院へと向かったのである。

しかし、そこには誰もいなかった。
いや、何も「なかった」。

まるで引越をした後のようである。

ただ、部屋の中央に膳に乗ったおちよこが二つあった。
確かに、慶次郎はここで待っていたのだ。

兼続はおちよこを一つを手にとると、縁側の外を見た。

青い空がどこまでも続いていた。

第1章 慶次(2)

空が、広い。

それが第一印象であった。気がつけば、大の字になっていたようだ。

起き上がり、あぐらをかく。右手が何かを握っている。愛用のふくべであった。他には何も無い。慶次郎はとりあえず、ふくべの栓を抜くと一口飲んだ。

「うまい」

にんまり笑うと、辺りを見渡した。ここはどこだろうか。あの世かとも思ったが、違うようだ。なぜなら、誰もいないからだ。

ここがああの世なら、刀槍を持った連中に囲まれているはず。または、女どもが抱きついてくるはずなのである。

慶次郎はもう一口、ふくべを口に運んだ。そして穏やかな口調で言った。

「止めておけ」

慶次郎の後ろに、槍を持ち黄色い鉢巻きをした男が三人立っていた。

ここではとりあえず、その身体的特徴から名前をつけておこう。背の高いノツポ、太っているデブ、そして小柄なチビ。

三人は小沛の街で聞いた噂をもとに、街から三里（約二km）ほど離れたこの地をうるついていたのである。

そこに、空から白い光が流星のように「落ちてきた」。そして光が消えると、大柄な男が大の字になっていた。男は、しばらくするとこちらに背を向けて起き上がった。

こいつが噂の「天の御遣い」か。どんな奴かはわからんが、天から来たのだ。何かしら、金目のものを持っているはず。

背後から近寄ったノツポは、槍を構えた。そして背中からぶすりといこうとしたその刹那、その男は言った。

「止めておけ」

絶妙のタイミングであった。一瞬、動きが止まる。その男は続けて言った。

「見ての通り、丸腰じゃ。何も無いぞ」

そしてくるりと身体を向けると、破顔した。

笑顔だが、そう笑顔だが　もう、槍をつける気持ちはなくなっている。

笑っている、笑っているのだが　まるで、猛獣が牙を見せているような。

「けつたいな格好をしとるのう。元気なのはいいが、老人を敬まわぬか」

「へ……」

そして笑顔のまま、また言った。

「止めておけ」

ノツポは、我に返った。

怖い。

怖い、何だか怖い。このままでは、殺される。

相手は無手であったが、そんな確信があった。慌てて槍を構え直す。

頬に冷たい感触がした。

冷たい？……と、鋭い痛みが追ってくる。

一筋の血が流れ出す。頬には、後ろから差し出された槍の穂が当たっていた。

「もう一度言っぞ。止めておけ」

「おかしなことを。この者は、あなたの命を狙っていたのですぞ」

若い女性の声だ。

ノツポは振り返ることができない。デブとチビは慌てて振り返った。そこには、ノツポの頬に槍の穂を当てたまま、涼しげな顔の妙齡の女性がいた。白い装束を着ている。

「狙われた者が良いといっているのだ。槍を戻さんか」

「しかし」

「しかし、ではない。戻せ」

慶次郎は笑顔のままである。

女性は渋々と槍を戻した。

ノツポ、デブ、チビは何をしたら良いものやらわからない。槍を手にしたまま、目を泳がすばかりである。

「おい、おぬし等」

慶次郎がにこにここと笑いながら、三人組に声を掛ける。

「へ、へい」

もうだめだ。三人組は武器を捨てて平伏する。そんな彼らの頭上から、その怖い男の声がした。

「酒でも飲まんか？」

「はあ!？」

思わず、ノツポは顔を上げる。そこには、ふくべを突きだした笑顔の男がいた。

「なるほどな、おぬしらは黄巾賊というのか」

「へ、へい。そう呼ばれております」

「なんで黄色の布なのじゃ？」

「え、ええと何だっけ、そうそう……」

慶次郎はふくべを三人組に回すと、改めて自分も一口飲み、質問し始めた。

最初は戸惑いを隠さない三人組であった。しかし、慶次郎が目をきらきらさせながら聞いてくるものだから、何だか楽しくなってしまう。気がつけば、慶次郎と三人組は車座になって話に花を咲かせていた。

そんな慶次郎の後ろに、槍を持った女性が立つ。

「天の御遣い殿」

「で、なんで信者になったのじゃ」

「信者になりたかったというより、食うためですかねえ」

「食うため？」

「へえ。うちの村は、お上の連中に根こそぎ食い物を持っていかれてですね」

「ふむ」

「もう死ぬしかないってときに、黄巾賊に入れば少なくとも食い物には困らないと聞きました」

「ほうほうほう」

「でも、結局はこんな有様で……」

「天の御遣い殿！」

「何じゃ、うるさいのう……」

慶次郎は振り返る。そこには、顔を真っ赤にした女性が立っていた。

「そもそも、天の御遣いとは何じゃ？」

「あなたのことですよ！」

「わしのこと？」

慶次郎は怪訝な顔をする。

と、女性は槍を置き、片膝をついた。

「申し遅れました。私は常山郡真定県の出身、名を趙雲、字を子龍と申します。天の御遣い殿が現れるとの予言を受け、お探ししておりました」

「趙……雲？」

慶次郎はまじまじとその女性の顔を見た。

慶次郎が三人組と酒を飲み始めたのは、無論、酒が飲みたかったのが第一の理由である。

どこまでも広がる青い空。

どこまでも広がる平原。

なんともうきうきしてしまったのである。

それと同時に、今自分がどこにいるのかを知りたいという気持ちもあつた。そして話を聞いている内に、どうやらここが中国らしいことがわかつた。今が後漢といわれる時代であることも。

慶次郎は、当代一流の文化人でもある。漢語の読み書きは当然のたしなみであつた。直江山城の屋敷で、史記や後漢書、三国志などの正史を読んでいた。そして黄巾賊という名を聞いて、ピンと来たのである。

慶次郎はいくさ人である。つまり、徹底した現実主義者である。そして目の前の現実から、どうやら後漢末に自分がいるらしいと結論を出した。とりあえず、それが現実でよい。そこに、驚きはない。

だが 目の前の女性は何だ。

趙雲といえは、三国志の英雄。蜀の五虎將軍として知られる『偉丈夫』ではないか。それと、この妙齡の女性はつながらない。

「それがおぬしの名か」

「いかにも」

「それは失礼した。わしは前田慶次郎という」

「前田……どの」

変わった名前ですね とつぶやく趙雲に対して、慶次郎はにっこり笑って言った。

「そう、前田慶次郎。天の御遣いなどではない」

「いや、あなたは天の御遣いだ」
「しつこいのう」

苦笑する慶次郎に、ノッポが言葉を継ぐ。

「旦那。実は、『白き天の御遣い、小沛の東に白き光と共に現れる』
という予言がありました」

「予言？」

「へえ。とにかく予言が当たる管輅という占い師がいるんですが、
その占い師が予言したんです」

「む、だからお前等もここにいたのか」

「ご明察で」

慶次郎は頷くと、趙雲に向き合った。

「しかしだね、こんな老人に天の御遣いをさせるなど、ちょっと人
使いが荒くないかね」

「老人？」

趙雲が目丸くする。

「老人、とおっしゃられたか」

「いかにも」

「私には、どう見ても二〇代にしか見えませぬ」

慶次郎は怪訝な顔をして、趙雲の顔を見る。嘘をついている顔で
はない。振り返って三人組の顔をみる。

三人組はうんうんとうなずいた。

そういえば、手鏡はどこにいったのだ。そんなことを考えながら、慶次郎は右手で髪の毛を引き抜く。

そこには、黒光りする硬そうな髪があった。

第1章 慶次(3)

慶次郎は、改めて自らの身体を見た。なるほど、どうやら老人の身体ではない。うきうきしていたのは、どうやら気分のせいばかりではないらしい。身体そのものが元気なのだ。

左の袖をまくる。そこには丸太のような腕があった。慶次郎はまゆをひそめた。そこには鉄砲傷。これは、長谷堂の戦いで受けたもの。

ということは……。

二十代の自分の身体に魂が戻ったというよりは、七十三歳の自分が若返った身体である、と考える良さそうだ。

「すごい傷ですね」

慶次郎の腕をまじまじと眺めていた趙雲がつぶやく。鉄砲傷以外にも、縦横無尽に走る刀傷、槍傷。それらはまるで模様のようにも見えた。

慶次郎は、そんな趙雲の顔を見た。思いのほか幼い。恐らく、十代の後半、または二十代の前半であろう。

無言で袖を戻すと、慶次郎はノツポの槍を手にとった。そしてにこりと笑うと、趙雲に向かって言った。

「さて、趙雲殿。せっかくの機会じゃ。軽くお手合わせ願えないか」

あどけない表情をしていた趙雲の顔が一気に引き締まる。

三人組はあ然とした。

「本当によろしいのですか」

「かまわん」

「はあ……」

趙雲は困惑していた。

相手は、まるで棒きれのような槍を持っている。彼女の愛槍である龍牙を当てれば、ひとたまりもなく折れてしまうのではないか。しかも、酒を飲んでいいる。

たしかに、大きい。しかし、図体がでかい男というものは、そうじて動きが鈍いものである。そして、概して『男性は女性に劣る』。少なくとも、『この世界では』そうである。

いかに天の御遣いであるとは言え、簡単には負けない自信もあった。

この人は天から来たばかりで、私のことを知らない。『常山の趙子龍』と呼ばれ、知る人ぞ知る存在である自分のことを。

ここは、軽くうちのめして自分の価値を知らしめるのも一興。

「条件はそうだな……戦闘不能になったら負け、というのでどうだ」
「……………」

「ん？どうした」
「いえ」

腹が立った。

そんなにもなめられているとは。

そもそも、この人は本当に天の御遣いなのか
手加減できるだ
ろうか。

「おいノツポ」

「へ、へい」

「お前、審判な。勝負がついたら止める」

「わ、わかりやした」

慶次郎はふくべをノツポに向けて放り投げると、趙雲と向き合っ
た。

「それでは始めようか」

慶次郎が言うと同時に、趙雲は突っ込んだ。
神速である。

一気に決めるつもりであった。
が、すぐさま後ろに飛んだ。

< な、なんだ…… >

目の前の男の雰囲気が一変している。

まるで、野生の虎に出会ったかのようだ。

一見隙だらけのようにみえて、まったく隙がない。

やはり、この人は天の御遣いなのだろう　しかし！

飛び込む。

もう、手加減する気持ちはさらさらない。

神速の槍を、慶次郎の急所目指して突き込む。

ここに至っては、間違つて殺してしまつてもやむなしと思つてい
る。

しかし、当たらない。

棒のような槍で、受け流されている。

そして、慶次郎はじつとこちらを見つめている。

冷や汗が止まらない。

<ふむ、これは真に趙雲であつたか>

慶次郎は考える。彼は趙雲の槍さばきのすさまじさに、内心驚いて
いた。これほどの槍の使い手に出会つたのは、戦国の世でも両手
の指で数える程。しかも、これが妙齡の女性なのである。

となると、これは慶次郎の知っている三国時代ではない。似てい
るが、別の世界と言つことだろう。

慶次郎は趙雲の槍をさばきながら思う。

天は。

天は、自分に何をさせようとしているのだろう。

このような、まるで、おとぎ話のような世界で。

きん。

槍の刃が合わさった音がして、趙雲が後ろに飛んだ。そのまま、二十歩程離れて立つ。

息が弾んでいる。

しかし、目は燃えるようだ。

必殺の一撃が来るか。

何とも分かりやすい 若いのう。

「はっ！」

趙雲は裂帛の気合いと同時に目にも止まらぬ速さで、駆けだした。そして、慶次郎から十歩離れた場所で急に腰をかがめた。

それにつられて目を落としたノッポの目の前から、趙雲が消えた。

慶次郎はその視線を上に向ける。彼女は空中にいた。そして、全力で龍牙を投げつけようとして。

「何！」

彼女の目は、慶次郎が槍を捨てたのをとらえた。無手の相手に槍を投げるのか だが、もう止まらぬ！

趙雲は考えることを止め、ただ全力で槍を投げつけた。

「わしの勝ちだな」

地面に降りた趙雲の首筋に、槍の穂が当てられた。それはノッポの槍ではない。趙雲の龍牙である。

慶次郎はノツポの槍を捨てるやいなや、飛んできた龍牙を掴んだのである。心臓を狙っているのが一目瞭然であったから、それを掴むのはさほど難しくなかった。

そしてそのまま、くるりと槍を返すと趙雲に向けたのである。

「私の……負けです」

次に来る痛みを予感しつつ、趙雲は答えた。

全力であった。最後は捨て身の技だった。しかし、まったく届かなかった。

がつん。

「あいた」

趙雲が頭を挙げると、そこには自分の槍の柄があった。慶次郎が、何をしてるんだという顔でこちらをみている。慌てて、槍の柄を掴んだ。

「流石は常山の趙子龍。神速の槍の使い手。感服いたしました」

慶次郎が頭を下げる。つられて、趙雲も頭を下げた。

「あ、あの……私のことをご存じでしたか？」

「うむ、知っている。この国に並びたつ者がない、槍の使い手である」と

「……しかし、あなたには負けた」

「手合わせをただけよ。いくさではない」

からからと慶次郎は笑うと、ふくべをノッポから受け取って口を付けた。そして、趙雲に渡す。

「一口、どうかね」

「い、いただきます！」

趙雲はふくべに口を付ける。芳醇な香りが口内に漂った。

「このような酒、初めてですぞ」

「む、そうか」

「お返しと言ってはなんですが……」

趙雲は乗ってきた馬に戻ると荷物から小さな壺を取り出し、その蓋を開けた。そして慶次郎に差し出す。

慶次郎はその壺を受け取ると、その中身を無造作にひとつかみ、口に放り込んだ。

「これはうまいな……」

「メンマと申します」

「いや、これは初めての味だ」

もりもりと食べる慶次郎。そして振り返ると、黄巾賊の三人組に声を掛けた。

「おぬしらもどうだ！」

「あ、それは、その、特別な」

趙雲は慌てた。秘蔵のメンマなのである。しかし、慶次郎の笑顔にダメとは言えない。

「ん？どうした？」

「ええい、どうぞ存分に食べて下され！」

「いや、恩に着る」

にこにこしながら、慶次郎は三人組のところに歩いていった。

なんて人だ。

負けたのに、悔しくない。殺し合ったのに、すがすがしい。

自分を殺そうとした相手と、まるで昔からの友のように酒を飲んでいる。

この人は、きっと天の御遣いだ。

いや、そうでなくとも。

趙雲は一人うなずくと、慶次郎の背中を追いかけた。

第1章 慶次(4)

慶次郎は困っていた。この男を困らす状況など、なかなかあるものではない。しかし、困っていた。とても、困っていた。

あぐらをかいた慶次郎の前には、土下座をしている四人。趙雲と黄巾賊の三人組である。

慶次郎は、再度同じ言葉を繰り返す。

「いや、だからな。その、真名とやらを受け取るわけには……」
「……何とぞ!」「……」

四人が言葉を繰り返す。

「いや、だからな……」

趙雲が土下座したまま、その背後で同じように土下座する三人を振り返る。

「いいか!もう一度だ!大きな声で!」
「……へい!」「……」
「……」

無言になる慶次郎の前で、四人は再度言葉を繰り返した。

「……何とぞ、真名を受け取って下さいませ!」「……」

慶次郎は空を仰いだ。

なんでこんなことに……。

半刻（一時間）程前のこと。ふくべが空になったのを機に、趙雲は姿勢を正すと慶次郎の前に座った。

「前田殿」

「うむ？」

慶次郎は、空になったふくべを逆さまにし、最後の一滴を飲むとしていた。そんな慶次郎の顔を見つめながら、趙雲は問う。

「お名前を、正しく教えて下さいませ」

「ん？ああ。『こちら』ではわかりにくいかもな」

慶次郎はふくべを懐に入れると、指で地面に自らの名前を書いた。

前田慶次郎。

まあだ、けいじろう　と何度かつぶやいた後、趙雲は慶次郎に
正対する。

「前田慶次郎殿。先程の勝負、真に感服いたしました」

「いやいや。勝負は時の運。趙雲殿の槍さばき、実に見事であった」
「それで、その……」

趙雲の顔はいつの間にか真顔になっていた。先程までの薄く桃色に染まった酔い顔が嘘のように、その顔は白磁のごとき端正さをもつて慶次郎に迫る。

「ん？どうした？」

慶次郎は、そんな趙雲に顔をずつ、と近づけた。趙雲の顔は一瞬で真っ赤になり、身体ごとさつと後ろに跳ぶ。そして首をぶるぶると振ると、改めて慶次郎を見据えて声を張り上げた。

「ま、前田慶次郎殿！」

「う、うむ」

思わず、姿勢を正して頷いてしまう。

「私の武技を一顧だにせぬその技量。そして、それを誇らぬその度量 惚れ申した！」

「な？」

「しからは、お願い申し上げます。私の真名を受け取って下さいませ」

「真名？」

「私の真名は『星』と申します。これからも、よしなに」

そう言うと、星はその頭を小さく下げた。

何だか、告白されているようだ そんなことを考えながら、慶次郎は答えを返そうとする。

「趙雲殿。その……」

「ちよいとお待ちを」

「何じゃ？ノツポまで」

気がつけば、黄巾賊の三人組も慶次郎に向かって姿勢を正して座

っている。ノツポがその左右に座るデブ、チビの顔を見た。彼らが頷くのを確認すると、ノツポはやはり星と同様に真剣な面持ちで言った。

「わしらも、旦那に惚れやした。是非とも、真名をお預けいたしたく」

慶次郎は腕を組み、静かに目をつぶった。四人は、その返答を待って息を止める。

しばらくして慶次郎は目を開けた。そして、声を発した。

「真名って何じゃ？」

「……は……？」

慶次郎以外の四人の気持ち、初めて一つになった瞬間であった。

「……ですから、真名というものはとても大切なものなのです」

「ああ、わかった。わかった。存分にわかった」

「いや、慶次郎殿はわかっておられぬ。私が、いや、われらがどれだけの覚悟で……」

星が真名について説明し始めて、四半刻（三〇分）が過ぎようとしていた。慶次郎は、助けを求めるように三人組に目を向ける。三人組は申し訳なさそうに、首を振るばかりである。いつの間にか、星は慶次郎を「慶次郎殿」と呼ぶようになっていた。

星の話を聞いて分かったのは、真名はそう簡単に人に預けるものではないこと。よほど相手に惚れ込み、信じられた場合にのみ、打ち明けるものであるという。

日の本における「諱」^{いみな}によく似ている。しかし、心許した人々の間では通常使われるということであれば、一種の愛称に近いようにも思われた。

「本当にわかっているのですか！そもそも真名というのは……」

また繰り返そうとしている。もしかして、酔っているのだろうか。日本の酒は初めてだろうし、酒量を誤ったのかも知れぬ……。そんなことを思いながら、慶次郎は星に問う。

「ということは趙雲殿。おぬしはわしに惚れたということか？」

「はい。そう申し上げました」

「しかしだな、会ってすぐに惚れたと言われてもだな」

「ふ、愚問ですな」

星は腕を組んで慶次郎を見上げた。星の背丈は、慶次郎よりもずっと低い。見上げるその姿は、何とも得意げに見えた。

「先ほど申しましたように、私は慶次郎殿に同じ武人として惚れたのです。僭越ながらこの趙子龍、諸国を巡り歩き見聞を重ね、人を見る目はそれなりに養ったといささか自負しております。ましてや、慶次郎殿は天の御遣い。真名をお預けすることに、何の異存がありませんよう」

「その割には、ずいぶんと顔を赤くしていたではないか」

「な………！」

星は目に見えて狼狽した。組んでいた腕を外すと、よろよろと後ろにたたたらを踏む。

「そ、それは、慶次郎殿が急に顔を近づけたりするから！」

叫ぶようにそう言うと、星はきつ、と慶次郎を睨んだ。

「……もしや、私が女性として慶次郎殿を慕い、真名をお預けしたなどと勘違いなさっているのではあるまいな？」

「わかつておる、わかつておる、十分にわかつておる。勘違いなどしておらぬ。ただの冗談じゃ。だから、そう怒るな」

「……」

「……どうした？」

「……いや、それはそれで腹が立つというか」

「何？」

「この気持ち、何でしょう。初めてです」

「？」

慶次郎は首を傾げる。

星も不思議そうに首を傾げた。そしてしばし黙考すると、やにわに槍を逆手に持ち、槍の柄で慶次郎の頭を軽く叩いた。

ぼこん。

「……何をするのじゃ」

「いや、よくわかりませんが、こつすると何やらすつといたします」

星が口元に笑みを浮かべている。鼠を見つけた猫の顔だ。その顔は、ほんのりと赤い。

「……おぬし、やはり酔ってるな」

「それでは、もう一度」

「待て！」

「待ちませぬ」

慶次郎は駆けだした。その背中を怒っているような、それでいて喜んでいような顔の星が追いかける。

どちらも本気ではない。戯れである。いずれにせよ、妙齡の女性が振り回す槍から逃げ回る大男の姿は、いかにもおかしかった。

その姿を見て、黄巾賊の三人組は笑った。久しぶりに、腹の底から笑った。

そして、冒頭の光景に戻る。星は顔を地面に伏せながら、涙声で訴えた。

「……なぜ、われらの真名を受け取って下さらぬ。なぜ、主従としての誓いを拒まれるのか」

星は顔を伏せたまま、右手で顔を拭った。

気が済むまで人の頭を叩いておいて何を言う……ん？いつの間に主従としての誓いまで。そんな慶次郎の気持ちとは裏腹に、黄巾賊の三人組も「趙雲殿の言つとおり」とばかり、しきりにうなずいている。

「われらには……慶次郎殿にお仕えする価値がないということですか」

「いやいや、そういうわけではなくてな」

「だったら、なぜ！」

星が顔を上げた。怒り心頭といった感じである。星からすれば、それだけの覚悟を持って預けた真名であった。それをあっさり拒否されるとは、自分の価値がくびられたような、そんな憤りもあった。

やはり、先程の涙声は嘘泣きであったか。食べぬおなごだ。そんなことを思いながら、慶次郎は頭をかく。

やれやれ。

「勘違いするな。価値がないのは、わしじゃ。わしに、その価値がないからよ」

「何をおっしゃる！慶次郎殿は、私に勝った！負けて言うのも何ですが、私の技量はかなりのもの。それを赤子の手をひねるように相手された慶次郎殿はまさに万夫不当！お仕えするのにこれ以上の方はおりませぬ！」

「星よ」

「……はい！」

真名を呼んでくれた。そのことに喜びを感じたのも束の間、星は息を呑んだ。いつの間にか、慶次郎が真顔になっている。

「わしは、強いだけだ」

「は？……」

慶次郎は続けて言う。

「強いだけでは主はつとまらぬ。理想だけでは主はつとまらぬ。主とはつまるところ、自らを慕うものたちを飢えさせぬ力を持つものことよ」

「……慶次郎殿？」

星の問いかけには答えず、慶次郎は空を見上げた。いつしか日は西に傾き、空はうつすらとあかね色をさしている。

友はいた。皆、戦乱の世を独りで生き抜く力を持った、類い希なる漢たちだった。

だが、部下はいなかった。

独りでは生きていけない　　そういう存在と関わることを、恐れていたのかもしれない。

守るべき存在が増えることを、疎んでいたのかもしれない　　自由で、いたかった。

なあ、親父殿。やはり、わたしには大名など無理なんじゃないか。

そして叔父御　　利家殿。あんたは、本当に偉かったな。

「異国に来たばかりのこのわたしに、そのような力はない。おぬしらが真名とやらを預けるような、ましてやおぬしらの主たるような価値は、今のわたしにはないのじゃ」

「慶次郎殿……」

「いや……今までもなかったのかもしれない」

そう言う慶次郎の顔は、星には見えなかった。

第1章 慶次(5)

黄巾賊の三人組は、慶次郎に頭を下げた。

「旦那、どうもお世話になりやした」

「わしは何もしておらん。こちらこそ、いろいろと教えてくれて助かった。礼を言う」

慶次郎が頭を下げる。三人組も、慌ててもう一度頭を下げた。

星は慶次郎の後ろに一步下がって立っている。そして、半刻(一時間)前の慶次郎と三人組のやりとりを思い出していた。

結局、慶次郎は四人から真名を受け取らなかった。いや、星からは強制的に受け取らされている。既に聞いてしまったし、その名で呼んでしまった。しかし、それ以上はどうしても真名を受け取るうとしなかった。

そして星も含めて、彼らが慶次郎の下につくことを認めようとはしなかった。そんな慶次郎に、ノツポは恨み言を言った。

「結局、旦那みたいな偉いお方には、わしらみたいな野盗崩れは用なしってことですかい」

「あ、兄貴！」

デブが慌ててノツポを抑えようとする。その腕を振り払って、ノツポは続けた。慶次郎の顔が見れない。地面を見つめながら、口か

ら呪詛がこぼれていく。言ってはいけない、そう思いながら止まらない。

「どうせ、わしらは虫。しかも、害虫ですからね」
「おい」

慶次郎の声が出た。顔を上げた。目の前に火花が飛んだ。何だかわからなかった。しばらくして、慶次郎にビンタを食らったことに気づいた。

「な！……」

つつかろうとするノツポに、慶次郎は静かに言った。

「なあ、ノツポ」

「……」
「お前、虫をきちんと見たことがあるかね」

「……」
「虫は全力で生きてるぞ。どんなときも、生き抜くために必死だ。そうして命をつなぎ、子どもにその命を伝えていく」

「……」
「わしはな。生きることが一番素晴らしいことだと思っている。生きていれば何でもできる」

「後悔することも、それを乗り越えることも」
「……だ、旦那」

「お前は確かに虫かもしれんな。だが、わしもまた虫じゃ。虫同士じゃ。どちらが偉いかどうかなんて、関係あるものかよ」

そう言うと、慶次郎は頭を下げた。

「お前のような部下がいれば、わしも心強い。しかし、今のわたしはその力はない。お前を養えん。お前が、わしに抱いている何かを、今のわたしには実現できん。……すまん。だから」

頭を上げると、慶次郎は照れくさそうに横を向いた。そして、アゴをかきながら言う。

「わしにその力がついたら、訪ねてこい。そのときは、第一の部下にしてやるぞ」

「だ、旦那！」

「……慶次郎殿。私の立場は？」

「おぬしは、わしの女ということかどうかじゃ」

星は口を開けたまま固まった。その顔を見て、慶次郎はノツポの耳に口を寄せる。

「……冗談、また通じなかつたかのう」

「旦那。逃げた方が良くと思います」

慶次郎が振り返ると、そこには笑顔を浮かべて槍を振りかざす星がいた。

三人組が振り返り、振り返り離れていく。慶次郎はその度に、律儀に手を振り返す。その頭には、大きなたんこぶがある。

その隣で、星は慶次郎に問うた。

「さきほどの件、本気ですか？」

「ん？おぬしをわしの女にするということか？」

「……もう一つ、たんこぶを増やしたいのですか？」

「断る」

「まったく……」

ぶすつとした顔で、星は言う。

「彼らを部下にするということですよ」

「さあて、な」

「そもそも、あなたはこれからどうするおつもりで」

「さあて、な」

三人組が、また振り返る。

慶次郎は笑顔で、大きく手を振る。

星はため息をついた。

そんな星に、慶次郎は言う。

「天が」

「天が？」

「決めるだろうさ、そんなこと」

「天が……」

星は、空を見上げた。

慶次郎たちの姿が、地平線の向こうに消え去った頃。三人組は、小沛から見て東にある故郷の村に向けて急いでいた。すでに日は落ちかけ、夕日が彼ら三人の大きく長い影を作っている。

もう、黄巾賊に戻るつもりはない。それより、荒れ果てた故郷の村を、自分たちの手で元に戻そうという意気込みに燃えていた。

自分たちは虫かもしれない。それでも、村の子どもたちのために、できることがあるはずだ。慶次郎の言葉を思い出す。自分たちが死んだ後でもいい、彼らが笑えるように、喜んで虫として死んでいこう。

そして、機会があつたなら、もし旦那が国を建てたなら、そのときは……。

「ん？」

ノツポは空を見上げた。空が白く輝いている。まるで、旦那が現れたときのよう……。と、空から白い光が流星のように『落ちてきた』。そして光が消えると、若い男が呆然と座っていた。その服は、夕日を浴びてきらきらと白く輝いている。

あの男も、天の御遣いだろうか。
きよろきよろと辺りを見渡している。

無理もない。不安なんだろう。
しかし、大丈夫。旦那がいる。

きっと、旦那と同じ場所から来たんだろう。じゃあ、仕方ないな。旦那のところに、連れて行ってやろう。仕方ない、仕方ない。

もう一度、旦那に会える。そう思うと、ノツポはうれしくなつた。デブとチビの顔を見た。すぐにわかった。こいつらも同じ事を考えている。

もう、のんびりしていられなかった。三人は若い男に向かって全力でかけた。槍を持った手を、ぐるぐると振る。

「おーい！」

若い男が、こちらに気づいた。夕日に照らされたその顔は、引きつっている。座ったまま、必死で後ずさった。

む、コイツ、もしかしてオレたちを……。

そこで、ノツポの意識はとぎれた。

どうしたのだ……。
いったい、何が……。

ノツポは鉛のように重いまぶたを開ける。視線は地面の上だ。目の前に、デブとチビが倒れている。

わかる。

助かるまい。

そのくらいは、わかる。

わかるくらいには、殺してきた。

視線を移す。若い男の前に、黒髪の若い女性が片膝をついている。その隣には、血に濡れた青龍刀のようなものが あれで切られたのか。その女性の後ろには、桃色の髪の毛のやはり若い女性、そして子どものような体躯の、槍のようなモノをもったやはり若い女性が立

っていた。

野盗か何かと、間違われたか。

よりによって、人を助けようとして……。

慣れないことは、するもんじゃねえ……な。

……これも天罰……なの……か……。

ノツポは、デブとチビに目を移した。彼らの顔は、既に土気色になっていた。見れば、肩から腹にかけて一直線に大きく鋭利な傷口がある。何とも見事に斬られたものだ。恐らく、自分にも同じような傷口があるのだろう。しかし、もはや何も感じなかった。

とりあえず……こいつらと一緒に死ねる……。

虫にしては、ましな死に方……。

……ねむ、い。

寝て、しまおう……。

ノツポのまぶたが閉じかけたとき　チビがつぶやいた。

「そ、そらの」

デブが反応した。

「そ、そらの」

ノツポが続けた。

「かなた、へ」

三人組が別れを告げる前。星が「ちょっとお待ち下され」と赤い顔で林の中に消えていった。だいぶ飲んだし、そういうことだろう。ふと、ノツポは聞いてみた。

「旦那は、これからどうするつもりなんで」「うーん」

慶次郎は、頭の後ろに手を組んだ。

「わからん！」「わからん？」「いや、わかっているような、わかっていないような……わしも悩んでいる」

ノツポは少しうれしくなった。旦那ですら、悩む。

「だけどな」「はい」「いつの日か、必ずやってみたいことは、ある！」「はい」「見ろ！」

慶次郎は両腕を大きく広げると、周りをぐるっと見渡した。ノツポにとっては見慣れた風景である。そして、吠えた。

「空が果てしなく続いている！地が果てしなく続いている！どこまでも行ける！」

「どこまでも……」

「ここならば！わしは全力で……どこまでも行けるだろう。この命

が尽きるまで、前に進めるだろう」

「命尽きるまで……」

「そう、わしは空の彼方まで行ってみたいのじゃ!」

慶次郎は目をキラキラとさせている。ノッポは思う。この人ならば、行ける。きっと、空の彼方まで行ける。

「そ、そのときは」

「ん?」

「わしも、わしもついていっていいですかね?」

ノッポが夢見るような顔でたずねる。慶次郎はにっこり笑った。

「応ともよ!」

「わ、わしも!」

デブが続く。

「オ、オレも!」

チビも続く。

「応!」

慶次郎は答えた。そして四人は、笑った。地平線を眺めながら、指さしながら、笑った。

北郷一刀は、何が何だかわからない状況にあった。

寮のベッドにダイブしたつもりが、気がつけば見知らぬ場所にいた。そして野盗のような三人組が現れたかと思うと、いきなり槍を振り回しながら迫ってきたのだ。彼らは夕日を背にしていたから、その表情はわからなかったが……。

必死に逃げようとしたその刹那、背後の森から飛び出してきた長髪の美少女が、あつという間に彼らを切り伏せたのである。間一髪だった。

野盗たちはびくびくと動いている。何かうわごとを言っているようだ。その言葉を遮るように、長髪の美少女　関羽と名乗ったが話を続ける。

「ですから、あなたは天の御遣いなのです」

「いや、そんなこと言っちゃって」

「あなたは予言者の管輅の言うとおりに、この地に現れました。そして、管輅の予言は外れたことがございません」

「いや、でも、そんな……」

混乱する一刃に対して、関羽はため息をついた。

「とりあえず、ここから移動しませんか。もう、日が暮れます。それに、この辺りには黄巾賊の連中がうろついています」

「黄巾賊？」

「はい。弱きを襲い、漢を脅かす不逞の輩。……いわば、世の害虫です。先程、あなた様を襲おうとした連中です」

「害虫……」

一刃は、倒れている野盗たちを改めて見た。落ち着いて見れば、

黄色いはちまきをしているだけのただの農民にも見える。だが、その手には粗末であるとは言え、槍が握られているのも事実だった。

桃色の髪少女が言う。

「それじゃ、小沛に戻ろっか！」

「お待ち下さい」

「ん？何？愛紗ちゃん」

「小沛は、予言がなされた場所です。当然、多くの人たちが天の御遣いに関心を抱いています。そうした場所に、いきなりお連れするのはどうかと思います。きっと、混乱を招くでしょう」

一刀に対して膝をついた姿勢のまま、愛紗は長姉にそう告げた。しかし、伝えていない部分もある。

管輅の予言は、いまや国中を駆け巡っている。それで、この世の中に対する憂いは強いのだ。その予言に現れた『天の御遣い』に対する中華の人々の関心　希望は計り知れない。

小沛につれていけば、天の御遣いを欲する人々に、きっと彼は取られてしまうだろう　あの、私利私欲にまみれた連中に。彼らは天の御遣いを担ぎ、それを御旗としてこれまで以上に権力争いに没頭するに違いない。官もまた、腐っているのだ。

天の御遣いをそうした連中に渡してしまうのは、まさに宝の持ち腐れ。いや、害にしかならない。天の御遣いは、真にこの国を憂い、正そうと思っている人々　そう、私たちにこそふさわしい。今は、あまりにも力がない私たち。そんな私たちが義勇兵を集めるには、そして世に認めてもらうためには……。

汚れ役は　私が引き受ける。中華の平和のために、人々の笑顔を
を取り戻すために、そして桃香の理想を叶えるために、私は天の御
遣いを利用する。後ろ指を指される覚悟はできている。そして……

『あの人』の希望を汚した黄巾賊を

見棄てた官吏どもを

私は決して許さない。

愛紗は、血に濡れた青龍偃月刀を手に立ち上がった。

「……下？に、向かいますよう。あそこなら、知人がいます。住む
場所にも当てがあります」

「じゃ、そうしよっか！」

「わかったのだー！」

三人が歩き出した。慌てて、一刀もついていく。ふと、倒れてい
る野盗たち　黄巾賊たちを振り返った。もう、彼らは動かない。
だが、かすかに微笑んでいるように見えた。

死んでしまったんだ……。

それまでは、自分が殺されなかったことに対する安堵だけを感じ
ていた。しかし、その　安らかな死に顔を見て、初めて心が痛ん
だ。自分は確かに「助かった」。けれども、同時にそれは彼らを殺
すことだった。

自分がここに来なければ……彼らは死ななくてすんだんじゃないだろうか……。

それとも、関羽たちが来なければ、やはり自分が死んでいたのか……。

「天の御遣いさまー!？」

劉備の心配そうな声が聞こえる。気がつけば、立ち止まっていたようだ。三人が振り返ってこちらを見ている。

出会ったばかりの自分を待っていてくれる。海のものとも山のものともつかぬ自分を案じてくれている。誰も頼れないこの世界で、今はただ、そのことが単純にうれしかった。

「今、行くよ！」

一刀は地に伏した三人に向けて手を合わせると、劉備たちに向かって走り出した。

夜の帳が降りた。

草原に、季節外れの鈴虫の鳴き声が響き始めた。

若虫なのだろうか。その鳴き声は、ぎこちない。

けれども、いかにも楽しげで　まるで、夢でも見ているかのようだった。

第2章 御遣(1)

「消えた？」

「へえ。今日の昼間までは、確かにそこに座っていたと思うんですが……」

酒屋の店主が答える。

星は、申し訳なさそうに慶次郎を見上げた。

黄巾賊の三人組と別れた後、慶次郎は星に頼んで小沛の街まで案内してもらった。天の御遣いの降臨を予言したという占い師、『管輅』とやらにまず会ってみようと思ったのである。

街への道すがら星から聞いたところでは、管輅はいつも、街の中心にある広場の隅に座っているらしい。

何を聞かれても、何を言われても、黙り込んでいる。黒いボロ布をまとっており、わずかに汚い灰色の髪の毛、もしくは髭のようなものはみ出してみえる。風呂には入らないのか、犬すら近寄らぬ異臭が漂っていたという。恐らくは、老人 星の見立てでは老婆ではないかということだ。

管輅は時折、立ち上がって予言を叫ぶ。そして、その予言は必ず当たるのである。いつしか、管輅の前には小さな祭壇が築かれ、食べ物が供えられるようになった。もっとも、それは腐ることはあれ、減ることはなかったという。

その予言が必ず当たるといふ占い師、管輅。その人物ならば、自分なぜこの世界に呼ばれたのか、その理由を知っているような気がした。しかし。

「これで手がかりは消えたか」

「申しわけござらぬ」

管輅の姿は、広場にはなかった。広場前の酒屋の店主によれば、今日のお昼頃、急にいなくなった。いや、気づいたらいなかったらしい。お昼と言えば、慶次郎が星に会ったちょうどその頃であった。

と、店主がおずおずと声を掛けてきた。

「あ、あの」

「何じゃ？」

「もしや、あなたさまが管輅の予言にあった天の御遣い様でございますか」

「ああ、この方は……」

「いや。残念ながら違う」

それに答えようとする星を、慶次郎が遮った。慶次郎の目を見て、星は察する。そして不服そうに黙りこんだ。

「予言通り、白い服を着ておられますが……」

「いや、これはわしの国、東方にあるのだが。その国の旅装だな。はるばる旅をしてきてこの街のそばを歩いていたらと、黄巾賊の輩に襲われ身ぐるみ剥がされた。途方にくれていたところ、こ

のお方に助けをいただいたというわけじゃ」

「はあ」

「何でも、天の御遣いとやらと探しに来たとのこと。最初は勘違いされて苦労したわ。難儀なことよ。……だが、せつかくの機会。この街にて、しばらく世話になるうと思つとる。よろしくな」

にかりと慶次郎は笑う。主人は納得がいかない顔をしながらも、曖昧にうなずいた。ふいに、慶次郎がぐるりを振り向く。広場の時間が動き出した。

見られている。

是非、会つて欲しい人たちがいる。そんな星に連れられて、慶次郎は広場からほど近い旅館に来ていた。そこには、星と一緒に旅館に滞在しているという二人の女性がいた。

「あなたが、天の御遣い様ですか」

程々と名乗った女性がふんわりと話しかける。頭に変な置物を乗せた、なんとも眠そうな顔をした少女である。

「よろしければ、その証拠を見せていただけませんか」

こちらは、戯志才と名乗った女性だ。眼鏡をかけた知的な雰囲気的人物で、につこりと微笑んでいる。

「だから稟、先ほど言ったではないか。私は確かに見た。慶次郎殿が、天から白い光とともに降りてきたのを」

彼女たちの話を聞いていたうちに、程？と戯志才の二人は主君を求めて旅を続けていることがわかった。この小沛の街を起点として、いろいろな土地に出かけているらしい。星はいわば、彼らの用心棒である。まだここにいるということは、お眼鏡にかなう主君がいな
いということか。

確か、程？と言えば　まあ、星こと趙雲もここにいます。曹操、袁紹、孫策、そして劉備。彼ら英雄たちは、まだ歴史の表舞台に現れていないのかも知れぬ。それとも、目の前の二人が曹操に仕官しない歴史もあり得るのか　そんな慶次郎の思考は、星の怒鳴り声に遮られた。

「だから、何度言わせるのだ！慶次殿は白い光とともに天から降りてきた！天の御遣いに間違いない！」

「しかし、その証拠はどこにもありません。確かに白い服を着ていますが、その素材ならこの街でもすぐに仕立てることが可能です」

「稟！」

「光っていたといいましたが、昨日は快晴。白い服が反射して、光って見えただけなのでは？」

話は平行線をたどっているようだ。仕方なく、慶次郎は声をあげた。

「あゝ、ちょっと良いかな」

三人が揃ってこちらを見る。慶次郎は軽く頭をかくと、話し始めた。

「まず、わしは天の御遣いではない」

「慶次郎殿！」

「しかし、別の国から来たことは確かだ。その国の名を『日本の』という、ここからずっと東にある国だ」

「ひのもとですか」

「ここから東、海をへだてて浮かんでいる島国だな」

仮に今、日本に戻っても兼続たちには当然会えぬのだろうな
そんなことを思いながら、慶次郎は東の方向に顔を向けた。

「聞いたことがあります。秦の始皇帝が、不老長寿の薬を探させるために道士を送ったといわれる国ですね。別名『蓬莱』というとか」
「蓬莱といえば天の国の別名。やはり、慶次郎殿は天の御遣いだろう」

そう胸を張る星の顔の前で、慶次郎は右手をひらひらと振ってみせた。

「だが、わしは天から啓示を受けたわけでも何でもないと 髭を剃っておつたら、いつのまにかこの国に来ていただけのことよ。多分、何らかの怪異にあつたのだらう。すまんな、星」

「慶次郎殿……」

星が納得のいかない顔をしている。星とすれば、『自分より強い男』という一点だけでも、慶次郎が天の御遣いである証拠となり得た。だが、当の慶次郎が勝負については触れるなどあらかじめ念を押していた。それこそ、友人に会って欲しいという星の願いに対して慶次郎が出した条件だったのである。

それゆえの、星の不服顔であった。それにはかまわず、慶次郎は彼女の友人たちに問う。

「さて、程？殿、戯志才殿。あなた方はこの街に詳しいのですかな」
「旅の起点として長いので、いささか」

「それはありがたい。頼みがある」

「頼み？」

「うむ。職を紹介してくれまいか」

「職、ですか……」

「うむ。日の本から怪異によってここまで運ばれたのはまだしも、
路銀も頼るべき当てもなく、ほとほと困っておった。そんな時、お
二方に会えるとは、まさにこれぞ天の配剤」

「……」

戯志才は、無言で慶次郎を眺めた。そして、ちらりと程？に目を
やった。程？がにっこりと頷く。

「……いいでしょう。職を紹介します」

「おお、助かる」

「いえ　こちらとしても『渡りに舟』」

戯志才は立ち上がると慶次郎に促した。

「ついてきて下さい」

連れて来られたのは、街の外れにある屋敷であった。それほど大
きな建物ではない。しかし、質素ではあるが質の良い調度品が揃っ
ていた。富豪の洒落た別荘といった印象の建物である。

戯志才によれば、今は街を離れている知人の屋敷らしい。自由に

使つて良いと言付かっているが、女三人では不用心なため、使つて
とを躊躇していた。だが、慶次郎がいれば安全であるう、と。

「どういうことじゃ？」

「つまり、この家の警備係をして下さいということですよ。または、
私たちが旅をするときのお留守番ですか」

「そんなに、わしを信用して良いのか？」

「貴重品はいつも身につけています。これまでは書物の倉庫として
使つていたので、価値があるのはそれくらいですね　まあ、あな
たに読めるとは思いませんが」

戯志才は、慶次郎を値踏みするように言った。

「いや、おなご三人に男一人、それで良いのかということよ」

「ご心配なく。ここにいる星はこの国では並ぶ者のない槍の使い手。
失礼だとは思いますが、仮に何かあったとしても、恐らくはあなた
では相手になりますまい」

何か言いたそうな星を尻目に、慶次郎は深く頭を下げた

「かたじけない。恩に着る」

「お礼は無用です。この屋敷にいることは自由ですが、賃金は食事
代程度しか出しません。ご了承を」

「稟！」

「また、この屋敷の持ち主が戻つたら、遠慮なく出て行ってもらい
ます。よろしいですか？」

「承知つかまつつた。異論はない」

そう答えながら、慶次郎は戯志才の本心について思った。

彼女の言い方には、何かひっかかるものがある。また、自分を挑発しているようにも感じた。そもそも、星がいれば警備係はいらないだろう。留守番だって、もっと適役の人物がいるはずだ。

もつとも、自分は天の御遣いではないと早々に判断されたのかもしれない。賢い人間ならば、そうするであろう。屋敷に置いておくのは、友人である星への配慮　せめてもの情けということか。

無理もない。

天の御遣いであることを証明する方法は、すぐには思いつかなかった。また、それと証明するものも、やはり思いつかなかった。白い麻の服が、何の証明になるだろう。

それでも、下手に天の御遣い扱いされるよりはずっと気楽であった。そもそも慶次郎自身、自らを天の御遣いと認めるつもりは、これっぽっちもなかった。

以後、慶次郎は気楽な居候として、屋敷で書物を読みながら時間を過ごした。まずは書物から、この国を知ろうと考えたのである。彼にとつて、漢文の読み書きは当然の教養であった。日の当たる部屋の縁側に大きな敷物を敷いて、ごろりと横になって書物を読む。既に読んだことのある書物も多かったが、竹簡に書かれた真新しい『古典』を読むのは、なかなか新鮮な体験であった。

一緒に住んでいる筈の程？、そして戯志才に会うことはほとんどなかった。そもそも、彼女らはあまり屋敷に戻ってこない。たまに戻ってきてても、慶次郎と顔を合わせずに寝室に戻ってしまうのが常

だった。時折、程？が訪ねてきて日本の話をせがむことはあった。しかし慶次郎がその話に付き合うことはなく、やがて訪ねてこなくなつた。

代わりにといいわけではないが、ほぼ毎日、星が慶次郎に会いに来た。程？たちが旅に出ないときは、基本的に暇らしい。最初は槍を合わせたがつっていたが、慶次郎に應じる気がないのを悟り、早々とあきらめた。以後、書物を読む慶次郎の傍らで槍の手入れをしたり、昼寝をしたり、自由気ままに過ごしている。

そして夜になれば、慶次郎の酒の相手などをした。その過程で、慶次郎から親しい者は彼を「慶次」と呼ぶと聞き、すぐさまそう呼ぶようになった。「真名のようにすな」と喜んでいる。

慶次郎は書物に飽きると街に出て、店を覗いて回つた。やはり異国、知らないもの、珍妙なものがたくさんある。好奇心旺盛な彼はいろいろと質問をしては店主たちを困らせた。もつとも、最初に会つた酒屋の主人とは懇ろになり、いまでは新しい酒について議論するまでになつている。

そのような日々を一カ月程続けたとき、旅装の三人がやってきた。

「慶次殿」

「ん……」

星の声に、読みかけの『孫子』から目を離す。

「どうした」

「我々はこれから徐州の首都、下？に向かいます。一ヶ月程で戻ります」

「ほお。なかなかの長旅だな。気を付けられよ」
「はい……」

星は浮かぬ表情をしている。

「いかがでした」

「実は……」

そんな星の言葉を遮って、程？が話す。

「実はですね。下？に現れたらしいのですよ」

「現れた？」

表情を感じさせない顔で、戯志才が続けた。

「ええ。『本物』の天の御遣いが」

第2章 御遣(2)

星たちが旅立った翌日。慶次郎はいつものように屋敷の縁側に敷物を広げ、その上に寝転がって書物を読んでいた。

ふと、顔を上げて庭を眺めた。なかなか広めの庭で、中央には瀟洒なあずまやがある。塀の向こうには、街の中心街が見えた。まさに中華風といった五階建ての真っ赤な建物が、その存在を誇示している。

時刻は昼。太陽の光が心地良い。

「だいぶ、減ったな」

慶次郎は、屋敷の周りの監視の目が減ったことを実感する。

徐州の地に『天の御遣い』現る。そのことを、慶次郎は戯志才に告げられる前に知っていた。というより、それは既に街中の噂になっていた。

噂によれば、確かに管輅の予言通り、天の御遣いは小沛の街の東に白き光と共に現れた。彼は世を憂う人々の前に姿を現すと、彼らを引き連れて徐州の首都である下？へと向かった。そして、下？は瞬く間に空前の繁栄を迎えた。それも皆、天の御遣いのおかげということになっている。

結果として、街の人々の慶次郎を見る目も変わった。単なる、ちよっと変わった旅人として見るようになったのだ。それは慶次郎にとって、ありがたいことだった。

そして屋敷に来た直後は十を越えていた監視の目は、下？の天の御遣いの登場の噂とともに減り続け、今や二、三程度にまで減っていた。

ばたり。

慶次郎は書物を床に置く。これでほぼ、屋敷にある書物は読み尽くした。残りは、片手で数えるに足りる。

そろそろ、潮時か。

慶次郎は立ち上がり、部屋の隅に歩いて行く。そこには、星が槍の練習用に置いていった櫓の棒がある。慶次郎はそれを無造作に掴むと、天井をその先で突いた。

「きゃん」

女性の悲鳴が上がった。

「おい。降りてこい」

「……」

「降りてこぬなら、こちらにも考えがあるぞ」

「……」

一瞬の間があった。天井の隅の天井板がそろりと横に動く。と、そこから長髪の女性が飛び降りてきた。頭には、鉢金のようなものを巻いている。背負っている身長にも迫ろうとする大刀は、日の本の刀だろうか。

「おぬし、名前は」

「……」

「まあ、明かせぬよな。すまんの」

軽く頭を下げる慶次郎に、少女はびくつく。

完全に油断していた。この一ヶ月、目の前の男はひたすら書物を読み、寝転んでいた。ただ、それしかしていない。自分の監視に気づいている素振りなど、まったくなかった。

そしてこの男、見ているだけで眠くなってくるのである。とにかく、心が穏やかになってくる。この時間、慶次郎が書物を読むその天井で居眠りをするのが、ここ最近の周泰。明命の習慣になっていた。それが、気がつけばこんな事態になっている。

「今日は、良い天気だ」

「……はい？」

いきなり、妙なことを言い出した男に、明命はつい言葉を発してしまった。

「せつかくの機会だ。おぬしの主に挨拶に来いと伝えよ。そして、言いたいことがある言えば言え、とな」

明命は息を止めた。それは。

「なに。主と相談して決めれば良い。来たくなければ、それはそれでかまわぬ」

「はあ……」

「それにしても」

慶次郎は、状況がつかめない明命の姿をまじまじと見る。

「な、何ですか」

「……おぬし、傾いているのう」

「へっ？」

本当に、何が何だか明命にはわからなかった。

夕刻。二人の主従が早足で慶次郎の屋敷に向かっていた。

「なんで、ばれたのよ」

「やむを得ない事情で……申しわけございません」

「それにしても、あなたが見つかってしまっなんてね。そんなに、その『前田』って男はすごいのか？」

「うっうっ……とにかく申しわけございません」

涙目になりながら、明命は孫策　雪蓮についていく。

雪蓮は思う。ああ、面倒くさい。面倒くさがって時間を潰していたら、気がつけば夕方になっていた。

こんなことになるなら、本命の下？は冥琳にまかせず、自分が行くべきだった。もはや天の御遣いとは思えない存在のために、無駄な時間を使いたくない。

孫家に天の御遣いの血を入れるためには、一刻も早く『本物』を抑える必要があるのだ。実際、明日は冥琳の帰りを待ってあらため

て下？に向かう予定であつた。

「そもそも、私や冥琳が徐州まで来ることないでしょうに」

「そう、おっしゃらないで下さい。天の御遣いの見極めは、恐れ多くて私たち程度では無理だとか存じでしょう？」

「だけどさー」

ぶつぶつ言いながら、雪蓮は慶次郎の屋敷に飛び込んだ。

「入るわよー」

雪蓮は声をかけると、返事もまたずにかずかと部屋に入り込んだ。適当に話して、すぐに帰るつもりだった。

「ねえ……」

と、雪蓮は息を止めた。

大きな男が一人、こちらに背を向けて座り、酒を飲んでいた。その隣には、大きな酒瓶がある。夕日の影になった背中は、さながら黒い壁のようだった。その姿はまるで 雪蓮は目を大きく見開いた。

「お父様……」

男が振り向いた。

「雪蓮様？」

明命の声に、振り返らずに雪蓮は答えた。

「帰りなさい」

「え、でも……」

「帰りなさい。これは、命令よ」

一瞬の躊躇の後、明命は雪蓮の背中に頭を下げた。出て行った。

静寂。

と、雪蓮はふらふらと歩き出す。そして慶次郎の側まで歩いてくると、ぺたりと座った。そんな雪蓮に、慶次郎は無言で酒杯を回す。そんな風に、時間が始まった。

気がつけば、雪蓮は慶次郎によりかかり、酒をついでいた。二人の間に、これまで会話は何も無い。酒瓶が半分空になった頃、ようやく、雪蓮が言葉を発した。

「あなた、天の……まあ、いいか」

「どうした？」

「名前、なんて言うの」

「人の名前を聞く前に、己の名前を言ったらどうかの」

「……まだ、言ってなかったかしら。私は孫策。字は伯符よ」

「……わしは前田慶次郎」

「ふーん」

雪蓮は慶次郎の背中に、そつと腕を回す。

「あなた、私のお父様に似ているわ」

「そうかね」

「といつても私、顔は覚えてないの。……覚えているのは背中だけ」

「……」

「こんな、背中だった」

雪蓮は、慶次郎の背中を優しく撫でる。

「ここには、独りで住んでるの？」

「今はな」

「今は？」

「ああ。普段はわし以外に、おなごが三人いる」

ぎゅうと雪蓮の右手が、慶次郎の背中を掴んだ。

「……どうした、孫策」

表情を変えずに、慶次郎が静かに尋ねる。

「何でもないわ。……惚れてるの？」

「誰にだ？」

「とぼけないですよ。その三人」

「……いや。だが、恩がある」

「……そう」

再び、慶次郎の背中を雪蓮は撫で始める。そして、聞いた。

「惚れてる女はいるの」

「ああ」

「……」

雪蓮の手が止まる。

「……というより、『いた』というのが正しいか」
「いた？」
「もう、この世にはおらん」
「そう……」

雪蓮はまた、慶次郎の背中を撫で始めた。そして、また聞いた。

「ねえ、どんな人だった」
「ん？」
「その、女性よ」
「ふむ。わしには、うまく例える言葉はみつからん。ただ、わしの友は……」

カルロスの顔を慶次郎は思い出していた。

「『世界を得るに等しい女だ』と言っていたな。わしも、そう思う」
「！」

雪蓮の手が止まった。そして、また聞いた。

「ねえ、『雪蓮』と呼んで」
「しえれん？」
「私の真名」
「……受け取る理由がない」
「……これから、作ればいいじゃない」

雪蓮は表情を変えずに言葉を続ける。爪が背中にめりこみ始めた。

「……憎い男」

「……憎まれるほど、おぬしを知らん」

「……これから、知ればいいじゃない」

慶次郎の背中から、血がにじみ出した。

第2章 御遣(3)

「私は周瑜と申す者。こちらに我らが主君、孫策様がご滞在と聞き、参上いたしました」

雪蓮が訪れた翌日の朝。入口の鐘が鳴る音を聞いて応対に出た慶次郎は、二人の女性と向かい合っていた。眼鏡を掛けた褐色の肌の女性と、昨日天井から飛び降りてきた黒い長髪の少女である。

「確かに、ここにいるぞ。……おい、雪蓮！」

冥琳はその流麗な眉をひそめた。真名を許しているだと。

あのばかめ……。

ほどなくして、奥の部屋からしどけない格好の雪蓮が出てきた。

「どづしたの？冥琳」

「……」

冥琳はため息をついた。

「こんなところにいたのか。探したぞ」

冥琳は語気を強めた。

雪蓮、冥琳、そして明命の三人は庭のあずまやにいた。彼女らが

囲む丸い卓の上には、三つの茶碗が載ったお盆がある。先程、慶次郎が置いていった。意外においしいので、冥琳は驚いた。

庭に向かう部屋の縁側近くの床に、寝転がって書物を読みふける慶次郎の姿が見える。そんな男を見ながら、雪蓮は冥琳に問うた。

「結論は？」

「ああ。『本物』だ。下？の天の御遣いとやらは」

「……ふーん」

気乗りのしない声で雪蓮は答えた。冥琳は話を続ける。

「かの者が下？に到着するやいなや、諸葛亮と鳳統が現れて主従を申し出た」

「あの、伏龍と鳳雛が？」

「ああ。それだけではないぞ。他にも魏延、黄忠、嚴顔……いずれも知るものぞ知る、猛将たちが主従を申し出ている」

冥琳はお茶をすすする。

「彼が下？に来て二週間後、黄巾賊八千が来襲。州牧の陶謙は心労で倒れてしまった」

「それで？」

「下？の兵士はそのときわずか二千。しかし、倒れた陶謙の前に『たまたま』いた天の御遣いの指揮のもと、徐州軍は黄巾賊を奇襲によつて見事撃退。……まあ、これは軍師の指揮によるものだろうが」

「ふーん」

「そこで名を挙げたのが、その黄巾賊を指揮していた波才を見事討ち取った関羽。そして、それに負けじと武威を示した張飛だ」

さらに、と冥琳は続ける。

「彼女らの長姉である劉備は、その類いまれな魅力で下？の『偶像』（アイドル）となつている。いや、彼女だけではない。関羽、張飛、諸葛亮、鳳統……皆、街では大人気だ。彼女らの似顔絵が、市の至るところで売られている。」

それにともない、黄巾賊を恐れていた商人どもが、どつと集まつた。黄巾賊を討つための義勇兵もぞくぞくと集まつている。その兵力は、少なく見積もつても既に三万。……そして御遣いが来て三週間後、陶謙は息を引き取つた。徐州を御遣いに託してな」

そこまで言うと、冥琳はもう一度お茶をすすつた。

「……結論として、天の御遣いは下？に来てわずか三週間で徐州を得たことになる。誰にも恨まれず、誰からも称賛されるかたちでだ。そして今、徐州の首都である下？は空前の繁栄を迎えつつある。」

すべてが、御遣いの力によるものとは思えない。けれども、御遣いがいるからこそその繁栄であることは確かだ。……正直、私は恐ろしい。天が味方しているしか思えない。御遣いは、まさしく『天運』の持ち主と言つべきだろう」

「天運……」

「だが、これで我らの側に引き込むことは難しくなつた。もはや、やつは徐州の英雄だ。我々が御遣いの『種』を得たいと申し出ても、容易に引き受けることはなからう。……特に、やつ回りの連中はな」

「そう……」

「管輅の予言に頼りすぎたな。いくらその予言が外れたことがないとはいえ、小沛に気を取られすぎた。明命もこちらに配置していたし。とにかく、仕切り直した。何とか、天の御遣いとつながりを作らなくては」

「そうねー」

気のない返事を返し続ける雪蓮に、流石に冥琳は声を荒げた、

「おい、雪蓮！」

「何よ」

「空返事はよせ。真面目に聞いているのか？」

「聞いているわよ」

「お前が思いついた、天の御遣いの血を入れて……計画。ほぼ、潰えたのだぞ」

「考えてみると、お馬鹿な計画よねー」

「……お前がそれを言うか」

冥琳はがっくりと肩を落とすと、ため息をついた。そして、雪蓮の視線の先を追う。

「……そんなに、いい男か」

「そんなに、いい男よ」

「……」

雪蓮は慶次郎の姿を見つめ続ける。冥琳がその横顔を睨み続ける。張りつめた時間が過ぎていく。

何も発言できない。明命は、今にも胃袋が破れそうだった。

「……まさか、後を蓮華様に譲るとでも言うのではあるまいな。冗談でも許さんぞ」

「蓮華に後を譲る……」

雪蓮は冥琳の言葉を繰り返す。そして頷いた。

「譲つてもいいわ。それで、あの人が振り向いてくれるなら」
「雪蓮！」

「でも、だめね。……せめて、『王』にはならないと」
「雪蓮？」

「呉に帰るわ。……早く、王にならなくては」
「しえ……」

冥琳は言葉を止めた。

昨晚、慶次郎は雪蓮を抱かなかった。酔いつぶれた雪蓮を奥の寝室に運ぶと、戻って独り、酒を飲み続けた。らしい。起きたとき、当然あるべきと考えていたその温もりは隣になかった。その時に感じた寂しさ、そして……。

雪蓮の瞳には、狂気にも似た光が宿っていた。

「あの人を、振り向かせるわ」

「慶次、世話になったわね」

「なに。旨い酒が飲めた」

「こちらこそ」

「そういえば、雪蓮」

「なあに？」

「おぬし、何をしに来たのだ？」

「忘れちゃった」

雪蓮はちろりと舌を出すと、くるりと背を向けて足早に屋敷を出

て行った。冥琳と明命は慶次郎に一礼すると、慌てて雪蓮の後を追いかける。彼女の足は、速い。

一刻も早く、呉に帰ろう。

そして 袁術を潰す。

そうしたら……。

彼らが街の中央部に至ったとき、雪蓮がぐるりと振り向いた。猫のような笑顔 既に、先ほど冥琳に見せた一瞬の狂気は消えている。そんな彼女を、冥琳はじろりと睨んだ。

「何よ、冥琳。怒ってるの？」

「当たり前だ。……さっき、自分が言ったことを忘れたのか？」
「私が言ったこと……？」

雪蓮は右手の人差し指を顎に当てて、首を傾げた。

「ああ、蓮華に後を譲るって言ったこと？」

「そうだ。たかが男のことで、そのような大それたことを……ただの男じゃないわ。天の御遣いよ」

「ふん。天の御遣いが二人もいてたまるか。それに」
「それに？」

こちらの方が、より重要なのだろう。冥琳は息を整えると、静かな目で雪蓮を見つめた。

「好いた男を振り向かせるために、王になると言ったな」

「そんなこと、言ったかしら」

「しらばっくれるな。そんなこと、私はともかく」

そう言うと、冥琳は一瞬、明命に視線を移した。明命はびく、と身体を震わせる。

「……他の連中に聞かれてみる。許されん」

「わかってるわよ」

雪蓮は両手を腰に当てると、静かに言った。

「……私が王となるのは、お母様の無念を晴らすため。そして、孫家を奉じ、命をかけてくれる者たちの居場所をつくるためよ」

「わかっていれば、それでいい」

「だけど」

「だけど?」

「理由は幾つあっても、いいわよね?」

「雪蓮……」

ぐきゅるるる。

緊張を引き裂く緩慢な音が響いた。雪蓮と冥琳が同時に振り向く。その音源は、明命のお腹辺りであった。

「も、申しわけありません!」

「……いいのよ。そういえば、もうお昼ね。どこかで食事でもしましようか」

「あ、それでしたら」

明命がうれしそうに答える。そして、ある建物を指さした。

「あそこはいかがですか」

そこには、五階建ての真っ赤な建物があった。店先から、絶え間なく人々の笑い声が聞こえてくる。なかなか繁盛しているようだ。

「『流流楼』という、この街一番の高級料理店です」

「流流楼……」

「何でも、一年前にできたばかりということ。ここ小沛でも、人気のお店です。私も一度食べたいと……」

「……ほかの店にしましょう」

「しえ、雪蓮さまあゝ」

肩を落とす明命を尻目に、雪蓮は再び歩き出した。

妙に、気に入らなかった。

第2章 御遣(4)

北郷一刀は、徐州の首都である下?にいた。

現在、徐州牧は桃香である。中山靖王の血を引く桃香が、対外的にはもつとも州牧に相応しい。そう主張する軍師、諸葛亮こと朱里の発案によるものであった。朝廷への報告も既に済んでいる。けれども、その桃香が『ご主人様』と呼ぶ一刀が事実上の徐州の主であることは、下?の街に住む者であれば誰でも知っていた。

一刀は、未だその立場に慣れないでいる。現代日本の一高校生が、たった一ヶ月でこの立場に慣れたらその方がおかしい。そもそも、想像することすら難しい三国志の、しかも主要人物が美少女の別世界だ。

しかし、その立場に慣れようと一刀は必死だった。それは、自分を『天の御遣い』と信じる少女たちの期待に応えたいと思うが故である。少女たちの期待。それは『中華の統一』および『平和な世の中』の実現である。

そのように期待されたとき、一刀は本気で逃げだそうと思った。ただの高校生が、三国志の英雄たちの中で何ができるといえるのだろうか。しかし、彼女らの真摯な気持ちに触れるたびに、自らの浅はかさを恥じるようになった。

自分と同一年に見えるような少女たちが、命をかけて世を正そうとしている。そんな彼女らに頼られた。その期待に応えることができずに、日本男児といえるものか。

そんな一刀の態度は、当然のことであるが少女たちの更なる思慕を生んだ。その思慕がやがて恋慕に変わるのは、ある意味自然の成り行きであった。

天の御遣いでありながら、それを鼻に掛けない謙虚な態度。天の国の知識を惜しみなく提供するその知性。流石はご主人様、自分たちの選択は間違いではなかった。彼女らは自らの目の正しさを誇った。

至福の日々であった。ただ女性に、とりわけ妙齡の女性にもて過ぎるのは困ったものだと思っている。

「さて、そろそろかな」

「はい。すでに扉の前でお待ちになっているはずです」

紫苑の返事を聞いて、一刀は改めて竹簡に目を落とした。そこには、これから会う三人の名前が記されていた。胸が躍る。

ようやく、会えるんだ。

目下、一刀は紫苑、桔梗と一緒に人材の選抜を担当している。現在、下?には將軍として愛紗、鈴々、紫苑、紫苑、そして焰耶がいる。しかし、内政を任せる人材がまだ少ない。將軍となる人材もまた、日々増加する兵士たちのことを考えれば、余裕がある今のうちに選抜しておく必要があるように思われた。

才能ある人材を見極める『天眼』、そしてその人材に惚れ込まれる『魅力』。前者は、単なる知識でしかないのだが、の持ち主

とされる天の御遣いにとって、人材の選抜はまさに『天職』であった。

手元にある竹簡の最初に記されているのは程？、字は仲徳という人物である。魏の曹操に仕えたと記憶している。確か、漫画では顔の細長いおじさんだったような。そして二人目は戯志才　この名前には見覚えがない。そして、三人目は趙雲、字は子龍。

ちなみに一刀の三国志知識の元ネタは、コンビニエンスストアで時々立ち読みしていた『週刊モーニング』の連載漫画、『蒼天航路』だったりする。それだけに、自分を助けてくれた三人組があつた劉備、関羽、そして張飛であると知ったとき、その落差の大きさに驚愕した。なんて世界だ。

そして『蒼天航路』において一刀が最も好きなシーン　それは長坂坡で趙雲が活躍する場面である。以来、趙雲は彼が一番好きな三国志の武将であつた。その趙雲が、今あの扉の向こうにいる。

この世界の理として、恐らくは趙雲も美少女、もしくは美女であろう。もし彼女が下？に来てくれたら、この段階で五虎将のうち実に四人が揃うことになる。

仕官してくれないかな　いや、これまでの流れならば、あるいは。

彼自身、自らのもとに集う女性たちが『蜀』に関わる人材であることに、既に気づいていた。

一刀は深呼吸して息を整えると、部屋の入口に控える文官に手を振った。

「お兄さんのつくったお菓子は、本当に美味しいですね」

「ありがとうございます、風。おかわりはたくさんあるから、どんどん食べてくれ」

「ありがとうございます」

彼女は今、すでに三皿目になるホットケーキもどきを食べている。その上には、蜂蜜がたっぷり掛けられている。カロリーという概念を知らない、この世界の住人に感謝だ。

面接するはずであった場合は、いつの間にか軽食パーティと化していた。乱入してきた鈴々が、一刀におやつをねだったためである。程？と戯志才は、それを快く許した。程？にいたっては、既に真名すら一刀に預けている。ちなみに、鈴々はあつという間に五皿程食べ終わると外に飛び出していった。

「北郷様。あなたの知識には驚かされるばかりです。とくに、先程おっしゃった警備体制は画期的ですね」

「ありがとうございます。でも、これはオレの世界では当たり前のこと、別にオレが考え出したわけじゃないんだ」

「そのような謙虚な姿勢も、流石は天の御遣いと言うべきでしょう」

「そ、そうかな……ありがとうございます」

微笑み合う一刀と戯志才　　そうした姿を見て、紫苑と桔梗もまた、微笑み合った。

さすがは、ご主人様。人の心を蕩かす、天与の魅力を持っているっしやる。しかし……。

紫苑は、自分の正面に座っている女性に目を向けた。名を趙雲、字を子龍と名乗ったその女性は、ほとんど口を開いていない。それだけではない。最初こそ一刀のことをじっと見ていたものの、途中で目を離すと、それから一度も一刀を見ようとしなかった。天の御遣いを目の前にした者の態度としては、いささか異常に見えた。

「あの、趙雲殿。お口に合いませんでしたか」

紫苑が笑顔で尋ねる。このようなとき、潤滑油となるのが自分の役割だと認識している。天の御遣いを目の前にして、緊張して話せなくなる女性も多いのだ。

「いえ。大変、結構なお味かと存じます。しかしながら、体調が優れぬもので」

趙雲こと、星は静かに答える。緊張している様子は、ない。むしろ、堂々としている。それならば、なぜ 紫苑には不思議に思っただ。

「あのさ、趙雲さん」

初めて、一刀が星に話しかけた。ぴく、と星の肩が揺れる。一刀は、これまで何度も声を掛けようとその機会を狙っていた。しかし、星となかなか視線が合わない。そこで、あえて話しかけたのである。

「……何でしょうか」

「この下？のこと、どう思う」

「はい。……とても素晴らしい街だと思います。民の顔には笑顔があふれ、将は理想に燃えている。私はこれまで大陸中の街を旅して

参りましたが、これほど活気のある街はなかなかないと」

下？のことをほめてくれた　一刀はうれしくなった。しかし、同時に不安にもなった。なぜ、彼女は笑ってくれない。

「あのさ……」

「失礼」

星がいきなり立ち上がった。皆の視線が星を向く。

「体調を崩しております。まことに申しわけございませんが、お先に失礼してよろしいか」

「趙雲！」

つい、一刀は大声を出してしまう。星は、そんな一刀のことをじろりとらんだ。

「怒鳴ってごめん　でも、聞いて欲しいんだ。」

「……」

「今、徐州はこの首都、下？を中心に繁栄を迎えつつある。ここに
いる紫苑、桔梗、そしてここにはいないけど桃香、愛紗、鈴々、朱
里、雛里　たくさんの仲間たちの頑張りでこうなったんだ」

「存じ上げております」

「……趙雲さん、君も仲間になつてくれないか。君の力が、必要だ。
きつと、君にとっても居心地のいい場所になると思う」

そういうと、一刀は頭を下げた。紫苑と桔梗は言葉を失った。こ
のような無礼な輩に対して、このような態度をお取りになるとは…
…。それに対して、星は下を向くばかりだ。

「おぬし。お館様はこのように申しておる」

「……」

「信義には信義で返す。それがもののふの心意気と思うが」

「……」

「桔梗」

「何だ、紫苑」

「趙雲殿」

「……」

「急にごめんね。ご主人様も一生懸命でつい、大きな声を出しちゃったの。許してくれるかしら」

「……失礼する」

星は下を向いたまま振り返ると、そのまま早足で部屋を出て行った。

「ふー。嫌われちゃったかなあ……」

一刀はしよげた。一番、話したい相手だった。そして彼女が来てくれれば、中華の統一、そして平和な世の中の達成により近づけるだろう。なのに……。

「あの娘、泣いていましたわ」

「泣いていた？」

「ほら、その床」

紫苑は指をさす。一刀は、先程まで星が立っていた場所を見た。床には、小さな染みができている。

「あゝ、すみません」

「風？」

「星ちゃんは、お兄さんを嫌いなわけじゃないんです。下？のことも、ほめていたじゃないですか」

「……でも、一度も笑ってくれなかった」

「星ちゃんは、悔しかったんだと思います」

「悔しかった？」

一刀は首をかしげた。訳が分からない。

「ここ、徐州の首都である下？で、お兄さんは天の御遣いとしての責務を果たし、皆に愛され、そして何より認められています」

「……そ、そうかな？」

「ですが、もしお兄さんが認めてもらえなかったら？ 天の御遣

いであることは確か。敬すべき人物であることも確か。にもかかわらず、そのことを誰も認めてくれなかったら。そして、認めさせる方法もなかったら。……主従を誓った臣下としていかがですか、黄忠殿。 蔽顔殿」

「……」

「悔しくは、ありませんか。泣きたくは、ありませんか」

紫苑と桔梗は顔を見合わせた。この娘は、何を言おうとしている。

風は稟に一瞬目を走らせると、一刀の顔を見た さあ、今日の『目的』を果たそう。

「小沛にも、いらっしやるんですよ」

「誰が？」

「……『天の御遣い』が」

「……え……」

一刀、紫苑、そして桔梗の声が重なった。

第2章 御遣(5)

「はあ……」

下?の街、西側の城壁の上に座り、星は深いため息をついた。まさか、泣くとは思わなかった。……この自分が。

あのような場所で、こともあろうくに涙をこぼしてしまうとは武人として、あらゆる失態である。星は唇を噛んだ。

気がつけば、慶次郎の存在は星にとって大きなものになっていた。

最初は、好奇心だった。白い光とともに舞い降りた『天の御遣い』。そして『女より強い男』という矛盾の体現者。その不可思議さに心惹かれ、共に過ごす気になった。その行く末を見たい、そんな気持ちになった。だからこそ、主従を申し出た。

小沛で過ごした一ヶ月は、慶次郎に対する気持ちを育てるには十分すぎる時間であった。強く、賢く、烈げている、そして 優しい。二人きりで過ごす時間が、何よりも心地良かった。いつしか、彼の所作を目で追う自分に気づいた。だが、それが 恋慕であるとは気づかずにはいた。こんな経験、今までなかったのだ。

しかし、自分の目から熱いものがこぼれた時、ようやくわかった。自分は慶次郎に惚れている。同じ武人としてだけではなく、一人の男性として。

星はつぶやいた。

「困った」

これまで、他人の恋愛ごとに首を突っ込んでばかり回すことを喜びとしてきた。そんな自分が、いつのまにかその恋愛ごとの渦中にいる。

「困った」

もはや、他人の恋愛ごとを笑えない。人を呪わば穴二つ。いや、他人の恋愛を気にする余裕もない。まずは、自分の気持ちをどうにかしなくては。

「困ったなあ」

星は城壁の上で立ち上がった。そして西の方角を見た。そちらには、小沛の街が 慶次郎がいる筈だ。

「……覚悟してもらいますぞ、慶次殿」

先程までの憂い顔が嘘のように、星は微笑んだ。

「そんなことがあるものか！」

愛紗の声が部屋中に響いた。ここは会議の間。桃香の座る美しい椅子を上座として、その左右に徐州の主な武将たちが揃っている。一刀は、桃香の左に立っていた。

ここにいる武将たちは皆、一刀が『天の御遣い』であることから

縁が生じたと言える。したがって、誰が天の御遣いであるかということ、彼女らにとって非常に重要な問題であった。

「愛紗ちゃん、少し落ち着いて。まずは程？殿と戯志才殿の話聞きましよう」

紫苑が愛紗をなだめる。愛紗は下座を睨むように見た。そこには、風と稟が並んで平伏している。

「その者たち」

「はい」

「小沛の街に、もう一人の天の御遣いがいらっしやるとい話。本当か」

「それについては、私がお話いたします」

稟は顔を上げた。

「その天の御遣いは、ちょうど北郷様がこの世に顕現された日、やはり小沛の東に顕現されました。そのことは我が友、趙雲が証言しております。我が友は冗談を好みますが、このようなことで虚言は弄しませぬ。その証言をお疑いならば、私と程？、いずれもお疑いになりますように。そして」

その者は『前田慶次郎』と名乗っております。

一刀は凍りついた。

前田慶次郎……？

震える声で、聞く。

「あの、どんな……どんな感じの人なのかな」

横から、風が口を出す。

「一日中寝転がって書物を読んでいます。日本の出身だと言っていました。風のことをなかなか構ってくれません。いけずな男です。身の丈は六尺五寸（一九七cm）はあるでしょうか」

稟が続ける。

「失礼ですが、北郷様は会話には問題がなくとも、読み書きにつきましてはこれからの由。しかしながら、前田様におかれましてはわが国の教養を既に十分お持ちであり、私たちとて感心させられる程でございます。現在は、小沛の街にある私たちの屋敷にご滞在いただいております」

一刀は思う。似ている。あの『花の慶次』に……。

「馬……そう、馬が一緒じゃなかったかな。大きな黒い馬なんだけど」

「残念ながら……。趙雲によれば、白い服を着て一人、荒野に顕現された」と

どうなのだ。確かめたい。もし、その人が『あの人』ならば……。

黙り込んだ一刀を心配したのだろう。桃香は、左脇に立つご主人様を見上げて言った。

「大丈夫！たとえ、その人がもう一人の天の御遣い様だったとして

も、私たちのご主人様への気持ちは変わらないよ!」

そんな桃香を見て、鈴々と焰耶も言葉を続ける。

「そうなのだ! 鈴々のお兄ちゃんは、お兄ちゃんしかいないのだ!」

「元から私の忠誠は桃香様のものだ。北郷、お前が本物だろうが偽物だろうが私には関係ない」

「焰耶! 口を慎め」

愛紗は焰耶を叱咤すると、必死の面持ちで一刀に迫った。

「ご主人様! そのような者、気になさる必要はございません。無視すればよろしいではありませんか 第一、こちらの世界に来て一ヶ月、何もせずただだのんびりと寝転んで過ごしていただけの男に、天の御遣いを名乗る権利などございません!」

この一ヶ月、愛紗は下?の支持者の力を借りて、全力で天の御遣いたる一刀の喧伝に努めてきた。そのかいあって、一刀は『天の御遣い』として人々に認められ、晴れて桃香は徐州の主となることのできたのである。それを今さら……。

普段の彼ならば、愛紗の迫力に腰を引いてしまったことだろう。

しかしながら、そこにいたのはいつもの一刀ではなかった。

「会いに行く」

「ご主人様!」

「会いに行くよ」

「……」

「その人が、もし、オレの予想通りなら」

愛紗は目を見開いた。ご主人様の目が濡れている。

「その人は、オレの憧れだ……そして」

一刀は諸将をぐるりと見渡して、宣言した。

「きっと、天の御遣いだ。オレにはわかる。それ以外にないよ」

その毅然たる態度に諸将は息を呑んだ。はっ、と頭を下げる。

「風、戯志才。慶次さん……いや、前田慶次郎殿のところに案内してくれ。頼む」

「承知いたしました」

二人は平伏した。そして下を向いたまま、視線を交換する。

そんな二人を、憤懣やるかたない顔をした愛紗が睨んでいた。

「おい、あんなこと言ってるぞ」

会議室を壁一つ隔てた部屋で、二人の男が並んで立っていた。一人は文官の服を着た、栗色の髪の若い男。もう一人は、ふんどしを締めた褐色の筋肉たるまである。

「貂蝉、どう思う？」

「そりゃ、憧れの人が近くにいると知ったら、誰だって一目会いたいと思うでしょうね」

「憧れの人か……目の前に、三国志の英雄たちが綺麗に着飾って揃

っているっていうのに。贅沢な男だ」

そういいながら、若い男の顔はまんざらでもない。

「左慈」

貂蝉と呼ばれた巨躯の男が話しかけた。

「そういえばあなた、ちよつと頑張りすぎじゃない？……蜀の面子が揃うの、ちよつと早過ぎやしないかしら」

「いいじゃねえか。ここは『北郷一刀が中華を統一する世界』。北郷が楽できるなら、それに越したことはないだろう？」

「……」

「趙雲が仕官しないのは意外だったが……好きにさせてもらうぜ。こんな機会　オレが北郷を応援できる機会なんて、滅多にないんだ」

そういうと、左慈は頭の後ろに手を組んで天井を見た。その表情は伺うことができない。

「……左慈？」

「あ、そうそう」

貂蝉の問いかけに、左慈が話題を変える。

「そろそろ、管輅の奴を起こしに行かなきゃならなかったな……また『鏡池』か？」

「『仕事』は終わったんでしょ。しばらく放っておいてあげなさいよ」

「于吉からの連絡があった……追加でもう一つ仕事があるそうだ」

左慈は頭の後ろに組んだ手をとくと、右手でその頭をかいた。

「何でも、大事な仕事らしいぞ」

第3章 冬華(1)

小沛の街から、西へ五里(約二〇km)ほど。『臥牛山』といわれる山があつた。名前の通り、牛が伏せているようなかたちの山である。山壁は急で、断崖絶壁となっている。一つだけ、ふもとから頂上まで上れる道がある。

その頂上には、池があつた。名を『鏡池』という。冷たく澄んだ湧き水で知られている。また、病気が治る霊水としても知られ、小沛の街からも時折その水を汲みに来る者がいた。しかし、最近ではとある理由により、水を汲みに来る者は、ぱったりと途絶えている。

その池のほとりに薄汚れた黒衣をまとい、風に吹かれてよろよるとたたらを踏む小柄な人影があつた。管輅である。

管輅は、疲れ切っていた。その『管理者』という役割に、その魂の牢獄に。これまで、何度『天の御遣い』の顕現を予言してきただろう。百回か、千回か、それとも万回か。もはや、数えてすらない。

『北郷一刀が中華を統一する』この世界で、管輅や貂蝉は、于吉や左慈と敵対関係にある、ことになっている。だが、それは建前であつた。実際には、仕事仲間といって良いだろう。彼らは、いわば天から与えられた管理者という配役をこなす俳優であつた。

一刀たちもまた、繰り返されるこの外史で配役を担う俳優に過ぎない。だが、管輅たちと一つだけ違いがあつた。一刀たちには先に

過ごした外史の記憶がなかった。俳優としての自覚がなかったのである。だからこそ、彼らは繰り返される『たった一度』の人生を精一杯生き、戦い、そして散っていった。

彼らがうらやましかつた。その人生をたった一度と信じて、全身全霊を燃やす彼らは輝いて見えた。わたしも、あんな風に生きてみたい。管輅は心から願った。戦乱の中で『生』を実感したい。好きな男に『恋』を叫びたい。慟哭の中で『愛』を抱きしめたい。

だが、それは叶わぬ夢だった。その夢はいつしか、管輅の心を削っていった。あり得ない夢は、絶望に似る。やがて、身なりにかまわなくなった。身ぎれいにするのも止めた。『徐州の水仙』とうたわれたその美貌は、いまや垢にまみれて老婆の如く乾いている。

そんな管輅の最近のお気に入り、鏡池で入水することである。衰弱した状態で入水すると、絶食して体力を失った体はあつという間に抵抗を止める。すると、眠るように『死ぬ』ことができるのだ。実際には、それすら『仮の死』に過ぎない。管理者に、死ぬことは許されない。それでも、水の底で過ごすその時間は、次の外史までの束の間の安らぎであった。

そのために、管輅は『予言』をした。『百発百中』の予言である。その結果、ここ最近の外史においてその予言はまさに『天のお告げ』に等しいものとなっていた。実際、小沛の街で彼女は半ば神格化されている。

本来、管輅の役割は自称『占い師』である。したがって、その予言は『当たるも八卦、当たらずも八卦』程度のものであることが求

められた。しかし、そのように演技するつもりは既になかった。どうせ、結果は同じなのだ。ならば、さつさと予言という名の『予定』を発表する『仕事』をこなした方が良い。

今回もそうだった。いつも通りの予言　天の御遣いの顕現を伝える仕事を終えて、管輅は鏡池のほとりに立った。

お仕事お疲れさま、わたし。さあて、ゆっくり眠りましょう。

少しだけ気持ちを高揚させて、足を池の深部に進めていく。冷たい水が、速やかに体温を奪っていく。

ほらね、気持ちいい……。わたしは、水の……。底に……。向かって……。

身体が『宙』に浮いていく。

最後に見た光景。それはいつもの暗い水底ではなく、黄金のように輝く水面だった。

雪蓮らが小沛の街を去って一週間が経った。慶次郎は街を出る準備にとりかかっていた。そろそろ、この大陸を見て回りたい。手元に何も無い状況では、今から少しずつ準備せねばままならない。そして、まず必要なのは　。

「馬、だな」

慶次郎は、いつもの敷物の上で考える。慶次郎は大きい。たいて

いの馬は、一日で乗り潰してしまう。松風と出会ってから、至福の時間が続いた。だが、それは奇跡に近いめぐりあわせ。そして現実問題として、馬は高価である。それは、この後漢末の世でも変わらなかった。

正直、現在の警備係兼お留守番の賃金程度では話にならない。忍びの出身の慶次郎ならば、馬泥棒ぐらいはたやすい。しかし、流石にそれははばかれた。

からん。

入口の鐘が鳴った。いつもの酒屋であろう。馬を買う金はなくとも、週に一度の酒の注文は欠かさない慶次郎である。

「勝手に入られよ」

「おじゃまする」

「ん？」

現れたのは、白髭の老人であった。つると頭のはげた、いかにも人の良さそうな。そんな老人が、にこりと笑って慶次郎に問う。

「前田慶次郎殿ですかな」

「いかにも」

「……天の御遣いと噂があった」

「あつたようすな。噂でしたが」

「ふふふ」

「ははは」

二人は微笑み合う。

なかなか食えない爺さんのようだ。慶次郎はお茶を入れるために立ち上がった。

「ここが臥牛山かね」

慶次郎は、岸壁を見上げてつぶやいた。目の前には、幅は広いが水量は少ない滝がさらさらと落ちていく。山頂にある鏡池という名の池から流れ出す滝だと聞いた。その滝壺の前に、慶次郎は馬と共にいる。

慶次郎は今、松風ほどとは言えないまでも、馬体の大きな馬に乗っている。老人から引き受けた仕事の先行報酬であった。過去に、良く似た馬を知っている 『野風』と名づけた。

老人は小沛の街の長老と名乗った。曰く、ここから西にしばらく行くと、臥牛山という山がある。その頂上には、霊水を満たすといわれる池がある。小沛の街の人々にとって、なくてはならない場所だ。

だが、最近妙な噂が立っている。『物の怪』が出るというのだ。実際に、見た者もいる。もっとも、そのあまりの恐ろしさに、姿をはっきりと覚えている者は一人もいなかった。とにかく『巨大な何か』で、『恐ろしく速い』らしい。

今や、誰もそこに行かなくなった。しかし、霊水がなければ助からない病人もいる。対策を取るには、物の怪とは一体何なのかを誰かが確かめなくてはならない。そして、もしそれが存在するのなら

ば退治しなくてはならない。

しかし、その目撃者の話を聞いて、誰もその役を担おうとはしなかった。霊水の池に在るといふ物の怪 祟られでもしたらどうするのか。

「なるほど。その点、小沛の街とは縁もゆかりもないわしならば、死んでも祟られても痛くもかゆくもない、と」

「そこまでは言っておりませぬ。が、そのような考えもありますな」

「食えぬ爺いだ」

「年寄りをいじめますな」

笑い合う二人。実のところ、慶次郎はすっかりその気になっていた。屋敷にこもって一カ月と少し。身体が動きたくてうずうずしている。得体の知れぬ物の怪を見てこいというのもいい。

「では、報酬を決めよう」

「何をお望みですか」

「馬。わしが乗れるような大きな馬だ。そして地図。この国全体が載っているような」

「かしこまりました」

「先行報酬だ。馬を先に渡してもらえぬか。その方が、早く片が付く」

「そうですね。それではさっそく」

次の日の朝、馬が届いた。久しぶりの愛馬に、慶次郎の顔もほころぶ。その日のうちに準備を済ませると、すぐさま慶次郎は出立した。そして今、臥牛山の前に立っている。

「これでは……登れぬな」

急勾配の崖が目の前にある。体重の重い慶次郎は、登攀は苦手であった。捨丸や骨がいれば。

「どうなすった、大将」

振り返る。そこには黒光りする大きな「牛」がいた。

「大将。ここからじゃ無理だ。山に登るには、反対側にある山道を使わなきゃ」

牛が言う。

慶次郎よりも、背が高い。

慶次郎よりも、幅が広い。

慶次郎よりも、重そうだ。

慶次郎よりも、ずっと黒い。

その牛のような大男は、周倉と名乗った。

「わしの名は、前田」

「別に、大将でいいだろ、大将」

「まあ、よかろう」

どうやら、小沛の街へ買い出しに行った帰りのようだ。大きな荷物を背負っている。そういえば、四半刻（三〇分）程前に荷物を背負った大きな牛のようなものを追い抜いた覚えがあった。久しぶりに馬に乗るのが楽しくて、気にも留めていなかった。

「山道か。ここから、どのくらい掛かる？」
「そうさな。馬ならここからぐるっと回って半刻（一時間）ぐらいかな。そこから登ってまた半刻か」
「うーむ」

今、臥牛山を牛に例えれば頭の方にいる。馬で登るには、牛のしっぽの方にある山道から入る必要がある。遠くからはっきり見える山なので、山だけを見て進んできたのがあだになったようだ。目の前に山がある以上、さっさと登りたいのだが　慶次郎は目の前の滝を見て、ふと思った。

「ん？この滝の水は鏡池とやらから落ちてくるのだったな」

「さようで」

「だったら、別の上まで行かなくても、ここで霊水とやらを汲めば良いのではないか？」

周倉は首を振る。大きな首が振られると、ぶーんぶーんと音がするよつな気がする。

「大将。こういうものは、『上』にあるからいいんですぜ。『下』に落ちてくるものはダメなんですわ」

「なるほど。病は気から、というわけかね」

「ちよつで」

ふんふん、と慶次郎はうなづく。

「で、おぬしはどこに住んでいるのじゃ？」

「……山の中腹に。ほら、あそこら辺です。そこで畑を耕してます」「ずいぶんと高い場所にあるのう。なんで、そんなところに」

「あそこならば、うるさいお役人も来ませんからな。……内緒ですぜ」

「なぜ、そこまでわしに話す」

周倉はにやりと笑った。

「お仲間だからですよ」

「お仲間？」

「大将は『侠』でしょう」

「……」

「わかる者にはわかりますよ、大将。どごその、名のあるお方では？」

慶次郎は、苦笑した。今の慶次郎は、この国のいわゆる庶民の服を着ている。にもかかわらず、目に見える肌のいたるところには傷が刻まれていた。そのことが、周倉のそうした解釈につながったのかもしれない。街の人々の視線はそのことも意味していたか。と今さらのように思う。

慶次郎はその問いには答えず、とりあえず軽く頭を下げた。

「すまん」

「へ？なんで大将が謝るんで」

「おぬしが山道の入口ではなく、『ここにいる』理由を教えてくださいのだからう？」

「へっ？」

「あそこまで登るには、滝の後ろに行けば良いのかね」

周倉は目を丸くした。

慶次郎はもう一度言った。

「すまん」

「大将にはかなわねえよ」

周倉は苦笑いをすると、滝壺の側にある木をアゴで指す。慶次郎は、その木に素早く野風をつないだ。

それを見た周倉は、滝の裏側に向けてゆっくりと歩き出した。

第3章 冬華(2)

滝の後ろには、人が一人ようやく歩けるような岩の階段があった。目の前の滝の水を通って、うっすらと太陽の光が差している。

「大将、気を付けろよ」

「おぬしが歩けるんだ。わしに歩けぬことはあるまい」

「そりゃ、そうだ。それにしても、よく気づきましたね」

んっふっふっ。周倉は笑う。

周倉は街に出て買い出しなどをする時、遠回りになる山道を使うのを避けて、滝の裏にあるこの階段をよく使うという。さっさとどいて欲しくて、親切に『遠回り』になる道を教えたっていうのにと笑った。

「いや、最初はおぬしが霊水とやらを汲みに来たと思ったのだがな」
「へえ」

「だが、おぬしはここでは霊水の価値はないという。そして、住処はあの山の中腹にあるという。にもかかわらず、大荷物を背負ってここにしているわけじゃ。」

「……」

「そうになると、わざわざ道を外れてここにいる理由がなんとなく読めた。そこで、かまをかけてみたというわけじゃ」

「やっぱり、大将にはかなわねえ」

そんなことを話ながら階段の中程まで歩いた頃、周倉がゆっくりと振り返った。その表情は、硬い。

「で。大将はどんな目的でここに来たんですかい」

周倉は階段の上から、慶次郎を包み込むように迫った。これまでも、そうしたことを何度もしてきたのだろう。慶次郎の視界は、黒い筋肉で覆われた。

しかし、慶次郎は慌てない。いざとなれば、この男をつかんで一緒に落ちるだけだ。空中ならば、敏捷な慶次郎が必ず勝つ。後は、この男の上にも落ちれば良い。

「『物の怪』じゃ」

「物の怪？」

「うむ。鏡池にいるという、物の怪を見てこいと頼みを受けてな」
「物の怪……」

んっふっふっ。周倉はいかにも面白そうに笑った。そして振り返って慶次郎に背中を向けると、再び階段を登り始めた。

「大将」

「ん？」

「あれは、物の怪なんかじゃありませんや」

「知つとるのか？」

「んっふっふっ。あれはどちらかといえば、『守り神』なんで」

「守り神？」

「おかげで、うるせえ奴らが来なくなつた。物の怪さまさまで」

「ほう……」

「あれは」

「言うな！」

「へ？」

「わしの楽しみがなくなるではないか。いいか、絶対に言うてはな

らんぞ」

慶次郎は必死である。

周倉は呆れた。

大将は大将でも、ガキ大将かい。

んっふっふっ。

周倉は久しぶりに、一緒に酒でも飲みたい男だなと思った。

「大きいな」

慶次郎は感嘆の声を上げた。周倉は自分の住処を『小屋』といていた。しかし、慶次郎の目の前にそびえるのは小さな砦であった。その前にあるちよつとした広場を含めれば、五〇〇人は収容できそうな大きさだ。周倉によれば、滝の裏にある階段はこの砦からの緊急の出入り口ではないかということだった。

「おぬし、こんなところに一人で住んどるのか？」

「いえ。かかあもいますよ。おーい！」

周倉は野太い声で叫ぶ。おーい、おーい、おーい……やまびこが響いた。

「いないみたいですな。まあ、こちらへどうぞ」

周倉が歩いて行く。そのまま砦に入るのかと思いきや、その手前にある平屋建ての建物に入っていった。なるほど、『小屋』である。

周倉によれば、背後の砦は昔のいくさで使われたもので、今は使われていないという。

山の中腹にある平地であり、背後に水源　鏡池を持つこの砦は、籠城すればかなり持ちこたえることができると思われた。もっとも、その平地は今は畑となり、水源はその畑をつるおすために使われている。

「平和じゃのう」

慶次郎は、眼下に広がる絶景を見ながらつぶやいた。

「まったくで」

周倉がお茶を入れている。意外と器用なようだ。もっとも、周倉の前では普通の湯飲みも親指の先ぐらいの大きさに見える。

周倉によれば、砦の前の道を歩いて行けば、山道に合流する。その道を使えば、四半刻（三十分）程で山頂の池に着く。しかし、この砦の裏にある滝の水源となっている水路側にある裏道を使えば、急坂ではあるが二町（二〇〇m）ほど登れば着くとのことだった。

慶次郎はお茶を飲み干して周倉に礼を述べると、すぐさま砦の裏に向かった。唄でも歌いたくなるような気持ちであった。

さてさて。唐土の物の怪とはどんなものか　。

「おお……」

慶次郎はうなった。

その目の前には、まるで硝子のように透明で、鏡のように静かな池が広がっている。これを霊水とあがめる小沛の人々の気持ちも、わからないでもない。水面は太陽の光を浴びて、黄金のように輝いている。

まるで天界の池のような光景に、慶次郎はうっとりした。だから、裏道を出てすぐ左のところに、巨木のようにたたずむ『物の怪』に気づかない。というより、池を見た瞬間に物の怪のことをすっかり忘れてしまっていた。

「うーむ、すごい。これはすごい」

「……」
「これは、一泳ぎしても罰は当たるまい」

「泳ぐのは何年ぶりか 三十年ぶりかのう。いやいや、長生きはするものよ」

「……」

ぼん。

爆発するような音とともに、慶次郎が飛んだ。自分で飛んだわけではない。物の怪に蹴られたのである。

慶次郎は空を飛びながら、なぜか懐かしく思った。あやつに最初に蹴られたのは、いつのことだったか。確か厩橋城の。

「松風！」

慶次郎は叫んだ。逆さまに水の中に落ちようとする慶次郎の目に映った愛馬は、ふん、と横を向いた。

「いやあ、松風。おぬしがここに来ているとは。まあ、わしもこんな風だし、不思議ではないの」

びしょ濡れの慶次郎が夢中で話しかけている。もちろん、相手は松風である。

しかし、松風はふん、ふん、しきりに横を見て、慶次郎のことを見ようとしない。

慶次郎は深々と頭を下げる。

「いや、すまん。本当にすまん。あまりにも池が綺麗でな。われを忘れたのじゃ。本当にすまん！」

がし。

頭を下げる慶次郎の右肩に、松風が噛みついた。これまた、懐かしい感触じゃ。慶次郎がにんまりすると、

ひゅーん。

そのまま池の中に放り込まれた。女心を傷つけた男の罪は重いのだ。

そうしたこと十数回繰り返した。だが、慶次郎は楽しくてたまらない。その度毎に、じゃぶじゃぶ池の中を走りながら松風に謝りに行く。謝っているはずなのに、顔は満面の笑顔なのである。そんな男を、結局は許してしまうのが女である。

松風の姿は、慶次郎と初めて会った頃のように見える。彼女も若返ったのだろうか。

と、松風がくりりと背を向けた。そしてこちらに顔だけ向ける。『こつちに来い』と告げている。

松風は、池のすぐ側にある松林に入っていく。慶次郎はその後を着いていった。そこには、愛用の武具が並んでいた。鎧櫃もある。慶次郎は目を見開いた。

こやつらもついてきたか。何とも愛いやつらよ……。

そんな慶次郎に、松風は鎧櫃の側にある黒い袋のようなものをあごで示した。それはしどとに濡れていた。骨のような手足がはみ出ている。

「……仏、か」

それは、餓死したとでもおぼしき死体であった。松風の菌形の跡のようなものが見える。池に浮いた仏を、松風が哀れに思ったのか拾い上げたのだろうか。霊水とやらを汲みに来て、誤って池に落ちたのかもしれない。

灰色の毛のようなものが、はみ出ている。近づくと、むわっと異臭がした。慶次郎は、ふと星の話を思い出した。

「……管輅？」

証拠はどこにもない。しかし、聞いた特徴といちいち合致していた。生きていれば、慶次郎がこの三国の世に来た理由が分かるかもしれない。だが。

慶次郎はもう、そのことを頭から消していた。仏は、弔わねばならない。それが、生者の最低限の義務である。彼の頭の中にあるのは、ただ仏を安らかに葬りたいという気持ちだけであった。

慶次郎は、管輅らしき体を抱えた。軽い。まるで、小枝のようである。八工が、わっと飛んだ。細い腕が、だらりとたれる。慶次郎は池に向かった。葬る前に、体を清めなければならない。

池の側に着くと、慶次郎はゆっくりと管輅らしき体を地面に置いた。そして腰を下ろし、その身体を覆う布をそつと剥がそうとした。がぶり。

いつのまにか背後に来ていた松風が、慶次郎の右肩を噛んだ。慶次郎は、ため息をつく。

「なあ、松風。怒っているなら、後でもう一度謝ろう。だから少しの間、待っていてくれないかね」

しかし、松風は慶次郎の右肩から口を離さない。怒ったような目で慶次郎を見ている。どうしたのだ？

ぶす。

足下に、小さな矢が刺さった。松風が慶次郎の右肩から口を離す。なぜ、邪魔ばかり入る。慶次郎は腰を下ろしたまま、振り返らずに静かに言った。

「仏を清めるところじゃ。邪魔はしないでもらおう」
「生きてるじゃねえか、その娘」

その声に振り返ると、そこには獵師のような姿をした小柄な若い女が立っていた。左手に小さな弓を、そして右手は矢をつがえている。弓は引き絞られ、その矢は正確に慶次郎の頭を狙っていることが見て取れた。先程の矢は、威嚇だったのだろう。

「娘？」

「わたしや獵師だからね。生き物の気配には敏感なのさ」

「おぬしは……」

「若い娘の服を寝ている間に剥がそうなぎ、人倫にもとるよ」

ひゅっ。

足下のずた袋から、空気の抜けるような音がした。

第3章 冬華(3)

管輅が目を覚ますと、そこは布団の中だった。据えた臭いのする、綿の布団である。小さな、薄暗い部屋の中にいるようだ。いつの間にか、薄い麻の寝間着のような服を着させられている。

右脇に、すぐにも蹴破れそうな木の扉がある。そこからは赤い光が漏れ出ている。夕日だろうか。

体を起こす。時間が掛かった。無理もない。筋肉が細りきっている。遠くから見たら、服が勝手に体を起こしたように見えただろう。

扉の向こうからは、大きな笑い声が聞こえた。陶器がぶつかるような音も、時折聞こえる。酒を飲んでいるようだ。

楽しそう。

憎らしい。

がっかりした。もう、新たな外史が始まってしまったのか。

うんざりした。もう少し、静かに眠らせて欲しかった。

新たに外史が始まったとしたら、『天の御遣い』を予言するまで、あと五年。また、五年。あの街角で、死ぬ日を数える日が始まるのか。管輅はため息をついた。

そこで気づいた。なぜ、私はここに居るのだろうか。新たな外史は、管輅の目に小沛の街の広場の風景が目に入ることから始まる。

外史の始まりと共に広場の隅に座る占い師。それが自分の役割だった筈だが……。

まあ、どうでもいいか。

管輅は下を向いた。

ほんと、どうでもいい。

……消えたいなあ。

……消えたいなあ。

……消えたい。

……。

……。

右脇の木の扉が開いた。黒髪を後ろで結わえた、小柄な女性が入ってくる。管輅が目覚めていることに気づくと、やわらかく微笑んだ。そして木の扉をいったん閉めると、しばらくしてお盆にのせたおかゆを持って来た。

「目が覚めたかい」

「……」

「おかゆ食べな。元気つくよ」

「……」

「せっかく生き返ったんだ。食べようよ」

「……」

無反応な管輅の態度に、裴元紹はため息をつく。彼女は、周倉のかかあ 妻であった。

慶次郎と鏡池のほとりで会った裴元紹は、その説明を聞いて誤解

を解いた。近づいてみると、その娘は餓死寸前の状態と思われた。そこでとりあえず口に水を含ませると、慶次郎の力を借りて、周倉と一緒に住んでいる砦の前の小屋まで連れてきたのである。

その上でお湯を沸かすと、体と髪を丁寧にした。時間は掛かったが、その結果が目の前にいる。銀色の波立つ髪、大きな青い瞳。骨と皮になりつつも、この世の者とは思えないほど美しい女がいる。

目を覚ました管轄に、裴元紹は何度も話しかけた。けれども、彼女は反応しない。濁ったガラスのような瞳は、微動だにしなかった。裴元紹は、こんな瞳を知っている。絶望しきって、心が凍ってしまった人間の瞳。そうした人間に、他人の声は届かない。

「おう、目を覚ましたか」

裴元紹の後ろに、大きな人影が現れた。

……。

……。

なじ。

なじ、じのひじ。

……。

……。

すてき。

ぽっ。

管輅の瞳が、いきなり澄んだ。ガラスが宝石に変わった。青白かった顔は、一瞬で桃色に染まる。あまりの急変に、裴元紹は驚きを隠せない。そんな彼女を尻目に、管輅は慶次郎にいきなり話しかけた。

「はじめまして。私は名を管輅、真名を『冬華』（とうか）と申します」

「……字ではないのか？」
「……」

冬華は頭を抱えた。私のばか！最初から真名を教えてしまうなんて！ まあ、いいか。冬華は一瞬で立ち直ると、改めて目の前の男を見た。

見れば見るほど、いい男である。ただのいい男なら、飽きるほど見てきた。しかし、目の前のこの男はそうした類の男ではない。一目見て、感じた。自分にとって『特別』な、何かだ。

こんなことは、管理者を務め始めて一度もなかった。初めて途切れた、永遠の地獄のループ。そして現れた運命の人。これって、天が私にくれたご褒美ではないかしら。頑張ってきて良かった！最近、すぐに死んでいただけ。

冬華はうつとりと慶次郎を眺めた。はっと、と気持ちを入れ替える。

いやいやいや。流されてはいけないわ。確かに目の前にいるのは、姿形、雰囲気、そのすべてが好みの男。だけでもっと大切なものがある。それは 教養。見掛けがいいのに話が合わない男って、最悪じゃないかしら。付き合う前に、まず確かめなきゃ。うん、私は

冷静。

本人の思いとは裏腹に、いつもの冷静さを放り投げた恋の暴走列車、冬華は自分の好きな詩を慶次郎に向けてそっとつぶやいた。

「勸君金屈卮 満酌不須辞」

思わず、慶次郎は続けてしまう。

「花発多風雨 人生足別離」

冬華の青い目が、大きく見開かれた。

……これって奇跡かしら。

いいえ、きつと運命ね。

ようやく出会えた 王子様。

入水自殺して、良かったわ。

冬華は感極まった。そんな彼女を、裴元紹は眉をひそめて見つめている。この娘、頭に春でも来てるんじゃないかしら。

そんな裴元紹の視線をよそに、冬華は慶次郎に向かってにこやかに話しかけた。

「あの、お酒、好きなんですか？」

「ああ、好きだが……」

「私も、好きなんです！あの、今度……一緒に飲みませんか？」

「う、うむ。だがな」

一拍。

「あー、娘。酒が好きなのは良いが、子どもにはまだ早い。大人になるまで止めておけ」

冬華が固まった。

ぶっちん。

と、爆発する。

「私、子どもじゃありません！ばりばりの大人です！」

「そうか。失礼した。あまりにも起伏のない体なのでな」

な、なんて失礼な男なの……。

餓死寸前なんだもの。

起伏がないのは当たり前じゃないの！

……い、いつもならもう少し……。

冬華の体は怒りでぶるぶると震えた。しかし、恋する女の子は無敵である。冬華はすぐさま立ち直ると、顔を赤らめてそつと聞いた。

「あの、どのような女性がお好みですか。あ、せつかくの機会ですから、今回は体つきについて」

「はあ？」

慶次郎は、裴元紹と顔を見合わせた。

やるか。

やりますか。

「……うむ。胸はこう、どーんな」

慶次郎はまず、自分の胸の前に両手で大きな胸をつくってみせた。そして、お尻を冬華に向けて突きだしてみせる。

「そして尻は、ばーんな。そんなおなごが好きかの」

「わー、大将つてば、ひどーい。さいてー。女を体で判断するなんてー」

斐元紹はお盆を両手で持ったまま、大袈裟に首を振ってみせる。

「いやー、やっぱりおなごの体はみやびでない」と

慶次郎は腕を組んで目を瞑ると、これまた大袈裟に頷いて見せた。そして、冬華の顔をちらりと見る。その体がわなわなと震えている。

ぶっちん。

と、爆発した。

「貸しなさい！」

冬華は、斐元紹の持つお盆の上からおかゆのお椀を奪うように手に取った。そして、それをれんげでがつつとかき込む。そして一瞬の間の後、

「あっつーー!!」

と、豪快におかゆを吹き出した。

ぷっ。

慶次郎と裴元紹も吹き出した。

「どわはははは！」

「ひーっ、ひーっ」

「なに、笑ってるんですか！熱い！水！みずー！」

冬華は涙目で要求する。

「はいはい」

裴元紹は目に涙をためながら立ち上がった。慶次郎はまだ、腹を抱えて笑っている。

「もうー！！」

冬華は頭から湯気が出そうな程に顔を赤くすると、箸を握った手で目の前の男の体をぽかぽかと叩く。だが、慶次郎の笑いは止まらない。つぼに入ってしまったようだ。

「……もうー！」

そんな慶次郎の姿を見て、冬華も笑い出した。こんなに楽しい気分になったのは久しぶりだった。冬華は、自分が死ぬつもりだったことをすっかり忘れていた。

そして。

自分のつばやいた詩が、いつの時代の詩であったのかを忘れていた。

第3章 冬華(4)

「星ちゃん」

「ん？……風か。どうした」

慶次郎が鏡池で管輅たちに出会ったちょうどその頃。下？の城壁の上に立つ星のもとに、風が現れた。

星の瞳からは、すでに涙は消えている。目が若干赤くなっていること以外は、いつもの星であった。そんな友の姿に安堵しつつ、風は城壁の下から話しかける。

「あのですねー、お兄さんがですね」

「お兄さん？……ああ、北郷殿か」

「はい」

風は、にっこりと微笑んだ。

「小沛の『天の御遣い』について、お話があるらしいですよ」
「……何？」

星の目が光る。

次の瞬間、彼女は城壁の上から地面に向かって飛び降りていた。

「小沛の街にいるという『天の御遣い』に、会わせてくれないか」

風が呼んできた星に対して、一刀はいきなり頼み込んだ。ここは会議の間である。桃香を始めとして、徐州の主な武将たちが揃っている。

星の目には、一刀が慶次郎を天の御遣いと確信している様が、ありありと見て取れた。偉人は、偉人を知る。天の御遣いには、ほかの天の御遣いの存在がわかるのかもしれない。やはり、慶次殿は天の御遣いなのだ。

みるみるうちに明るくなる星の顔を、一刀はうれしそうに眺めていた。そして、続けて言った。

「風や戯志才の話を聞く限り、その人はとても優れた人であるように思う。彼女らが言うように、きっと天の御遣いだと思うよ」

とても優れた人、だと？

星は、左に並んで立つ友人たちの顔を見た。二人とも、素知らぬ顔をして前を向いている。

おかしい。

この二人が、慶次殿を『ほめた』というのか。しかも、天の御遣いとして。

星が口を極めて主張しても、稟は慶次郎が天の御遣いであると決して認めようとしなかった。その態度は、普段の彼女と比較すると意固地になっているようにすら見えた。

風は慶次郎から話を聞きたがっていたが、だからといってとりた

てて敬っていたとは思えない。どちらかというところからかっているようにすら見えた。

しかしながら、一刀の話を聞く限り、二人は自ら慶次郎が天の御遣いであることを告げたようだ。本当は、彼のことを認めてくれていたのだろうか　一瞬、そんな風にも思った。

しかし、思い返せば彼女たちの慶次殿に対する態度はどこかおかしい。違和感がある。それは……。

「趙雲？」

「は」

「君が小沛の天の御遣いと一番親しいと聞いたよ。紹介、お願いできかな」

「はい。お任せ下さい」

星は、一刀に向かって頭を下げた。

風や稟に対して、納得しかねる気持ちはある。彼女らは、何か企んでいるのかも知れない。それでも　下？の天の御遣いの訪問は、慶次郎が世に出る機会になるかも知れない。そのことが、星には何よりもうれしかった。

冬華が目を覚ましてから、一週間が経った。

かつて、スタンダールはその著書『恋愛論』で次のように述べている。条件で人を好きになるということは、本当の恋ではない。本当の恋とは、相手の条件とは関係なく、逢った瞬間に雷にうたれた

ように恋することをいうのだ。そう、本当の恋とは雷撃のようなものなのである。

そして、今。

冬華は、そういう恋の中にいた。

彼女の体は、すっかり元に戻っていた。そのみずみずしい肌を見た者は、それが一週間前の彼女であると信じないだろう。その玉が転がるような声を聞いた者は、それが一週間前の彼女であると信じないだろう。

そこには、銀色の波立つ髪、大きな青い瞳、そして白い肌の匂うような乙女がいた。かつての外史において『徐州の水仙』と讃えられた占い師、管輅の本当の姿である。

『管理者』が己の死を肯定しない限り、その復元能力は神に等しい。それが、管理者という存在。だからこそ、世界は維持される。

だが、彼女が管理者だと知らない者にとって　いや、そもそも管理者という概念自体、通常は誰も知らない　、急激に復元していく冬華の姿は、どう見ても異常であった。冬華自身、慶次郎たちにそう思われることを恐れた。

しかし、慶次郎を始めとして、誰もそのことには触れなかった。そもそも、揃いも揃って『普通』の連中ではない。人には人の都合がある。変わったやつだな。その程度にしか思わない。そんな連中であった。

冬華は、うれしかった。初めて、管理者ではない『ただの女』に

なれた気がした。例え、それが勘違いであつたとしても。

毎朝、周倉は畑に向かう。いつも大きな弁当を持っていく。近くに小屋があるのだから戻ってきて食べればと思つのだが、青空の下で食べる愛妻弁当が好きらしい。

裴元紹は、弁当と弓矢を持って山に向かう。狩りをするためだ。彼女の猟果が、夕食の豪華さを決める。

彼らが戻ってくるのは、夕方になってからである。それまでの間、慶次郎と冬華は二人で時間を過ごした。

その日。時刻はちょうど、周倉たちが出かけて一刻（二時間）後。慶次郎は洗濯に取り組んでいた。

鎧櫃の中には、黒く焼きの入った南蛮鎧が入っていた。その詰め物として、慶次郎は愛用の衣服を何着か詰め込んでいた。いつ何時でも、時が至ればすぐさま戦場に向かうための知恵である。

しかし、それらの衣服はずっと鎧櫃に入れっぱなしであつたために皺だらけになっていた。虫食いもある。

そのため、このところ毎日、慶次郎は裏手の水路を使ってそれらの服を洗い直している。そしてそれらを適当に手で絞り、小屋の前に広げたわらの上に干していた。洗えないものは、適当にほこりを払って虫干ししている。

冬華はといえば、縁側に座って南蛮鎧を綿布で磨いている。服は

裴元紹のものを借りていた。どう見ても似合っていないが、本人はまったく気にしていない。

きゅっ、きゅっ、きゅっ。

額に汗がにじみ出る。埃にまみれて鈍い光をまもっていた鎧が、硬い光沢を少しずつ取り戻す。

冬華は、ふと目を上げた。愛しい男の背中が見える。何だか、一緒に暮らしているみたい。

小屋の前の広場では、二頭の馬がのんびりと歩いている。松風と野風だ。

冬華が慶次郎たちと始めて会った日。裴元紹が彼女を介抱している間に、慶次郎は松風を鏡池から連れてきていた。また滝壺のそばにつないでいた野風は、周倉が取りに行ってくれた。二頭は時折、並んで気持ちよさそうに走った。

ぱからっ、ぱからっ、ぱからっ。

規則正しい乾いた足音が、広場に響く。馬格の優れた二頭の馬が、足を揃えて並走する姿は美しい。その毛並みが、太陽の光を浴びて金色に輝いた。

そこには、まごうことなき夢見た世界があった。繰り返される運命から解放された、みずみずしい世界があった。その世界は静謐で、安寧で。幸福に満ちていた。

幸せだわ。あまりの幸福に、冬華は身震いした。

幸せって、こんなに怖いものだったのね。ほら　失うことを想像するだけで、こんなにも恐ろしい。

管理者である自分。占い師としての自分。それに相応しい自分。その立ち振る舞い、その話し方、そのすべてが『決められていた』。どんなにあがいても、運命の轍から外れることはできなかった。

唯一選択できるのが、自死　それですら仮の死であり、『天の御遣い』の予言を終えた後に限られた。その予言の後に、できるだけ速く自死する。それが冬華の、魂の牢獄めいた運命に対するせめぎの抵抗だった。

だから、『決められていない』自分が存在できることに驚いた。自分の中に、こんな『自分』がいることに驚いた。ドジで間抜けでやかましく　思い返せば顔から火が出そう　そして、人を好きになる自分。そんな自分が、存在できるなんて。

讃えられ、畏れられ、崇められた。そんな自分はどこにいつてしまったのか。もしかして管理者としての自分は、自死の繰り返しで故障してしまった　いや『壊れて』しまったのだろうか。

だからこそ、運命の輪から外れることができたのか。……慶次郎に、出会うことができたのか。

それで、いい。

冬華は鎧を拭く手を休めると、縁側から空を見上げた。

透き通るような、青い空が広がっている。
雲がゆっくりと流れていった。

天が、壊れた自分をこのまま放っておくとは思えない。けれども、これが私の望んだ世界。繰り返されない、たった一度の『生』の世界。この時間の、ためならば。

私は、天をも敵にまわす。

第3章 冬華(5)

「けいじー。お昼にしましょう」

「む。もう、そんな時間かね」

慶次郎は顔を上げた。冬華が手を布巾で拭いている。昼食の準備が終わったようだ。

今日の最後の洗濯分をわらの上に広げ終わると、慶次郎は大きく背伸びをした。洗濯物の隣には、マントが虫干しされている。表が黒、裏が猩々緋の、愛用のマントである。

慶次郎は、複雑な気持ちでそのマントを見下ろした。もう一度、これをまとって良いものだろうか。

前の世界において、米沢に向かって京を発つ際に『傾きおさめ』をした慶次郎であった。それは、生きるだけ生き抜いたという満足感によるものであったが……。

「けいじー!!」

「ああ、わかった、わかった」

慶次郎は、小屋に向かって歩いて行く。昼食といっても、朝食の残りである。裴元紹は毎朝大量の料理を作り、その残りを周倉や自分のお弁当や慶次郎たちの昼食分に当てていた。慶次郎たちが来てから、作る量は二倍になったという。十中九は、うちの旦那と大将が食べるんだけどね、と彼女は笑った。

もっとも、周倉たちはそのことに対して慶次郎たちにお礼を求め

るわけではない。慶次郎もまた、特にお礼を言うわけではない。当たり前のように食事を提供し、当たり前のようにそれを食べる。逆の立場になれば、同じことをする。ただ、それだけのことであった。

慶次郎は小屋に入り、食卓の椅子に座る。目の前に、食皿が並べられていく。そこで、慶次郎は妙な感覚に襲われた。

「うーむ」

「どうしたの？」

「何か、『大事なこと』を忘れているような気がするんじゃが……」

「忘れてるってことは、そんなに大切なことではないんじゃないかしら」

「まあ、そういうことかね。さあさ、食うか」

ひひーん。

広場から、松風と野風の呆れたようななきが聞こえた。

その日の午後。慶次郎と冬華の二人は、鏡池へと登る水路脇の道を歩いていく。正確には、一泳ぎしてくるといった慶次郎の後を冬華が追いかけてきたのである。

『わしの裸が見たいのか？』と尋ねた慶次郎の頬は赤くなっている。星といい、こちらのおなごどもには冗談が通じぬ　ぶつぶつとこぼす慶次郎である。

しかしながら、池が見えるとそんな気持ちもあっという間に消えた。すぐさま服を脱ぎ捨て、ふんどし姿になる。

その姿を見た冬華は顔を赤らめて、ぷい、と横を向いた。しかし好奇心に勝てず、ちらちらと慶次郎の体を見ている。

そんな冬華をにこにこしながら見ていた慶次郎であったが、さりげなく、聞いた。

「そういえば、冬華」

「なあに、慶次？」

「おぬし、なぜこんなところにいたのじゃ」

「それは……」

冬華の顔が、笑顔のまま凍り付いた。そのまま、おこりに掛かったように震え始める。そして、そのままの表情で慶次郎の顔を見た。

自分が、ボロ布をまとい浮浪者のごとき姿でこの池で『死んでいった』理由。それを、どうやって説明せよというのだろう。自分が予言者 いや、占い師であるとまでは説明できよう。しかし、永遠に繰り返される決まった人生に絶望して『死んでいた』のだと……誰が信じてくれるのだ。

そして冬華は、慶次郎に自分のことを何一つ話していなかったことに気づいた。慶次郎もそうである。自分のことを、何一つ話していない。だけれども、二人はそのことを気にしなかった。そんなこと、関係なかった……この、瞬間まで。そんな私たちの関係が。これから話す内容で変わる いや、終わる？

永遠にも思える繰り返しの中で、初めて出会った希望。それは一瞬にして蜘蛛の糸に変わった。凍った笑顔の瞳には涙がうかび、こぼれ落ちそうになった その刹那。慶次郎は、足から池に飛びこ

んだ。

ざぶん。

大きなしぶきが立つ。

「きゃっ！」

「まあ、いずれにせよ。こんな場所で溺れるとは、とことん間拔けたヤツよのう」

慶次郎は笑う。もう、冬華に『天の御遣い』について聞く気持ちは失せている。彼女が普通の存在でないことは既にわかっていた。冬華がつぶやいた詩　あれは唐代のものである。この後漢末にはありえない、詩。

なるほど、聞けば『天の御遣い』について教えてくれるかもしれない。自分がこの世界に来た理由について教えてくれるかもしれない。元の世界に帰れるかもしれない。しかし。

小沛の街で、まるで浮浪者のごとき姿を甘受していたという冬華。百発百中の予言　しかし、それで得られる崇拜を、尊敬を、そして地位を拒絶した。

『天の御遣い』の予言を終えるやいなや、街から消えたという冬華。天の御遣いに会おうともしなかった。

それは予言者としての自分の、いわば自己否定ではないか。多かれ少なかれ、その自己否定が先日事故　自死につながっている

ことは確かであるように思われた。そして、先程の、顔。

慶次郎は思う。たかが別世界に来た程度のこと、おなごを泣かしてもつまらんわ　すまん、兼続。

冬華は慶次郎があげた水しぶきを顔に受け、しばし呆然としていた。そして右腕の袖で顔をごしごしと拭うと、にっこりと笑った。その花咲くような笑顔に一瞬、目を奪われる。慶次郎はきなくさい顔をすると、鼻をかいだ。

「……………ありがとう、慶次」

「何のことかの」

「ねえ、聞いて」

冬華は池のほとりに腰を下ろした。その両足は、所在なげにはたばた動いている。小さな水しぶきが立った。慶次郎は、その左隣にゆっくりと座る。冬華は黙り込んでいたが、やがて穏やかに話し始めた。

「私、ずっと変わらない人生を生きてきた……………わかる、慶次？」

「いや」

「私、ずっと死にたかった、消えたかった……………わかる、慶次？」

「いや」

「私、今自由に生きてるの……………わかる、慶次？」

「いや」

目の前の水面は、黄金のようにきらめき。

空は、地平線まで青く広がっていて。

山の空気は、どこまでも澄んでいて。

隣には、愛しい男がいる。

「私、いま」

「……」

「楽しい」

「……」

「楽しいの」

「……」

「こ、こんな日が、わ、わ、私に来るなんて」

えぐっ、えぐっ。

冬華は泣いている　　いや。涙を流しながら、笑っていた。

感情の上下が激しすぎる。慶次郎はそう思った。しかし、何も言わなかった。絶望から戻った人間は、こうなる。そのことを、慶次郎は経験から知っていた。

すべてに絶望した人間が、希望を見つけたとき。

その光がどれだけまぶしいか　　。

その光の周りを飛び跳ねたくなるだろう。

その光の周りで踊ってみたくなるだろう。

今、冬華はそういう時期なのだ。

予言者としての彼女が、何に絶望していたのかはわからない。そして今、何に希望を見いだしたのかも。だが、それで良かった。笑顔を見れば、それで良かった。

だから、慶次郎は何も言わない。代わりに、両手で水を救うと、冬華の顔にはしゃりと掛けた。

「きゃっ！」

「辛気くさい顔してるのう。ほれ！」

もう一度、水を掛ける。

「もうっ！」

慶次郎は背中を向けると、そのまま池の中へ駆けだした。大きな水しぶきが上がる。

一転、破顔した冬華は負けじと服を着たまま池の中に飛び込んだ。じゃぶじゃぶ、じゃぶじゃぶ、池の浅いところを走りながら息を切らせて叫ぶ。

「待てー！」

「待てと言われて待つ阿呆がどこにおる！」

「そこにいるー！」

笑いながら、水を掛け合う男と女。それは子どももの遊戯に等しき光景だった。だが冬華にとって、それは自らの意思による再生の儀式だった。

幸せだった。

冬華は、慶次郎がなぜこの世界に居るのかを 『知らない』。

第4章 邂逅(1)

北郷一刀が『花の慶次』を初めて読んだのは、彼が中学二年生の時である。

季節は春。学校に英和辞書を忘れてしまった一刀は、父親の書斎から借りようと部屋に入った。そして首尾良く辞書を見つけて部屋から出ようとした一刀の目に、本棚上段の一角を占める『それ』が目に入った。

それまでの一刀ならば目に入らなかった。そう、中学二年生になつて背が伸びたからこそその発見。かすれた背表紙のそれは、ジャンプ・コミックス『花の慶次』全十八巻であつた。

最初にそれを見たとき、一刀の頭に浮かんだのは父親に対する複雑な思いであつた。齢十四、第二次反抗期真っ盛りの彼である。

なんだ、自分には漫画ばかり読むなと口うるさいくせに。自分も読んでるじゃないか。

父親が帰宅後、軽くイヤミでも言つてやるつもりで第一巻を手にとつた。そして父親が帰宅して彼の肩を叩くまで、一刀は夢中になつてそれを読んでいた。それが『花の慶次』を初めて読んだ日。そう、前田慶次郎に惚れた日のことである。

一刀は父親に頭を下げ、『花の慶次』全巻を貸してくれるように必死で頼んだ。父親は快く貸してくれた。その時の、何とも言えな

いうれしそうな顔を今でも覚えている。そうか、お前もわかるか
そんな、男同士の共感の顔だった。

そして、その日から一刀は『厨二病』、より正確には『慶次病』
になった。中学二年生で『花の慶次』を読む。その病にかかった
彼を誰も責められまい。

日頃使う言葉に、『友』『漢』という言葉がテキメンに増えた。
パンツの色はもちろん白。そう、『己の心の様に輝く白』である。

一刀が剣道部であったことも、その病に拍車を掛けた。長期の休
みごとに祖父に鍛えられ、それなりの剣術の腕を持つ彼である。祖
父に申し訳ないと思いつつも、自らを『穀蔵院一刀流』の使い手で
あると心密かに称した。修得すべきいかなる型や技も存在しないの
だから勝手に名乗っても問題あるまい、と。

剣道部の練習を休むようになった。『虎や狼が日々鍛錬などする
かね』というわけである。

その代わり、放課後には学校の裏山にこもった。そして、ひたす
らに強敵（『とも』と呼ぶ）を稽古相手として思い浮かべ、それと
ならみ合った。それによって眼力と胆力が身に付けば、すなわち『
漢』度が上がれば自ずと強くなる筈……と考えた。

そして迎えた、夏の県大会の一回戦。そこには、眼光鋭く相手を
圧倒する一刀が居た。竹刀をだらりと下げた、構えのない構え。相
手は圧倒されて、一刀の目すら見ることができない。

制限時間が近づいた。相手が、一刀から目をそらしつつ、遠間か
らやけくそ気味に打ち込む。

ばすん。

その一振りは、一刀の右小手に当たって軽い音を立てた。審判の旗が上がる。

「一本！」

見事、一回戦負けである。昨年夏、中学一年生でありながら県大会準決勝までいった一刀であった。それが、あっけなく一回戦で負けた。周りはあ然とした。もはや優勝しかない。周りから見ると、そんな雰囲気の彼であったのだ。

しかし、本人はまったく落ち込んでいなかった。負けた原因は、自らの漢度が低いからであると結論づけた。戦わずして勝つ。戦わずして、相手が負けを認める。それこそが目指すべき場所。まだまだ、自分の目指すべき場所は遠い。夏休みに入ると早速、九州の祖父の家に剣術修行へと赴いた。

その初日。一刀は、道場で祖父と竹刀を持って対峙していた。構えをつくらず、眼光鋭く自分を見据える孫の顔を見て、祖父は顔を引き締めた。しかし、少し時間が経って冷静に見ると、何とも隙だらけの構えである。そうになると、それまで眼光鋭い狼に見えたその顔が、目だけ輝くチワワに見えてきた。

「ふむ」

やおら祖父は一刀に近づくと、その頭を思い切り打った。

ばこん。

木がへこむような音がして、一刀は失神した。

「ご主人様？」

「え？」

ぼおっとしていたようだ。気がつけば、愛紗が顔をのぞき込んでいた。

「な、なんだい？」

一刀は額に汗をにじませて微笑んだ。今でも、あの頃のことを思い出すと嫌な汗が出る。背中がかゆくなる。頭を抱えて、地面を転がりたくなるのである。

現在、一刀は五十騎ほどの隊列の真ん中にいる。隊列の先頭には桔梗、中程には一刀と愛紗、そして最後尾を紫苑が固めている。そこから後ろに少し離れて、趙雲、戯志才、そして風が乗る馬が続いていた。

小沛の天の御遣いに、下？の天の御遣いが会いに行く。そのことが明らかになったら、大騒動である。そもそも、小沛の街に天の御遣いがある（かもしれない）ということ自体、世人が知らぬことであつた。

そうした事情から、一刀はお忍びで小沛の街に赴くことになつたのであつたのである。もつとも、表面上は徐州牧である劉備の命を受けた文官が、小沛の街を視察のために訪れるということになつて

いる。

「……額に汗が浮かんでいます。お体の具合に何か問題でも」

「あははは、あは、な、何でもないよ」

愛沙にそう答えると、一刀は額の汗をぬぐって微笑んだ。あんまり、今のオレを見ないでくれ。

「獅子欺かざるの力だね、爺ちゃん」

失神から覚めた一刀が祖父に発した最初の言葉である。どうもおかしい。そう思った祖父は、一刀に彼が思うところを尋ねてみた。

よくぞ、聞いてくれた。一刀は己の存念を思う存分に伝えた。

祖父は頷いた。その後、三時間の正座での説教を経て、彼の厨二病はようやく治癒した。

中学三年生になった。厨二病は治癒したものの、相変わらず『慶次病』には罹患したままの一刀である。パソコンを買ってもらった彼がインターネットで最初に検索した言葉は『前田慶次郎』であった。また、図書館や書店に通って関連文献を読みあさった。

その結果わかったことは、『花の慶次』の前田慶次郎、すなわち慶次はあくまで『虚構』であるということであった。

山形県の博物館に残っている前田慶次郎のものとされる鎧は、当時の標準的な大きさらしい。となると、実際の慶次の背の高さは百六十cmから百六十五cm程度である可能性が高い。そもそも、慶

次の背の高さに関する資料そのものが残っていない。

実際、歴史小説『一夢庵風流記』も、隆慶一郎先生がほんの数枚に過ぎない資料をもとに書いたと聞いた。また、松風とおぼしき馬も確かにいたらしいが、当時の馬よりも頭一つ大きい程度であったという。当時の馬の大きさは現在のポニー程度　したがって、現在では競馬でよく見るサラブレッド等に比べてもはるかに小さい。

しかしながら、それで彼の慶次郎に対する敬意はいささかも薄れなかった。事跡が少ないにもかかわらず、今でも語られているのはそれだけ魅力ある人だったということだ。

そして、たとえ『虚構』であれ、隆慶一郎先生が書いた前田慶次郎は、そして原哲夫先生が描いた前田慶次は、自分の『理想』の男である。虚構の存在に敬意を示して何が悪いのか。

そもそも、自分はその存在が『現実』とされる世の偉人たちと直接会ったことがあるわけではない。存在が確実とされる彼らとて、実際に相まみえず文字や漫画を通じて知る限り、それもまた虚構である。

その頃になって、一刀は父親から『花の慶次』を借りっぱなしであったことによく気づいた。彼は、ぼろぼろになったそれを断腸の思いで書斎に返しに行った。しかし、それを返す必要はなかった。かつて一刀が借りた『花の慶次』のスペースには、ちゃっかりびかびかの文庫版が入っていた。

以後、父親から借りた『花の慶次』は一刀のいわば聖書として、彼の本棚の中央部を占めてきた。聖フランチェスカ学園に進学して寮で生活をするようになってからも、それは変わらなかった。寮の

部屋にある本棚の一番良い場所に、今もそのすり切れた聖書は鎮座している。

時折、慶次病患者としての一刀は夢想した。

例えば『戦国時代に転生して織田信長になって　いやいや、あんな苛烈な人生はちよつと無理。一向一揆を皆殺しになんて命令できそうにないし。そうだな、出来が悪かったらしい次男、三男あたり転生して、慶次と友になるというのもいいな』なんて考えたり。

例えば『直江山城守兼続に転生して　いやいや、主君にあれほどの忠誠を捧げるのはちよつと無理。そうだな、あえてあぶれ者として上杉家中に転生して、河原田城での慶次の一騎駆けについていくというのもいいな』なんて考えたり。

この後漢末の時代にやってきて、戸惑いながらもスムーズに『天の知識』として未来の知識を提供できているのも、実はそうした絶え間ない妄想　いや、夢想の繰り返しがあつたからであつた。

戦国時代に転生したら、疑われない程度に未来の知識を提供して、皆の信頼を受ける。そんな場面を何度も何度も繰り返し夢想してきた一刀は、結果としてそうした『シュミレーション』の成果を、この三国志の世界で十分に発揮することができたのである。

その意味では、この時代で『天の御遣い』としてなんとかやってこれたのも、慶次病患者としての夢想のおかげであると言えないこともない。もつとも、やってきたのが自分がそれなりに詳しい戦国時代ではなく、『蒼天航路』でしか知らない後漢末の時代であると

いうこと、そして三国志の英雄たちが美少女であるということまでは流石に夢想できなかつたが。

そして、あの前田慶次郎がこの時代に来ているかもしれない。これこそまさに、まったく夢想だにしないことであつた。それも史実の彼ではなく、『花の慶次』の慶次が来ているかもしれないのだ。これは、本当にスゴイことだ。しかし、そのことが意味するのは。

一刀は、最近抱き始めたある『仮説』を思い出して小さく身震いました。

第4章 邂逅(2)

「ご主人様？」

はっ。

またもや、呆けていたようだ。一刀がその声に気がつく、愛紗が心配そうに顔をのぞき込んでいた。

愛紗は周りの部下たちが自分たちに注意を払っていないことを確認すると、一刀に小声で話しかけた。

「……今からでも遅くはありません。もう一人の天の御遣い殿にお会いになることは、お止めになるべきではないでしょうか」

「何を言ってるのさ、今さら」

「ですが……先程からご主人様は考えごとばかりされているようにお見受けします。失礼ながら、不安になっていらっしやるのでは？」

一刀は苦笑した。まさか、自分の厨二病的過去を思い出していたなんて言えない。

「愛紗、心配してくれてありがとう。でも、心配いらないよ」

「しかし……」

「それに、本物かどうか分からないけれど……もう一人の天の御遣いに会うことは、天から与えられた自分の義務だと思っただ」

一刀のその表情に、愛紗は唇を噛んだ。これ以上の説得は無理であろう。ならば、言っておかねばならないことがある。愛紗は小さく深呼吸をした。

「そうですね。ならば、これ以上は申しますまい。……ただし」
「ただし？」

愛紗の真剣な面持ちに、一刀はごくりと唾を飲む。どちらかと言えばあけすけに親愛の情をぶつけてくるほかの下？の武将たちの中で、愛紗の態度だけは明らかに違っていた。その彼女が、何かを告げようとしている。そのことが、一刀を緊張させていた。

誰よりも、一刀に敬意を示している。誰よりも、忠実な部下である。誰であれ、一刀を辱めることを許さない。天の御遣いのためならば、単騎で千の敵と戦うことも厭わない。そんな彼女を、下？の人々は忠誠無比の勇将と讃えた。一刀も、そう思う。

だが、不安もある。これだけ一刀に尽くしながら、彼女は何も『求めない』。ほかの武将のように、ほめて欲しいとか、大切にしたいとか、そうした気持ちをまったく求めない。まさに武將の鑑であるわけだが、ほかの女性たちと比べると、その態度はいささか奇異に見えた。

いや。ただ一つ、愛紗が一刀に強く求めていることがあった。それは、面と向かって言われたことがあるわけではない。けれども愛紗と一緒にいる時、一刀は常にその『要求』を感じていた。それは。

「『唯一無二の天の御遣いたること』。そのことを決してお忘れにならないように」

愛紗が静かに告げる。それはまぎれもなく要求。いや、『懇願』であった。その必死な表情に宿る感情は、尊敬でも、忠義でも、ま

してや親愛でもない。その感情が意味するものを、一刀は読み取ることができなかった。

「趙雲殿、ちよつとよろしいかしら」

前を進む隊列の最後尾から離れて下がってきた紫苑が、星に声をかけた。

星は改めて紫苑の顔を見つめた。歳は二十代後半だろうか。例えるならば、牡丹の花。その表情に、隠し切れない大人の色気がある。

「黄忠殿。何でしょうか」

「小沛の天の御遣い様のことなのだけど……」

そこまで言うと、紫苑はちらりと前方を見た。星も同じように前を見る。そして、前の隊列との距離を目測すると紫苑に告げた。

「……ここならば、大丈夫でしょう」

「ごめんね。気を遣わせちゃって」

「いいえ。当然のご配慮かと」

一刀が小沛の街へ天の御遣いを訪ねることが決定した後、下？において軍師筆頭を務める朱里は、居並ぶ諸将に対して次のように提案した。

『小沛の天の御遣いらしき人物については、その存在が確認できるまで、あらゆる情報を秘匿すべきです』

天の御遣いたる一刀を中心として繁栄を迎えつつある徐州をいたずらに混乱させてはならない　というわけである。

星もその意見には納得できた。むしろ、慶次郎をいきなり天の御遣いとして混乱に巻き込まなくてほっとしていた。

慶次郎自身、現時点では自らを天の御遣いとされることを避けているようにも感じていた。実際、慶次郎にはそのことを人に話すなと釘を刺されている　風や稟が話してしまったことで、その意味は薄れてしまったが。

その結果として、小沛の天の御遣いに関しては、同行する兵士たちにもそのことを告げていない。そのことを知るのは、一刀、愛紗、紫苑、桔梗、そして『もう一人』だけである。

紫苑を前にして、星はまず先日
の非礼を詫びた。

「改めて、先日は失礼いたしました」

「気にしないで。ご主人様にも非はあったわ……こちらこそ、許してもらえるかしら？」

「はい。お気になさらずに」

「ありがとうございます」

紫苑は微笑んだ。それにつられて、星も微笑む。そんな星に、紫苑は改めて問いかけた。

「そこでもう一度確認したいのだけど」

「はい」

「……ご主人様にお仕えしていただくわけにはいかないのかしら」
「申しわけございません。既に主たることを決めた方がいる身ゆえ」
「小沛の天の御遣い様、かしら」
「はい。もつとも、まだ認めてもらったわけではないのですが」
「そう……。残念ね」

そう答えながら、紫苑は改めて星を観察した。例えるならば、白い薔薇。強さと美しさ、そして棘を備えている。

ご主人様が、一人の武将にあれほどまでにこだわる姿を初めて見た。悔しくなかったと言えば、それは嘘になる。その薔薇が、これほどまでに随身を望む天の御遣いとはどのような人物なのだろう。ちよつと、意地悪しちやおつかしら。紫苑は星に話しかけた。

「ところで、その天の御遣い様、どのようなお方なのかしら」

「……どのようなお方、とは？」

「どのような殿方なの、ということよ。惚れていらっしやるのではなくて？」

「惚れている……まあ、そうですね」

「まあ！」

恥じらうことなく堂々と頷く星に対して、紫苑はころころと笑った。

戯志才や程？から、この趙雲なる武人がこの国で並ぶ者がない槍の達人であることは聞いていた。実際にその武技を見たわけではない。しかし、彼女が醸し出す雰囲気、そしてその所作は、戯志才らの話を十分に裏付けていた。紫苑自身、手練れの武将である。そのことはすぐにわかった。

そして、それほどの武人が『惚れている』と明言する『男』。私たちのご主人様と、どちらがいい男かしらね。

楽しみだわ。

紫苑は右手の人差し指をそつと唇に当てると、密かに微笑んだ。

小沛の街が見えてきた。門前には、黒山の人ばかりができています。

お忍びであるとはいえ、街の長官にまで天の御遣いの来訪を秘密にするわけにはいかなかった。小沛の街に滞在中、それなりの宿泊場所や警護を提供してもらわねばならないからだ。一刀は、現在の徐州における最重要人物の一人である。その身の安全には、万全を期する必要があった。

そして長官は黙っていることができず　そもそも、小沛の街に現れる筈だった天の御遣いなのだから、という気持ちもあった。そのことを街の長老に『秘密』として知らせた。それを知った街の長老は当然、そのことを街の人々に『秘密』として広め……現在のそのような状況に至ったわけである。

愛紗が苦虫を噛み潰したような顔をしている。無理もない。これでは、お忍びも何もあったものではない。長官には、責任を取ってもらわねば。少なくとも、警備の数を倍にしてもらわねばなるまい。そんなことを考える愛紗の顔を横目で見ながら、一刀は苦笑した。こうなれば、自分はその『役割』を果たさなくてはならない。

彼は騎乗する白馬を街の住民たちに向かって一歩進めると、やわ

らしく微笑んで軽く手を振った。わっ、と歓声が沸いた。一気に騒がしくなる。住民たちは、口々に叫んだ。

「天の御遣い様、万歳！」

「万歳！」

「こちらに顔を見せて下され！」

「御遣いさまー！」

その時、祭りのような様相を見せるその黒山の人だかりの中から、貧相な小男が飛び出してきた。小男は一刀たち一行の側を頭を下げながら走り抜けると、その後ろにいた星、稟、風たちのところまで来た。そして稟の前で平伏すると、ぼそぼそと何か告げる。そして再度頭を下げながら一刀たち一行の側を走り抜けて人だかりの中へと戻っていった。稟も愛紗と同じように 別の意味で 苦虫を噛み潰したような顔に変わっている。

「どうしたんだ、戯志才？」

浮かない顔の稟に、一刀は尋ねる。稟はしばらく黙っていたが、下を向いて小さくため息をついた。そして下馬すると、一刀の前まで歩いてくる。そして平伏すると、小さな声で告げた。

「北郷様に申し上げます。……現在、小沛の街に前田様はいらっしやらないとのこと」

「……え？」

「な！どういふことだ、稟！」

追ってきた星が稟に食ってかかる。それには構わず、稟は平伏し たまま言葉を続けた。

「……私どもの小間使いに聞いた話では、前田様は今から一週間程前、小沛の街を発たれたとのこと。何でも、ここから西へ五里（約二〇km）のところにある臥牛山、その頂上にあるという鏡池に現れたという物の怪を、街の長老の依頼を受けて退治するために向かわれた由」

「物の怪退治？」

「はい。……そして、そのまま戻られていないとのこと」

一行の周辺を沈黙が包んだ。その沈黙を打ち破るように、星が低く響く声でつぶやく。

「……物の怪退治に向かつて、そのまま行方不明、だと？」

「せ、星ちゃん！落ち着いて！」

星の目が据わっている。その額には青筋が立ち、彼女はまさに臥牛山の方に向かつて今にも走り出さんとしていた。そんな彼女を、やはり馬から下りた風が必死で抑えている。彼らを知る者が見れば、きわめて珍しい光景がそこにあった。

地面に伏せる稟を見下ろしながら、一刀は呆然としていた。同時に、安堵もしていた。一刀は、これまで緊張していた。いや、緊張の極地にあったといつて良い。天の御遣いとして、慶次郎にいかにか接するべきか。憧れの『漢』に、どのような言葉をかけるべきか。厨二病的過去を思い出していたのも、そうした緊張がもたらした心の動きであった。

そして、彼には是非とも聞かなくてはならないことがあった。それは、今後の自分の身の振り方に、いや存在意義に大きく影響するであろう。しかし、いないのなら……。

そこまで考えて、ふと一刀はおかしなことに気づいた。

<……静か過ぎる>

一刀は顔を上げて、周りを見渡した。いつの間にか、先程まで歓声を上げていた住人たちが黙り込んでいる。自分たちの態度が、彼らを心配させてしまったか。慌てて改めて笑顔をつくろうとした一刀であったが、すぐさまそれが理由ではないことを理解した。住人たちは、こちらを見ていない。皆、呆けたように同じ方角。そう、西に顔を向けていた。

<西？>

一刀は彼らの視線の先を追った。そんな一刀を見て、愛紗も、桔梗も、紫苑も、そして星も、稟も、風も。その方向を、見た。

第4章 邂逅(3)

小沛の街から西へ半町(約五十五m)ほど離れた地点。そこに、街の入口へと向かう四人と二頭がいた。

先頭にいるのは、巨大な黒馬に乗った、これまた大柄な男である。藍一色の上下を着込み、表が黒、裏が猩々緋のマントを羽織っている。腰には、無骨な長刀が無造作に差されている。柄は上下と同じ藍色、鞘はくすんだ朱である。その顔は、春風に吹かれているかのごとく穏やかである。

その男が乗る馬の前鞍には、不釣り合いな麻の服を着た妙齡の女性が横座りになっている。銀髪だけでも珍しいのに、大きな青い瞳、透き通るような白い肌。その姿は世の者とは思えない。その女性の体を、慶次郎の太い腕が支えていた。その顔は、男の顔を柔らかく見上げている。時折、何か話しかけているようだ。

その二人を乗せている黒馬が、また見事であった。単に大きいだけでない。周囲を威圧する雰囲気。まさに、馬の王といった風格があった。黒いというよりは漆黒といって良いその馬体は、太陽の光を浴びて艶やかに輝いている。よく見ると、馬銜や手綱がついていない。

その後ろには、黒馬には馬格ではかなわないものの、やはり見事な栗毛の馬が続いている。こちらの馬には馬銜や手綱がついている。その馬の口を取って歩くのは、二十代後半とおぼしき小柄な女性である。その背丈の二倍以上はあるつかという長大な朱槍を右肩にかけている。

最後尾には、身の丈七尺（二一〇cm）近い大男　そう、牛のような浅黒い男が続いている。その男は、背中に大きな箱　鎧櫃を二つ背負っていた。もつとも、それらは長大な彼の背中にあるために脆弱な小箱のようにも見える。そのためか、なんともアンバランスな印象を受けた。

そんな奴らが、現れた。何もしていない。ただ、現れただけである。しかし、それだけで空気が変わってしまった。そこに存在する何もかが、『普通』であることを否定していた。無論、本人たちは微塵もそんなことを気にしていない。

そんな奴らが、ゆっくりと近づいてくる。悠然と近づいている。門前の状況に、まるで気づいていないかのように。門前に集まった小沛の街の住人たち。そして、一刀たち一行。彼らは揃って息を止めていた。規格外の四人と二匹を迎えて、どんな対応をして良いかわからないのだ。

そんな中、星だけが慶次郎を見つめていた。

星は久しぶりに主と心に決めた男　惚れた男の姿を見て、口元がゆるむのを押さえることができなかつた。

これまでに星が見た慶次郎の姿、それは最初に会ったときの白装束の姿であり、小沛の街に来てから揃えたいわゆる庶民の服を着た姿であった。慶次郎は服に負けない男である。いずれの服も、独自の感覚で見事に着こなしていたと思う。

だが、今の服装を見てその考えを改めた。恐らく、それらは慶次

郎の感覚で揃えたものであろう。その色合い、着こなしは文字で示せば奇抜なものである。しかし、実際に目にするとうだ。大柄な慶次郎の体に、その服装は実に似合っていた。いっそ、涼やかな印象すら与える。

男の価値は、姿形では決まらぬもの。そのような信念を持つ星である。しかし、今の姿を見て惚れ直した自分を否定することができなかった。

それに、慶次郎がまたがっている黒馬の見事さといったらどうだ。あれほどの巨馬でありながら、その身のこなしは見事の一言に過ぎる。そして、あたかも物語に登場する神馬のごとき気品がある。

馬銜や手綱がついていないにもかかわらず、黒馬は乗り手の気持ちがわかるかのように、自然とその足を進めている。まさに人馬一体。彼らはまるで長年連れ添った夫婦のような雰囲気醸し出していた。

あの馬は、いつの間にも入れたのだろう。……まあ、良い。後で聞けばよい。そう、聞きたいことはたくさんある。前鞍に座る妙齡の女性についてとか。

< くん? >

星の顔が固まった。あまりにも自然なので、これまでまったく気にしていなかったが、あの女は誰だ。なぜ、そこにいる。なぜ、微笑んでいる。誰の許しを得て、慶次殿に触れている！

星は、慶次郎に向かって走り出そうとした。しかし、目の前にはまだ固まったままの下?の一行がいる。天の御遣いを前にして、彼

より先に慶次郎と接するような勝手な行動をとるわけにはいかなかった。

<慶次殿……後で話はたっぷり聞かせてもらいますぞ>

何もできぬまま、両手を握りしめて星はぶるぶると震えた。

馬上で一刀は固まっていた。

ずし、ずし、ずし。

もはや、巨大な黒馬が踏みしめる地面の音が聞こえる距離になっている。あの馬は、十中八九、松風であろう。そして、その馬にまたがる偉丈夫。

本物だ あれ、絶対に本物だよ！『花の慶次』の前田慶次だよ！

一刀は叫びたいような、泣きたいような、そして笑いたいような気持ちに襲われた。何をしたら良いか、わからない。

ようやく慶次郎が、こちらに気づいたような顔をした。その顔を見て、一刀は我に返った。そうだ。このまま固まっているわけにはいかない その程度の男だと、思われたくない。

<動け！>

一刀は、緊張で固まる体に活を入れ、必死で手綱を引いた。

ぽっく、ぽっく、ぽっく。

一刀を乗せた白馬が、松風に近づいていく。やがて、一刀は慶次郎と一丈（約3m）ほどの距離を空けて相対した。松風に乗る慶次郎からは、自然、一刀を見下ろすようなかたちになる。お互いの視線が交差した。

慶次郎は、白馬に乗る若者の姿形に目を向けた。これまで見たことがない白く輝く生地の、これまた見たことがない意匠の服を着ている。その背後には、その護衛とおぼしき五〇騎ほどの兵士たち。その内の数人は、名のある武将であるように思われた。

そして、その若者の後ろには星、戯志才、そして程？の姿が見える。なぜか、星は怒っているようだ。さては、勝手に屋敷を空けていたことに立腹したか。それはそれとして、もしやこの若者。

慶次郎は目の前の若者の瞳を見た。理由はわからぬが、いたく緊張しているようだ。だが、強い意志を感じさせる瞳をしている。声をかけた。

「……天の御遣い殿でいらっしやられるか？」

「は、はい！は、はじめまして！オレ……いや僕は、下？で、て、天の御遣いをして、しています、ほ、北郷一刀と言います！」

大声で名乗ったつもりだった。しかし、空気を震わせたのはか細い声。一刀は、口内が一気に渴くのを感じた。

やっぱり『本物』だ。目の前の松風の威圧感といったら、どうだ。その鼻息だけで、体が吹き飛びそうに感じる。そして、松風にまたがる慶次郎の男ぶり。すべてを見通しているような、涼やかな目つ

き　その前に座る美少女のことは知らないが。

急に恥ずかしくなった。自分を迎えるために門前に集まってくれた街の住人たち。その彼らの前で、『虚飾』の男と『本物』の男が相對している。そのことを、一刀自身が認めていることが辛かった。この場から、逃げ出したくなった。駆け出したくなった。

でも、それだけはするわけにはいかない。自分は、自らの意志で天の御遣いとして『御輿』になることを決めたのだ。例え虚飾であるうとも、自分は天の御遣い。愛紗たちの信賴を、期待を裏切るわけにはいかない。一刀は奥歯を噛みしめた。

そんな一刀を見ていた慶次郎は、静かに松風から降りた。そして冬華をそつと地面に下ろすと、一刀に向かって片膝を着く。背後では周倉、そして裴元紹も同じように片膝を着いた。冬華も、慶次郎の隣で両膝を着く。

呆然とする一刀の前で、慶次郎は悠然と頭を下げた。

「お初にお目に掛かる。それがし、小沛の住人、前田慶次郎と申す者。天の御遣い殿のご来訪、心より歓迎申し上げます」

朗々とした大声でそう言うと、ゆつくりと顔を上げて片目をつぶる。

一刀にだけ見える、そのサイン。

緊張するなよ、とその口は笑っていた。

「！」

やおら慶次郎は立ち上がると、門前の街の住人たちに向かって大きく手を叩いた。

ばん！

人々が夢から覚めたような顔になる。そんな彼らに向かって、慶次郎は大声で叫んだ。

「さあさ、皆の衆！この中華に名を馳せる、天の御遣い殿のご来訪じゃ！大いに騒ごうぞ！」

わっ。

門前は再び歓声に包まれた。

「……いない？」

左慈は独りごちた。彼は今、臥牛山の頂上、鏡池の前にいる。管輅こと、冬華を迎えに来たのだ。いつもなら、この池の底で冬華は外史が終わるまで眠りにについている筈であつた。そんな彼女が、いない。

そもそも、今回の外史はイレギュラーなかたちで進んでいる。これまで、彼が管理者として担当してきたこの外史は、安定した状態を続けてきた。冬華は天の御遣いの降臨を予言し、自分は敵として北郷に倒される。その構造は確固たるもので、永遠に続くと思われた。

だが今回の外史に限り、天はこれまでとは異なる『仕事』を自分に命じた。その内容を貂蝉から伝え聞いたとき、目が丸くなったものだ。今回の左慈の仕事、それは『自由に過ごせ』。ただ、それだけであつた。

天が自分にそのような仕事を与えた理由はわからない。しかし、彼は狂喜した。冬華ほどではないにせよ、左慈もまた、永遠に繰り返される管理者としての生に絶望していたのだ。この千載一遇の機会を生かすべく、彼は繰り返し返される外史において密かに育てていた夢 北郷の『友』になりたい。そして、その力になりたい を実現することにした。

その行動の結果が、今の一刀の立場である。『いろいろ』と苦勞したかいがあつたというものだ 今頃、劉璋は自らが股肱の臣を放逐するに至つた理由が思い出せず、首をひねっているだろう。陶謙には少々悪いことをしたが、まあ、死ぬのがほんの数年前であつただけのこと。

同時に、左慈にもよくわからない現象が生じた。一刀の降臨とほぼ時を同じくして、もう一人の『天の御遣い』らしき男が現れた。その男は、一刀に少なからぬ因縁がある人物らしい。前田慶次郎 憧憬のまなざしでその男の名前を呼ぶ一刀の姿に、左慈はいつしか嫉妬した。

なぜ、あの男は現れたのか。自分と同じように冬華に下されたかもしれない『仕事』の内容に関係があるのか……。

そこまで考えて、左慈は首を振つた。自分のような低位の管理者が考えてもわかる筈もない。悔しいが、すべては天の手のひらの上

なのだ。『奴ら』には奴らの考えがある　そしてあの男が北郷の
邪魔をするというのなら、排除するまで。

「仕方ない。……ともかく、北郷に合流するか」

左慈はそう呟くと、鏡池に背中を向けた。次の瞬間、そこには誰
もいなかった。

鏡池の上を、一巡の風が吹いた。

第4章 邂逅(4)

慶次郎が『天の御遣い』らしき若者に挨拶をした後、その若者は口を開けたまま固まっていた。少々心配になった慶次郎が声を掛けようとしたその時、一人の武将が馬を下りて駆けつけてきた。黒い長髪を後ろで結わえた女性である。

その女性は若者の馬の手綱を手に取ると、慶次郎にぺこりと頭を下げた。そして、若者を馬ごと街の門前に向けて引っ張っていった。

途中、若者がこちらを振り返り、何か言おうとした。しかし、手綱を引っ張る女性はそれを許さない。さらに手綱を引っ張ると、強引に門をくぐるうとした。若者は何とも言えない顔をして前を向くと、門前にいた星に何やら話しかける。星が頷くのが見えた。

街の中に入っていく天の御遣い一行。それを追いかける街の住人たち。その騒々しい雰囲気の中で、一人の老人が慶次郎たちにゆっくりと近づいてきた。慶次郎に鏡池の物の怪の件を依頼した街の長老である。

「久しぶりですな」

「おう。長老殿か。待たせたな」

「いえいえ。ところで、首尾はいかがでしたか」

「うむ。刮目して聞くがよい」

慶次郎は語り始めた。

臥牛山に登り鏡池に到着すると、噂に聞いたとおりの『物の怪』がいた。黒くて大きく、素早い。流石のわしも、苦戦した。そのま

までは危なかった。だが！幸運にも、たまたま鏡池の水を汲みに来ていた夫婦の助力を得ることができた。ここにいる周倉と裴元紹である。三人で物の怪と戦い、何とか追い詰めた。最後に裴元紹の矢が物の怪の目に刺さると、物の怪は怪鳥のような声を出して鏡池から去っていった。その物の怪が去った後、そこにはこの黒馬、物の怪にさらわれてきたと思しきこの女性、そして物の怪が守っていたらしい宝箱、そして武具があったというわけじゃ。

長老は、慶次郎の長口舌を聞きながら、その背後にいる巨大な黒馬を見上げた。見事な馬である。そして思う。『巨大な何か』で『恐ろしく速い』との噂があった物の怪。十中八九、この馬のことじゃな……。

しかし、大切なのは鏡池に『物の怪がいなくなった』という事実である。この馬が『物の怪かどうか』ということではない。長老は慶次郎に満足げに頷いてみせ、感謝の意を伝えた。そして、その左脇に立つ女性に目を向けた。

「ところで、前田殿。そのお方のお名前は」
「『水仙』と申します。お爺さま」

至誠天に通ず 臥牛山を発つ前に、冬華は慶次郎に管理者としての自分の素性を明かしていた。水仙とは、管輅という名前を名乗ることで生じる問題を回避するために、その時に決めた偽名である。

「良い名じゃ。……ところで、どこからさらわれてきたのかの」
「……それが、記憶が定かではないのです」
「と、いうわけじゃ。しばらくは、わしが面倒を見る」

長老はしばらく二人を眺めていたが、好々爺然と微笑んだ。そし

て、『何かあつたら、遠慮なく頼って下され』と言つと、その場を去っていった。

「先程はありがとうございました」

ここは慶次郎が居候をしている屋敷の前である。一度屋敷に戻つた慶次郎たちは、昼食をとり、街に出た。そして戻つてくると、その門前に、部下を一人連れた黒い長髪の若い女性がいた。門前で天の御遣いの馬の手綱を取り、引つ張つていった女性である。

今、ここにはいるのは慶次郎と星の二人だけである。冬華は、あまり街には出たくないとのことで屋敷に残つていた。戯志才と程？は、食事の後に所用があると言つて消えた。周倉と裴元紹もまた、買い物があるといつて街に出て行つた。星に気を使つてくれたのだらう。

松風と野風は、街の馬場に一時的に預けてある。この屋敷にも、馬小屋がないわけではない。しかし、屋敷の門は松風が通るにはいささか小さすぎた。戯志才がすぐさま門を拡張するように手配してくれたが、工事が終わるまでのしばしの間、松風とは離れて生活することになりそうだった。

「小沛の街の住人として、当然の対応をしたまで。お気になされるな」

「いえ。本当に助かりました。心より御礼申し上げます」

その女性はぺこりと頭を下げた。真面目な性格のようである。そして、自らの名前を告げた。

「申し遅れました。私、徐州牧である劉備様にお仕えする関羽、字を雲長と申します」

「ほお、おぬしが……。その武名、聞き及んでおりますぞ」

「恐縮です。私など、まだまだ」

「ご謙遜なさるな。……。わしは前田慶次郎と申す者。今後、よしなに」

慶次郎も頭を下げる。そして、関羽の側を通って屋敷の中に入るうとした。しかし、関羽　愛紗はそんな慶次郎をじっと見つめている。

「いかなされた？」

「はい。前田殿は、ご主人様　いえ、北郷一刀殿と同じく『天の御遣い』であられるとか」

慶次郎は隣に立つ星の顔を見た。星は首を振る。

「……単なる噂よ。予言とやらで天の御遣いが現れるとの場所を、ちよつと旅しておりますな」

「ですが、戯志才殿と程？殿は前田殿は確かに天の御遣いであられると、断言されておりました」

もう一度、星の顔を見る。星は頷いた。彼女らが、わしを天の御遣いと　ふむ。頑張るのう。

「仮にわしが天の御遣いであつたとして、関羽殿はどうなさる」
「あとしばらくして、北郷殿が前田殿を訪ねてくるということは」
「存じでしょうか」

「うむ。先程、ここにいる趙雲から聞いた」

「恐らく、前田殿が天の御遣いであられるかどうかは、天の御遣いを自認されている北郷殿が何らかの判断をして下さいましょう」

「ふむ」

「ですが、その前に……」

愛紗は、強い意志を込めて慶次郎の目を見た。

「一手、お手合わせを」

「手合わせ？」

「前田殿は武人であるとお見受けいたしました」

「いかにも」

「武人は言葉によらず、矛で語り合うことができるもの。違いますか？」

慶次郎は目を丸くした。この関羽、見目は美しいがやはりものふか。三国志の世、やはりこうでなくてはの。

慶次郎は、にっこりと微笑んだ。

紫苑が警備兵を迎賓館の周りに配置して戻ってくると、桔梗が迎賓館の入口前の椅子に座っていた。一人、酒を飲んでいる。

「あら、中には入らないの」

「わしは、ああいうのは苦手だな」

迎賓館の中では、一刀が接待を受けていた。小沛の街の長官に長老、そして裕福な商人たち。彼らは列をなして、天の御遣いのご機嫌伺いに殺到していた。

「それに、孫乾の奴がいれば心配いるまい」

そう言うのと、桔梗はその隣にある卓の上に手を伸ばす。そこには、小さな酒瓶があった。それを右手で持つと、左手の酒杯になみなみと酒を注ぐ。

紫苑は迎賓館の中をのぞき込んだ。必死で天の御遣いとしての役割を果たそうとしている一刀の左隣に、同年齢ぐらいの栗色の髪をした若者が座っていた。

孫乾　彼こそが、北郷一刀の勢力を短い期間に急速に拡大させた影の立役者である。下？の若き富豪であり、また徐州の名家の一人でもある彼は、一刀たちに多大な援助をしてきた。

もともとは、旅商の途中で賊に襲われた彼を、一刀に会う前の愛紗が助けたのが発端である。そのことに感謝した孫乾は、愛紗が助けを必要としたときには、必ずや恩返しをすると約束していた。

そして、天の御遣いこと北郷一刀を連れてきた愛紗たちを、孫乾は心より歓待した。食客として滞在していた諸葛亮こと朱里、鳳統こと雛里を一刀たちに紹介したのも彼である。当時の徐州牧、陶謙に一刀を紹介したのも彼であった。もつとも、その直後に黄巾賊が下？を来襲し、陶謙は倒れてしまうのだが。

その後も、孫乾は一刀たちに陰ひなた無く惜しめない援助を続けた。その援助なくして、これほど迅速に一刀たちが勢力を伸ばすことはできなかつたであろう。

そんな孫乾に対して、一刀は自分付きの文官として出仕してくれ

ないかと頼み込んだ。孫乾はその頼みを快く引き受けた。以後、彼は下？の内政の中心人物として、その辣腕を振るってきたのである。

紫苑は桔梗に問うた。

「そういえば、孫乾はいつ戻ってきたの？」

「迎賓館に到着すると、門前で待っておった」

「ずいぶんと早かったのね」

「うむ。……お目当ての人物には会えなかったらしいぞ」

桔梗は小さく笑う。

孫乾は、小沛の街に来る道程の半ばで下？の一行を一旦離れていた。途中にある村に許嫁があり、会いに行きたいと申し出たのだ。もちろん、一刀はそれを快く許した。

「ははは。しよげておったわ」

「それにしても、彼ほどの名家の方に、村に住むような許嫁がいたなんてね」

「旅商の途中で、一目惚れしたのだと。……まあ、そんな男の方がわしは好きだがの」

「まあ」

桔梗の軽口に微笑みながら、紫苑はもう一度室内をのぞき込んだ。一刀は額に汗をにじませて微笑み、その左で孫乾がなにやら頷きながら話している。ん？……紫苑は違和感を感じた。何かしら。ああ。

「桔梗。愛紗ちゃんはどうしたのかしら」

このような場では、一刀を中央において左に孫乾、右に愛紗というのがいつもの光景であった。左に能弁、右に武威。二人はまさに両翼として、一刀を支えていたのである。その愛紗がない。珍しいことであった。

「ああ、愛紗なら」

くい、と酒杯を空けて桔梗は答える。

「ここに到着するやいなや、孫乾に後を任せて飛び出していきおつたわ」

「まあ。一体どこに」

「決まっているであろう。小沛の天の御遣いのところよ」

その顔は少々、悔しげである。

「何でも、『露払いは任せていただく』だそうだ」

「あらあら。それで桔梗はすねちゃったのかしら」

「ぬかせ」

ふん、と鼻で笑うと桔梗は再度酒杯に酒を注いだ。

第4章 邂逅(5)

「なかなか難しいな。この『青龍偃月刀』なるもの」

「そうでしょうか」

「うむ。やはり、槍とは勝手が違うわ」

慶次郎が愛紗に青龍偃月刀の使い方を教わり始めて、一刻(二時間)が過ぎようとしていた。

観客は、星と冬華のみ。二人は慶次郎愛用の敷物に座り、お茶を飲みながらこちらを見ている。慶次郎は何度か彼らに目をやった。二人は、にこにここと微笑みあいながら話している。

慶次郎は心密かに胸をなで下ろした。長老が去った後、慶次郎たち一行は、程々、戯志才、星と合流した。その際、冬華が慶次郎のことを自分の『主人』と紹介したために、星との間に一悶着あったのである。

その後、お互いを自己紹介させたのだが、二人は屋敷に来るまで目すら合わせようとしなかった。しかし、何とか打ち解けたようだ。

愛紗は、戸惑っていた。慶次郎を訪ねてきた理由、それは彼の實力を計るためであった。そのために、失礼とは承知で手合わせを願ったのである。しかし、慶次郎はそれを丁重に断った。

「わしはそれほどの武人ではござらん。……それより、一つお願いが」

「何でしょうか」

「徐州に武名轟く関羽殿に、ぜひ青龍偃月刀を教えていただきたい」
「は？」

意外であった。

もう一人の『天の御遣い』の存在は一刀の障害になるかも知れない。そのように考えていた愛紗である。もしその人物が自らを天の御遣いであると主張したならば、その時は　　そうした覚悟を決めて、彼女はここに来ていた。

しかし、その本人は自らを天の御遣いではないという。東方から流れてきた旅人に過ぎないと。そればかりか、自分に頭を下げ、武術の指導まで仰いでいる。

程？や戯志才は、自分たちをだましたのだろうか。だとしたら、その理由は何か　　いや、ご主人様があれほどまでにこだわっていたのだ。やはり、ただ者ではあるまい。

そんなことを考えながら、愛紗は青龍偃月刀の使い方教え始めた。ちなみに、慶次郎が今使用している青龍偃月刀は、愛紗が練習用として使っているものである。部下に命じて、宿舎まで取りに行かせた。その刃は、潰されている。愛紗が普段手にしている青龍偃月刀よりも、若干重い。

もともと、根が真面目でおせっかいの愛紗である。教え始めると熱が入った。また慶次郎自身、良い生徒であった。素直に指示には従い、質問は的確であり、憶えるのも早かった。

「それでは、最後に一連の動作を組み込んだ演武をお見せします。」

よく、観察されよ」
「よろしく頼む」

慶次郎は頭を下げた。一呼吸をおいて、愛紗が演武を始める。

それはまさに『武の舞』であつた。決して軽くはない青龍偃月刀が、流水のようにしなやかに、滑らかに動く。空気を斬る重い音だけが、それがどのような武器であるのかを知らせた。星と冬華も、話を止めて眺めているようだ。

慶次郎は、関羽の演武をほればれと眺めた。戦国時代の武将にとつて、唐土の英雄たちは一種の憧れである。武将たちは唐土の書物を読み、その地の英雄たちの活躍に思いを馳せた。慶次郎とて、例外ではない。

そうした唐土の英雄の中でも、関羽は別格の存在である。その死後、神にまで祭り上げられた武将など他にいない。その本物が、目の前にいるのである。だからこそ、その姿形は別として、教えを受けることを願ひ出た。このような機会、二度と訪れるとは思えなかつた。

そしてわかつたのは、その妙齡の女性としての姿とは裏腹に、その武もまた本物であるということであつた。長生きはするものじゃつて、つくづく、慶次郎は思う。

その姿は、慶次郎に比べればはるかに小さく、細い。にもかかわらず、その膂力は慶次郎に勝るとも劣らず、その速度はおそらく慶次郎を超えるだろう。それは、星に対して感じた感覚と一緒であつた。単純な肉体的能力で言えば、自分は彼女らに『敵うまい』。

彼女らの力は、慶次郎の元いた世界の感覚では計りきれぬ。いわば、反則的な力である。だからこそ面白い。つい気持ちが高ぶる慶次郎であった。

「…………ふっ」

愛紗が演武を終えた。その額には、うっすらと汗が浮かんでいる。慶次郎が手を叩いた。

「お見事！この慶次郎、まことに感服いたしました」
「いえ、それほどでも」

ほんの少し、顔を赤らめて愛紗は謙遜した。警戒している相手であるとは言え、ここまで素直にほめられると悪い気はしない。しかも、慶次郎の目は少年のようにきらきらと輝いており、その贅辞が心からのものであることが伝わってきた。少々、気恥ずかしい。そんな気持ちをごまかすように、愛紗は慶次郎に最後の課題を与えた。

「お、おほん。それでは、先ほどの私の演武をできるところまでで結構ですので、再現していただけませんか。それをもって、前田殿の腕前を評価させていただきたく」

「おお。お頼み申す」

慶次郎は、愛紗に向かって神妙に頭を下げる。そして、一息つく
と演武を始めた。愛紗は目を見張る。

それは、美しかった。

慶次郎は、愛紗の演武から感じたものを表現している。それは愛紗の演武そのものでありながら、『武』よりもはるかに『舞』に近かった。愛紗の目に、それはまるで一流の舞踊のように映った。

「……いかがかな」

はっ。

気がつけば、慶次郎の演武は終了していた。愛紗は夢から覚めたような心地である。

「……お見事です。もはや、私が教えることなどございませんな」
「いやいや。関羽殿の演武をただ、真似ただけのこと。あまり、持ち上げて下さるな」

「前田殿は、舞踊のたしなみもおありなのですか？」

「うむ。『能』……いや、わしの故郷の伝統芸能をいささか」

「そうですか」

愛紗は頷いた。戯志才が言ったように、高い教養を持っていることは事実であるようだ。そして、この前田慶次郎という男、実に気持が良い男であるということもわかった。裏表がない。このような人物であれば、ご主人様の障害になるようなことはあるまい。ようやく、愛紗の警戒感は薄れようとしていた。

「最後に、関羽殿に一つお願いがあるのだが」

「何でしょう」

「うむ。今度は、わしが好き勝手に演武をしてみる。それを見て、批評して欲しいのじゃ」

「そのくらいでしたら」

「恩に着る」

慶次郎は愛紗に頭を下げると、先程よりも愛紗から離れて立つ。そして、演武を始めた。ぶん、と青龍偃月刀を振る音が響き渡る。風が巻き起こった。

愛紗は改めて目を見張った。先程の慶次郎の演武が『優美』であるというならば、今度の演武は『苛烈』。例えるなら、それは竜巻であった。

愛紗の肌に鳥肌がたった。それは『恐怖』ではない 『歓喜』である。

何という武、なのだ。正直、胸が躍った。どれほどの武人なのか。……本気で打ち合ってみたい。それまでの雑念は消えた。ただ純粹に、この男と戦ってみたい。

「構えなされ」

「？」

演武を終えた慶次郎は、目を見開いた。先程までとは、愛紗の雰囲気が一変している。その全身から、闘気が溢れているのを感じた。背後の空気がゆがんで見える。

「卒業試験、といきましたようか」

「……わしはそんなに優秀な生徒だったか」

「ええ、実に。……本気でいきます。覚悟されよ」

愛紗は右足を一步引くと、青龍偃月刀を構えた。

面白い。実に面白い。慶次郎は、そう思った。この世界、圧倒的に『女』が強い。彼女らは決して受身ではない。この世界の主人公として、男にも刃を向ける。腹を立てれば、殴りかかる。

そして、彼女らは自由だった。欲しいものがあれば、獲りにいく。そのためには、戦いをも厭わない。

前の世界にはいなかった女たち。女同士で刃を向け合うのも、当然の雰囲気。彼女ら　英雄たちはいずれ、『天下』を臨んで戦うのだろう。

そうした彼女たちの在り方に、違和感を覚えなれないといえば嘘になる。しかし　それに違和感を覚える思考こそ、この世界では間違っているのだろう。彼女らを守るべき存在であるとしたならば、逆に失礼であると思われた。『やまとなでしこ』という言葉が、鼻で笑われる世界。

すでに『傾きおさめ』をしている慶次郎であった。いまさら、自ら戦いを求める気持ちはない。なる程、今の自分は若返っている。だからといって傾きおさめに至った心境を否定するつもりはなかった。

戦うだけ、戦った。殺すだけ、殺した。生きるだけ、生き抜いた。だからこそ、傾きおさめをした。隠棲する気になった。

しかし今、目の前で青龍偃月刀を構える関羽を見て、血がたぎるのを抑えることはできなかった。三国志の英雄が、後の世に『武神』とも呼ばれた存在が、自分に本気をぶつけようとしている。しかも、それはうら若き女性である　前の世界なら、『絶対』にありえぬ

状況。自分の常識からかけ離れた、このなんとも面白い世界で、隠棲したままで良いのだろうか。この世界に来た『意義』を問わなくて良いのだろうか。

そんなことを考えながら、慶次郎も青龍偃月刀を構えた。そんな慶次郎を見て、愛紗は小さく頷く。

「それでは……」
「いざ！」

両者がその一步を踏み出したとき。

「お、遅くなりましたー！」

一刀が駆け込んできた。

おまけ

目の前で、慶次郎が愛紗から青龍偃月刀の手ほどきを受けている。そんな二人を見ながら、星と冬華は並んで座っていた。日頃、慶次郎が寝転んでいる敷物の上である。二人の間には、湯飲みが乗ったお盆があった。

星が、笑顔で冬華に尋ねた。

「水仙殿」

「何かしら。趙雲殿」

「先程のような冗談は、皆に迷惑を掛ける。今後はお止めになられたほうがよいのでは」

「はて。冗談、とは？」

冬華も笑顔で答える。星はさらに笑顔になると、少々語気を強めた。

「はははは。慶次殿を『主人』とお呼びになったことですよ。慶次殿も迷惑されていたご様子」

「うふふふ。これは慶次と私、二人の問題。首を突っ込まないでいただけるかしら」

「いやいや。これは慶次殿と私、二人の問題でもある。主の障害を取り除くのは部下の務め」

「まあ。鈍感な人って哀れね」

二人は顔を見合わせて、笑った。

「はははは。……だから、たった一週間で嫁さん面すんなど言っているですよ」

「うふふふ。……一ヶ月もの間、一緒にいて何も起きなかった人に言われたくないですね」

「はははは……」

「うふふふ……」

二人はさらに笑顔になる。そう、笑顔とは本来……威嚇である。

「……さっさと出て行け」

「……あなたこそ」

「ここは慶次殿と私の住処だ」

「じゃ、私が慶次を連れて出て行くわ」

「慶次殿はあなたの持ち物ではない」

「あなたの持ち物でもないわね」

「……」

「……………」
「はははは……………」
「うふふふ……………」

かたかたかた。

地震でもないのに、お盆の上の湯飲みが震え始めた。

第5章 決意(1)

「……………」

沈黙が部屋の空気を満たしている。これが元いた時代なら、時計の針の音が聞こえているかもしれない。一刀は、現実逃避気味にそう思った。

もう一度、勇気を振り絞って下座の方向を見る。そこには、神妙な顔をした慶次郎が座っている。目が合いそうになり、一刀は慌てて目を伏せた。そして、心の中で何度目かのため息をついた。

<どうして、こんなことに…………>

一刀が庭に駆け込んだのは、まさに慶次郎と愛紗が互いに打ち込もうとしたその刹那であった。

一刀の姿をその目で確認するやいなや、慶次郎と愛紗は即座に得物を手元に戻した。そして二人は目で言葉を交わすと、ほぼ同時に一刀に向かって片膝を着き、それぞれ青龍偃月刀を地面に置いた。

「お待ちしております、ご主人様」

「ようこそお越し下さった、北郷殿」

「えっ……………」

一刀は固まった。まさか、慶次郎がたかが自分程度に礼を示すとは思ってもみなかったのである。慶次郎を目の前にして一刀は自

分が『天の御遣い』であることを忘れ、彼に憧れる一高校生に戻ってしまっていた。

だからこそ、慶次郎が笑って自分を迎えてくれ、そして気軽に肩でも叩いてくれるのではないかと期待していた。そう、漫画のよう。

しかし、現実には目の前の慶次郎は神妙に頭を下げている。ああ、漫画のようにはいかない。考えてみたら、自分は真田幸村でも伊達政宗でもなかった。少しへこんでしまう一刀である。どうしよう。

一刀は無言で立ち尽くした。そんな彼を見て、星と並んで座っていた冬華が静かに立ち上がった。

「ようこそお越し下さいました。天の御遣い様」

そういうと静かに頭を下げる。星も同じように立ち上がり頭を下げた。そして、背後にある大きな食卓に向かって歩いて行くと、上座に手のひらを向けた。

「北郷殿。どうぞこちらへ」

「私は、お茶を入れて参ります」

そう言うと、冬華は部屋を出て行く。廊下には、一刀に着いてきた下？の一行が待っていた。桔梗、紫苑、そして孫乾。

「！」

冬華の目が大きく見開かれた。しかし何事もなかったように彼ら

の側を通り過ぎようとする。最後尾の孫乾が、ぼそぼそと冬華の耳元でささやいた。一瞬、冬華の歩みが止まる。しかし、すぐさま何もなかったように歩き出した。

そして、冒頭に戻る。話が弾まない。一刀は途方に暮れていた。彼は慶次郎が気軽に、そう『友』に対するように慶次郎が接してくれることを期待していた。妄想の中で、そうした経験は呆れるほど繰り返してきた彼である。その際、イメージしていたのは結城秀康に対する慶次郎の態度であった。

しかしながら、慶次郎は一刀に対して極めて礼儀正しく、まさに『天の御遣い』に接する態度を崩さなかったのである。傾いてはくれなかった。やはり、自分の妄想は厨二病的だったか……少々、自嘲的に思う一刀である。

一刀は、助けを求めるように右手の方向を見た。そこには愛紗が座っている。その顔は、いつもと変わらない。心配そうに、一刀の顔を見ている。その表情を見て、一刀は改めて申し訳なく思った。結果として、慶次郎との真剣勝負に茶々を入れてしまった。自分であれば、かんしゃくの一つも起こしていただろう。

ついで、左手の方向を見る。そこには、孫乾が座っていた。いつもは能弁な彼が、今ここに限っては一言も口を開けようとはしない。目をとじて、静かに腕を組んでいる。まるで、この場で話をすることを拒否しているかのようだった。

現在、食卓の上座には一刀が座っている。その右手に一刀に近い順から愛紗、紫苑が、そして左手にやはり一刀に近い順から孫乾、

桔梗が座っていた。対して下座には、慶次郎が座っている。一刀から見て、その右手には星が座っていた。冬華はお茶を各席にふるまうと、そのまま部屋を退席している。

<……胃に、穴が開くかもしれないな>

逃げ場のない沈黙に、一刀は半ば本気でそう思った。

そんな主を助けるべく、愛紗は一刀が来る前に投げかけた問いをもう一度発した。

「……改めてお聞きしますが、前田殿は天の御遣いであられるのでしょうか」

「いやいや。先に申し上げたように、わしは予言とやらで天の御遣いが現れるとの場所をちょうど旅していた旅人に過ぎませぬ。そんなわしを天の御遣いなど、まことに恐れ多い」

慶次郎は、やはり自らが天の御遣いであることをはっきりと否定した。当然、下?の一行の視線は星に向かう。星は自分の右手に座る慶次郎の横顔をしばし見つめていたが、あっさりと陳謝した。

「慶次殿のおっしゃる通り。私は、黄巾賊に襲われていた慶次殿をお助けし、小沛の街までお連れしたに過ぎません。……私の説明が不十分だったために、戯志才や程?に誤解を与えてしまったようです。まことに申しわけございません」

こうなると、どうにもならない。下?の一行は、一刀の顔を見た。そもそも、今回のお忍びは、一刀の強い意志によるものであった。

そして、小沛の天の御遣いは本物であるという彼の確信こそ、その理由であった。

しかし、当のその一刀はそうした視線に気づかぬように、ぼんやりと縁側の外の風景を見ていた。ちよつとした虚脱状況にある。

大きな庭である。庭の中央に位置するあずまやには、人影が見える。周倉と裴元紹であると紹介された。二人は屋敷に戻ってきて天の御遣い一行が来客していることを知ると、恐れ多いと庭に移動していた。こちらに背を向けて、冬華が入れたお茶を飲んでいる。

<どうして、こんなことに……>

一刀は、改めて思う。自分に責任があることはわかっていた。例えるなら、自分は好きなアイドルに会う機会を得たファンのようなものであった。

いつもいつも、そのアイドルのことを考えている。一度でも会えたら、と思う。しかし実際にその機会を得ると、握手以上のことができないうちに気づく。まさに、自分はそういう状態であった。

天の御遣いに関することだけが、話しかけることができる唯一の話題であった。しかし、そのことは慶次郎本人にはつきりと否定されている。それに対して、『いや、あなたは天の御遣いだ』と主張する勇気もなかった。

ましてや、『あなたを知っている』なんて言えるはずもない。しかも、それは『花の慶次』という漫画を通じてである。自分が慶次郎であっても、そのように言われたら警戒感を持つであろう。それだけは、何とか避けたかった。憧れの人に、そのように思われた

くない。

そもそも、一刀の『仮説』は慶次郎と二人きりでなければ切り出せるものではない。それでも、自分の責任で訪ねてきた以上、何らかの成果を得なくては。何でもいい。話をしよう。一刀はそう覚悟を決めると、声を上げた。

「あの……」

げふ。

酒臭い息が一带に漂った。

見れば、桔梗が真っ赤な顔をして口を押さえている。

「桔梗！」

愛紗が声を上げて立ち上がる。桔梗とは別の意味で、顔を赤くしている。

「前田殿に失礼であろう！」

「も、申しわけござらぬ！」

桔梗は深々と頭を下げた。大失態である。どんな理由があるにせよ、責任は自分にあった。

「まことに申しわけござらぬ。わしはこれにて……」

桔梗は頭を下げながら立ち上がった。そんな彼女に、慶次郎が声を掛ける。

「敵顔殿」

「前田殿。その……大変な失礼を」

「酒が、好きらしいの」

「は？はい……」

慶次郎は桔梗に向かって涼やかな笑顔を見せた。桔梗の顔が、さらに別の意味で赤くなる。

「実は先だって、わしが懇意にしている酒屋から酒が届いての。わしの故郷の澄み酒を参考にした新作じゃ」

慶次郎は、部屋の隅にある酒瓶を指さした。大きめの酒瓶である。その側にある卓の上に、いくつかの酒杯が乗ったお盆が見えた。一刀は思う。もしかして、自分たちのために準備してくれていたのだろうか。

「は、はあ」

「このまま黙って座っていても埒が明かぬ。せつかくの機会じゃ。いかがかな、御一献」

「はあ……」

桔梗は自らの主の顔を見た。そして、驚いた。一刀は本当にうれしそうに微笑んでいたのである。

「いいよ、桔梗。前田殿のせつかくのご厚意だ。ご馳走になりなよ」「は、しかし……」

「遠慮はいらないよ。オレのことは気にしなくていい」

「ん？北郷殿は飲まぬのか？」

「い、いえ。ぼ、僕はお酒が飲めないんで」

「……そうか。残念じゃのう」

慶次郎は本当に残念そうに眉をひそめた。そして、他の面々も誘う。結局、手を挙げたのは紫苑だけであつた。桔梗に気を使ったのであろう。愛紗と孫乾は手を挙げなかつた。この二人は、酒が飲めない一刀に気を使ったものと思われた。星は何も言わず、じつと慶次郎の顔を見ている。

「ふむ。蔽顔殿と黄忠殿の二人だけか。ならば」

慶次郎は縁側に出ると、大きな声で叫んだ。

「周倉！裴元紹！一緒に飲まぬか！」

前のめりになる二人の姿が見える。突然の大声に驚いたのだろう。お茶を吹き出したのか、咳き込んでいる。そして二人して顔を見合わせると、照れくさそうに頷いた。

慶次郎もまた、うれしそうに頷く。立ち上がると、部屋の隅に歩いて行つた。そして右手で酒瓶、そして左手で酒杯の乗つたお盆を器用に持つと、くるりと振り返つて言つた。

「酒を飲まぬ者の前で酒を飲むというのも申し訳なし。せつかくの良い天気じゃ。飲む者どもはあのおあずまやで飲むとしようぞ」

そう言つと、慶次郎は星の顔を見た。そして星が小さく頷くのを確認すると、返事も待たずに歩き出した。

あずまやで酒を飲む五人が見える。騒がしくはない。時々、笑い声が聞こえる。いかにも楽しげであった。落ち始めた日の光を受けて、陰影の深まった彼らの姿は、さながら一服の絵のように見える。

「……趙雲は、行かなくていいのかい？」

「私はいつでも慶次殿と飲む機会があります。それに　主がいぬ間にお客の相手をするのは臣下の務め」

「そっか……」

一刀は頷く。そして、星の顔に浮かぶ表情を見て言った。

「もう、決めたんだね」

「はい。……もっとも、慶次殿はまだ認めて下さらぬようですが」

星は苦笑する。一刀は頷くと、もう一度あずまやで酒を飲む彼らの姿を見た。月並みな台詞であるが、彼らは格好良かった。そして思う　ああいう大人になりたい。まだ、自分はその場所で酒を飲むには若すぎる。

「早く、オレもあんな風にお酒を飲めるようになりたいな」

「そのときは、私も一緒にします　もちろん、そのときは」

「ああ。前田殿も誘ってくれるかな？」

「はい」

二人は笑顔を交わす。そんな二人を見て、愛紗も微笑んだ。

ただ孫乾だけが、その表情を変えなかった。

第5章 決意(2)

夕暮れが近づく頃、一刀たちは帰っていった。彼らには、迎賓館での夕食会が待っている。それもまた、天の御遣いの仕事であった。

周倉たちも帰って行った。せめて一泊でも、と誘う慶次郎であったが、二人は首を振った。

「楽をすると怠けたくなりますから」

そう言つて周倉は笑った。

そして今、慶次郎は縁側に座り星と一緒に月を見上げながら酒を飲んでゐる。冬華の姿はない。彼女の部屋には『少し出かけてくる』との書き置きがあつた。星は上機嫌で慶次郎の酒杯に酒を注いでゐる。

それにしても、慶次郎の酒の強さは尋常ではない。今日の午後からずつと飲んでゐるといふのに、その表情はまるで変わらない。自分も酒に強くならなくては、と密かに思う星である。

「……………む？」

慶次郎が声を上げた。二人の間にある皿が空になっている。

「もう、なくなりましたか」

そこには、半刻（一時間）ほど前までメンマが山盛りになっていた。それが綺麗になくなつてゐる。星に教えてもらつて以来、慶次

郎にとってもメンマは好物となっていた。そんな二人が食べ始めると、あっという間にそれはなくなってしまう。そして今なくなったそれは、最後の買い置きであった。

ちなみに、このメンマは『流流楼』の前の出店、『季季亭』で購入したものである。そのメンマの味はまるで星のために作られたのではないかと思われるほどで、彼女の好み見事に合致していた。しかも、価格は普通のメンマと変わらない。したがって、最近の星はその店のメンマしか買っていない。

「どれ」

星は立ち上がった。

「慶次殿。ちょっと買い出しに行つて参ります」

「うむ。気をつけろよ」

「はは。この趙子龍に気をつけろとは。……でも」

星の顔が、ほんのりと桃色に染まる。

「ん？」

「い、行つて参ります！」

そう言つと、星は駆けだしていった。

しばらくして、入口の扉の鈴が鳴った。まだ、四半刻（三〇分）も経っていない。

「ずいぶんと早かったな」

そう言って振り返る慶次郎の前で、その美しい黒髪の女性は頭を下げた。右手には大きな瓶を下げている。

「……おぬし」

「昼間は、大変お世話になりました」

そこには下？の美髪公　愛紗がいた。

「いかがですか」

「うむ。なかなか旨い」

慶次郎はメンマを食べている。愛紗の持って来た瓶にはメンマが入っていた。迎賓館の料理人から譲ってもらったという。

「よく知っておったな。わしがメンマ好きなことを」

「昼間、趙雲殿からお聞きしました」

「そうか」

りーん。りーん。

鈴虫の鳴き声が聞こえる。その鳴き声が一瞬途切れたとき、愛紗は問うた。

「……あの、趙雲殿は？」

「メンマを買いに行った。ちょうどすれ違いになったようじゃな」

「そうですか……」

慶次郎は愛紗の顔を見る。少し赤い。

「おぬし。飲んできたのか」

「わかりますか」

「まあ、わしも酒飲みじゃからな」

「……あの！」

急に愛紗が声を上げた。真剣な表情で慶次郎を見ている。そして告げた。

「あの、私の話を聞いて下さいますか」

「どうして、わたしに」

「……その」

愛紗は言いにくそうである。慶次郎はそんな彼女を横目に、くいと酒を流し込んだ。

「前田殿は、その……年齢の割に、老成されているように見えまして」

ぶつ。

酒を吹き出す　流石は三国志の英雄、侮れぬ。

慶次郎が頷くのを見て、愛紗は自分の半生を語り始めた。

彼女は五年程前まで、ただ力が強いだけの少女であった。自分の

生まれた農村で、両親と兄とともに暮らしていた。年々負担が増える年貢に対して生活は困窮する一方であったが、お上に反抗しようという気持ちはさらさらなかった。そういうものだと思っていた。

しかし、兄は違った。将来、家を継ぐことが決まっていた兄にとつて、このまま農民として生きることが、まさに奴隷の人生に思えたのだろう。そして、五年前。黄巾賊が蜂起すると、兄は家を出てそれに参加した。

「おぬしの兄上は、黄巾賊だったのか？」

「はい。黄巾賊』でした』」

家を捨てて二週間後、兄は帰ってきた。その人相は一変していた。農民のための義賊。そうした噂に乗って黄巾賊に参加した兄は、すぐに彼らが義賊ではなく、単なる略奪者であることを知った。しかも、その略奪の対象はこともあろうに、自分たち農民であった。そしてある農村を襲撃することになったとき、兄は黄巾賊を抜けた。より正確には、逃げ出した。

そんな兄を、家族は暖かく迎えた。しかし、その日々は長くは続かなかつた、ある日、官吏たちがやってきた。兄は黄巾賊であったことを、同じ村人に密告されたのである。泣いてすぎる愛紗に、兄はこう言った。

『いいんだ、愛紗。オレは罪を償ってくる』

しかし、兄は罪を償うことはできなかつた。捕縛した兄を官吏が村から連れて行く途中、逃亡した兄を探しに来た黄巾賊の一隊とち合ったのである。そして、官吏たちは兄を放って逃げた。愛紗が最後に兄を見たとき、彼は捕縛されたまま、体中を刺されて死んで

いた。そして、愛紗は村を出た。

「……そのとき、私は決めたのです。悪鬼羅刹と言われようと、必ずや黄巾賊を滅ぼすと。そして、今の漢朝を滅ぼすと」

「……」

「そんな私にとって、天の御遣いの予言は、まさに天啓でした。そして、実際に天の御遣いに出会い、その手足として生きる幸運を得た。これぞ、天の配剤といえましょう」

「……なぜ、そんなことをわしに話す」

「さあ？」

愛紗は自分でもわからぬ、といった表情で首を傾げた。その顔は、酒のためかほんのりと赤くなっている。

「……前田殿なら、聞いてくれると思ったからですか」

「理由になっておらんぞ」

「……そうですね」

それでも、うれしそうに笑った。そこに、三国志の豪傑はいなかった。ただの十代の少女がいた。

「その話、義兄弟には話したか」

「はい。でも、兄が黄巾賊であったことまでは」

「そうか」

「兄は……兄は黄巾賊に殺された、とだけ」

親しいからこそ、話せないこともある。だからこそ、愛紗は慶次郎を訪ねてきたのだらう。そう、矛で語り合った者同士だけがわ

かる、その信頼から。

「おぬしは、その生き方を貫くつもりか」

「はい」

「失礼を承知で言う。おぬしは若い。そんなに急がなくても良いのではないか」

「お言葉ごもつとも。……しかし、既に我が道は血塗られております。斬った黄巾賊の数も百、二百ではききませぬ。取り返しなど、とうにききませぬ」

寂しそくに、愛紗は微笑んだ。そして、ぺこりと頭を下げた。

「お話、聞いて下さいますありがとうございます。何とかしました。何とかすつとしましたぞ」

「そうか」

顔を上げたその表情は、いつもの愛紗だった。そんな彼女に、慶次郎は言わねばならない。余計なお世話だとわかっている。それでも、これは年寄りの仕事だ。そう、思いながら。

「おぬしの決意に、わしからとやかく言うことはない。わしはこの国に来て、ほんの一ヶ月と少しに過ぎぬ。そして、おぬしの苦しみがわかるとも言わぬ。だが……」

「だが？」

慶次郎は愛紗の瞳をじつと見つめた。そこには、憂いを秘めつつも、固い決意を持った光がある。

「だが……その黄巾賊の中に、おぬしの『兄』がいるかもしれぬということを忘れるな。そして官吏の中に、おぬしの『兄』がいるか

もしれぬということを忘れるな」

「……………」

「世を憂い、悩み、そして正そうと思っているのは…………おぬしだけではない」

初めて、愛紗の瞳が揺れた。

外に官吏が待っている。愛紗の兄は彼らに家族と別れる時間を願っている。しかし、ほかの村人たちの前でその気持ちを示すわけにはいかなかった。村八分にされては生きていけない。愛紗は一人、兄にすがってひとしきり泣いた後、兄に問うた。

「兄様」

「なんだい」

「後悔してはおりませぬか？」

「しないよ」

「しかし……………」

「黄巾賊に入ったことは間違いだった。でも」

「でも？」

「お前たちを…………村を守るために、何かをしなければと決意したこと。そのことは後悔していない。その気持ちを忘れぬ限り、オレは胸を張って生きることができる」

「…………兄様」

大柄な兄は愛紗と目を合わせるために、膝をついた。そして、愛紗の薄い胸を右手の拳で軽くこづいた。

『……お前の中にも、そうしたものはあるかな?』

『な……。ありますとも!』

『ほう』

『私も、兄様と同じようにこの村を　いえ、この世の中をずっと
良いものに見せましますとも!』

『ははは、その意気だ』

兄は優しい笑顔で、愛紗の頭を撫でた。

『その気持ち、忘れるなよ』

兄の笑顔が、目の前の男の顔に重なった。その顔がにじんで霞む。
慶次郎はそんな愛紗に気づかぬように視線を外すと、手元に酒瓶と
酒杯を引き寄せた。

「関羽殿。我ら武人は、確かに矛にて語り合うことができる者じゃ」

「……」

「だが、杯にて会話を交わすことができる者でもあると思うのじゃ
が……如何かな?」

「……」

一瞬の躊躇の後、愛紗は無言で頷いた。慶次郎は杯になみなみと
酒を注ぐと、愛紗に向かってそれをゆっくりと差し出した。愛紗は
頭を下げて、それを両手で受け取った。そして、一気に飲み干す。

「……うまいですな」

「そうか」

愛紗は慶次郎に杯を返す。そして、それになみなみと酒を注いだ。慶次郎もまた、それを一気に飲み干す。そして、その杯を愛紗に差し出した。月が煌々と輝いている。鈴虫が鳴いている。ただ、それだけの時間が流れていった。

入口の扉の鈴が鳴った。

第5章 決意(3)

「ん？どうしたんだ？」

隊列の先頭にいる筈の桔梗が自分のところまで下がって来たのを見て、一刀は問いかけた。

小沛の街の視察を無事終えた一刀たちは、下？への帰路の道程にあつた。そして街を出て半刻（一時間）程過ぎた頃、愛紗と並んで馬を進めていた一刀のところ、桔梗が近づいてきたのである。

気がつけば、後尾にいる筈の紫苑もまた、一刀の近くまで来ている。その紫苑と目で会話を交わすと、桔梗は一刀に話しかけた。

「のう、お館様」

「？」

「ものは相談なのじゃが……」

そこまで話して、躊躇した。こんなことをお願いしたら、ご自分が頼られていないと弱気にはならねはしないか。いやいや、その程度で気を散じていては中華統一など夢また夢　やはり、申し上げなくてはならぬ。

「あー、おほん。実は……」

「ご主人様、よろしいでしょうか」

愛紗が、一刀と桔梗の会話に割り込んできた。その瞳には、何か重大なことを伝えたいという意思が見える。

「桔梗、すまぬ。先に良いか」
「……うむ。構わぬぞ」

そう返事をしつつも、桔梗は不安にかられた。小沛の『天の御遣い』こと、前田慶次郎に対する愛紗の警戒の念については、重々承知していた。だからこそ、愛紗が彼について何か言う前に、一刀に提案するつもりだったのだが……。

「なんだい、愛紗？」

「はい。前田慶次郎殿のことです」

桔梗は、紫苑と目を見合わせて顔を曇らせた。先を越されたかそれも、悪い意味で。

先日、慶次郎と時間を共にした桔梗が紫苑と話して結論に至ったのは、彼をこのままにはしておけないということであった。あれほどの武人 ないし『いい男』を、あのまま野放しにしておくのは天下の損失である。決して、一緒に酒が飲める男を側に置きたいわけではない。そうよの、紫苑。

そんな桔梗の気持ちを知って知らずか、愛紗は一刀に提案をする。

「……前田殿を私たちの仲間として、お誘いするわけにはいかないでしょうか」

「……え？」

一刀、桔梗、そして紫苑の声がはもった。皆、口を開けたままで

ある。

「……なんだ、桔梗。私はそんなにおかしなことを言ったか？」

愛紗が桔梗をじろりと見た。慌てて、桔梗は言葉を返す。

「そ、そんなことはないのじゃが……。愛紗、おぬしは前田殿に対してかなり辛辣な見方をしてはいなかったかの？」

「その通り。しかし、昨晚お話しする機会を得て、見方が変わりました。あの方は、ご主人様に必要な方です」

「愛紗……」

一刀はうれしくなった。自分の憧れの人を、仲間が信じてくれた。だが、ふとあることに気づいた。

「愛紗」

「はい」

「いつの間にあれから慶次さんと……。いや、前田殿と会ったの？」

「！」

愛紗の顔が一瞬にして青ざめた。一刀は苦笑いをして言葉を続ける。

「前田殿と、愛紗が話をしてくれたこと、うれしく思うよ。だけど、少しだけ気になって」

「は、はい……。実は昨晚、街中で趙雲殿と『偶然』に会いまして。それで……。その、三人で一緒に酒を飲むことに」

一刀は、慶次郎、趙雲、愛紗が三人で酒を飲んでいる姿を思い浮かべた。絵になる。しかも、昨晚は月が綺麗な夜だった。いいな

あ。自分もその場にいたかつたなあ。そんなことを思う一刀の側で、桔梗が愛紗に声を掛けた。その声には、若干の怒気が含まれている。

「愛紗！何でわしらを呼ばぬのじゃ！」

「そうよ、愛紗ちゃん。それはちよつとどうかと思うわ」

紫苑まで、桔梗の言葉に乗っている。その顔は笑っているのだが。

「し、仕方ないだろう！急だったのだ！そ、そんなことより！」

愛紗はあたふたと二人の言葉を遮ると、一刀に問うた。

「ご主人様！前田殿をお誘いする件……いかがでしょうか」

「ありがとう、愛紗。あの人のことを、認めてくれて」

一刀は笑顔で愛紗に答える。話題を蒸し返されなかったことに、愛紗はほっと胸をなで下ろした。そんな愛紗をよそに、桔梗がうきうきした顔で、一刀に話しかける。

「それでは、お館様。早速、小沛に戻って前田殿に……」

「いや。前田殿は誘わない」

「……え……！？」「」

桔梗、紫苑、愛紗の声が重なった。意外であった。彼なら、真っ先に賛成すると思っていた。いや、彼の方からいつかそのことを言い出すだろうと、彼女らは『確信』していた。だからこそ、小沛の

街を出てから半刻の間、『待っていた』のである。

「決して、男の嫉妬なんかじゃない……ということだけは、わかってほしい」

一刀は三人の顔をゆっくりと見渡しながら言葉を続ける。その顔に、恥辱や狼狽の表情はまったくなかった。そこには、決意をした男の顔があった。このような表情は、初めて見た気がする。そんなことを思いながら、愛紗は尋ねた。

「それはもちろんです。ご主人様はそのようなお方ではありませんですが、理由を教えてくださいませんか」

「うん」

一刀は頷くと、大きく息を吸った。

「前田殿は……言にくいな、もう慶次さんでいいか。うん、慶次さん」

そう言うと、照れくさそうに一刀は鼻の頭をかいた。そして、話し始めた。

「慶次さんは否定したけど、彼が天から来たことは紛れもない事実だ。そのことを、なぜオレが知っているのか。その理由は、まだ言えない。ただ言えるのは、あの人はオレの憧れだということだ。愛紗たちも、わかっただろう？あの人は、なんて言うか　すごい、人なんだよ」

「……はい」

「すごく、頼りになる人なんだ。……側にいたら、頼ってしまうと思う。きつと、そうなる」

「……」
「オレは天の御遣いだ。この大陸を平和にするために、天から遣わされた。そんな男が、人に頼るわけにはいかない。そして オレには、もう頼りになる仲間たちがいるんだ」
「……!」

この数日の間に、この人はこんなにも成長したのか 愛紗は胸が詰まる思いだった。

これまで、愛紗にとって一刀の存在価値は、その白く輝く天の服と天の知識にあった。それだけが『天の御遣い』としての彼の意味だった。天の御遣いを演じてくれていることに、心から感謝はしている。だが、それだけであった。

確かに、異世界から来たのかもしれない。天界から来たのかもしれない。だからといって、天の御遣いとしてこの乱世を正す存在たりえるのは、容易なことではない。本物の『英雄』であったとしても、それは至難の業であった。そしてこの若者は、英雄ではありえない。

最初に会って、すぐにわかった。多少のたしなみはあるようだが、武人としてはいかにも『未熟』。その精神も、きわめて『若輩』。彼から天の服をはぎ、口を閉じさせてしまえばこの世界のどこにもいる若者と変わらない。そして、この世界を知識として知っていても現実を知らない。これはまさに天の『凡人』であろう。

そして、だからこそ『御輿』としての価値があると考えた。庇護する自分たちの力がなければ生きていけない、天から来たひ弱な若

者。自分たちが庇護を与える限り、彼は自分自身を守るために、その力を尽くしてくれるだろう。いわば、物々交換である。

そんな打算的な自分の考えを、一刀もうすうす気づいていたと思う。恨まれてもやむを得ない。そう覚悟していた。それだけのことを、彼には強要していた。何しろ、いきなり乱世を正す英雄を演じろというのだから。だが、それで中華の平和が実現できるなら安いものだと思った。いざとなれば、最後は責任を取って自裁する覚悟だった。

けれども、自分のそんな彼への評価は浅はかだった。この人は自らが御輿であることを自覚しながらも、その期待から逃げることなく、その立場に甘えることなく、その運命を呪うことなく、すべてを引き受けてなお天の御遣いたろうとしている。

今さら、わかった。この人は、決して凡人などではない。『本物の天の御遣いだ。今は鯉魚に過ぎなくとも、いつか必ず龍となる英雄になるだろう。』

気がつけば、愛紗は馬から下りて膝をついていた。気がつけば、桔梗、紫苑も同じように膝をついている。愛紗は三人を代表して、その思いを宣誓した。

「ご主人様……我ら、ご期待に添うために、改めて忠誠を誓う次第」「ありがとう。これからも、よろしく頼む」「……はっ！」「」

一刀はにっこりと微笑むと、彼女らに馬に乗るように促した。そ

して、改めて自分がたどりついた『仮説』と慶次郎のことを思った。

一刀がたどりついた仮説　それは、自分が物語の登場人物、それも『主人公』ではないかということであった。自分でも、突拍子もないことを考えていると思う。しかし、そうとしか考えられなかった。なぜなら、すべてがうまくいきすぎるからである。

別世界に来たのはともかく、たった一ヶ月で劉備、関羽、張飛、諸葛亮、鳳統、黄忠、嚴顔、魏延、そして孫乾が配下になった。そして、実質上、徐州の主になった　ありえない、そんなこと。戦国時代をネタにした自分の妄想だって、もう少し現実味があった。そんなに都合よく、自分がヒーローになれる世界に来れるわけがない。

そして、自分がこんなにもてるわけがないのも、残念ながらこれまでの人生でわかっていた（実際には、彼に片思いしている女性はそれなりにいたのだが）。だからこそ、自分に仕官した美少女たち　三国志の武将たちが、揃いも揃って自分に思いを寄せるのはおかしいと感じた（愛紗だけは、そうではないようであったが）。ここでは、まるで恋愛ゲームの主人公ではないか。

自分が物語の登場人物ではないかという仮説は、虚構の存在である『花の慶次』の前田慶次郎の登場によって確信となった。その登場は一刀にとって存外の喜びであったが、同時に思い切り彼をへこませた。

『花の慶次』の慶次郎が存在する世界で、自分は恋愛ゲームの主人公として過ごすのか。『花の慶次』の世界に憧れた彼にとつて、今の自分がどんなに恵まれているとしても、忸怩たる思いが生じるのを止めることはできなかつたのである。

けれども、実際に『本物』の慶次郎を見て、そんな気持ちは吹き飛んだ。何をオレは悩んでいたのだろう。自分が恋愛ゲームの主人公でも何でもいい。自分は『ああんりたいのではなかったか』。

『憧れ』を目の前にして、うじうじと悩んでいる自分が恥ずかしく思えた。誰かに与えられたかもしれない役割に悩む前に、自分は自分として生き抜けばいい。だから、心密かに誓った。誰かに強制されてではなく、自分の意思でこの中華に平和をもたらすと『命をかけて』。

慶次郎は人に頼るような男を決して認めはしまい。彼が認めるのは、己の力で生きる男。そして、己の美学のために命をかける男。自分は、そんな男になるのだ。

『ん？北郷殿は飲まぬのか？』

あのときの慶次郎の笑顔を思い出す。

心が震えた。

昨日、見た風景。

あずまやで酒を酌み交わす『漢』たち。

今度会うときは、慶次郎の誘いに胸を張って頷きたい。『いただきます』と。

そしていつの日か　あの人に『友』と呼ばれるように。

一刀はその決意を新たにすると、両手の手綱を強く握りしめた。

そんな一刀を、孫乾だけが冷たい表情で見つめていた。

第5章 決意(4)

『流流楼』の五階にある東側の窓から、小沛の街から離れていく下？の一行の姿が見える。彼らの姿を視界におさめながら、稟は部下からの報告を聞いていた。

報告しているのは、下？の一行が小沛に到着した際、稟に慶次郎の不在を告げた小男である。かつて豫州において盗賊として名を馳せたが、稟たちに捕らえられた。その後、才覚を買われて仕えていく。

「以上が、お二方がご不在時の『かの者』についての報告の概要です。詳しくは、報告書を」

「ご苦労。下がちなさい」

「は」

小男は頭を下げると、階下に降りていった。

「前田のお兄さんは、出かけるみたいですね」

風がつぶやく。彼女は西側の窓から遠眼鏡を覗いていた。李典こと真桜が、眼鏡を参考に発明した特注品である。それには答えず、稟は机上の竹簡に目を移す。

「予定通り、来週にはいらっしやるそうよ」

「では、そろそろ星ちゃんを動かさなくてはなりませんね」

「ええ」

稟はそう答えると、風の背中から西側の窓の外の景色に目をやっ

た。そこからは、彼女らが慶次郎を居候させている屋敷が見下ろせた。

慶次郎が普段寝転んでいる敷物の上で、星は鼻歌を歌いながら龍牙の手入れをしていた。昨晩は、実に気持ちの良い夜であった。

メンマの買い出しから戻ると、愛紗が慶次郎と一緒に酒を飲んでいた。それを見たときは、正直いい気分はしなかった。しかし、話してみると愛紗はともからかいがないのがある。いや、愛すべき人物であった。酒宴が終わる頃には、彼女とは真名をかわすまでの仲になっていた。

愛紗がさりげなく慶次郎にも真名を預けていたのは気になったが
まあ、いいだろう。

また、久しぶりに慶次郎の武技を見ることができたのも、実に爽快な出来事であった。一度槍を交わしたときに感じたその底知れぬ武力は勘違いではなかった。なにしろ、青龍偃月刀をとっては徐州の武神と讃えられるあの愛紗を、一瞬であるとはいえ本気にさせたのである。

しかも、その際に慶次郎が携えていた武器は青龍偃月刀であり、彼本来の武器ではなかった。臥牛山から彼が持ち帰ったあの朱槍、常人には持つことすら難しい重量、ぞっとするような長大な槍刃、まるで槍ではないような『槍』を彼が用いたら、どれほどのものであるか。

慶次郎は今、屋敷を空けている。彼は松風と野風を預けている街

の馬場に出かけていた。一晩でも離れると寂しい　というわけで、慶次郎は朝食を終えるといそいそと出かけていた。

<ん?>

気配を感じた。顔を上げた星の目に、お茶を乗せたお盆を持つ管轄こと冬華の姿が映る。

星は眉をひそめた。昨日初めて会って以来、二人は冷戦状態にある。あからさまに慶次郎に好意を示す冬華に対して、星はあまり良い感情を持っていなかった。

そんな星の気持ちを知って知らずか、冬華は星の隣に来るとお盆を床の上に置く。そして自分も敷物の上に座った。

「お茶をどうぞ」

「……何用ですか？」

「そんなに警戒しないで。……あなたに、ちょっとお願いがあつて
「お茶のお礼程度なら」

星は愛槍を傍らに置くと、お茶の湯飲みに手を伸ばした。そんな星の姿を、冬華がじっと見ている。

「慶次のこと、教えてほしいの」

「慶次殿のこと、ですか？」

「慶次から、この国に来てから一番長く共に時間を過ごしたのはあなただと聞いたわ」

「……確かにそうですが」

星は慎重に答える。冬華はにこりと笑った。同性の星でさえ、ど

きつとするような笑顔である。

「あの人のこと、できるだけ知っておきたいの。もちろん、私が彼について知っていることも話すわ」

「　　というわけで、黄巾賊の連中と慶次殿は酒盛りを始めましたな」

「ふふふ。慶次らしいわね」

結局、星は冬華の願いを受け入れた。もつとも、彼が『天の御遣い』の予言をなぞるように顕現したことは伏せている。もはや、そのことを誰にも話すつもりはない。あくまで、東方からの旅人として語った。

冬華は口を押さえて小さく笑っている。星もそれに合わせて微笑んだが、内心は困惑していた。昨日、確かにこの女性は自分に対して敵意　　そう、嫉妬の感情を自分に見せていた。それが、今は感じられない。

「水仙殿」

「何かしら、趙雲殿」

「失礼を承知で申し上げるが、昨日とはずいぶん雰囲気違って見えますな。いかがなされたか」

「……そう、見えるかしら」

「はい」

冬華は星から視線を外して、庭に視線を移した。庭の中央に、あずまやが見える。それをしばらく見つめた後、彼女は静かに微笑ん

だ。

「実は私……記憶が戻りまして」

「！」

「家族も心配しているでしょう。明日には、小沛を発とうと思いません」

しばらくの間、星は絶句した。確かに、記憶が戻ったというなら、そうした判断もうなずけないこともない。だが……。気を取り直して、冬華に向かって問う。

「水仙殿。つかぬことをお尋ねいたします」

「何かしら」

「あなたはそれでよろしいのですか」

「それでよろしいのですか、とは？」

「とぼけないでいただきたい。慶次殿のことです」

「慶次のこと？」

冬華は不思議そうに首をかしげる。相変わらず、何を考えているのかわからない。星は続けた。

「このまま、慶次殿と別れるおつもりということですか」

「そうなるわね」

「！」

「あなたにとっては、都合が良いことではなくて」

「……そのことは認めましょう」

星は頷く。だが、納得はいかない。

「しかし、あなたの彼への……慶次殿への執着はその程度だったの

ですか」
「そうよ」

冬華は当たり前のように頷く。

「詳しくは言えないけど、私は洛陽のとある大商人の娘なの。そのことを思い出した以上、命の恩人であるとはいえ、いつまでも東方からの旅人程度を気に掛けているわけにはいかないわ　それに」
「それに？」

「私には……そう私には、心から愛している許嬌がいるのよ」

星は、自分の気持ちを計りかねていた。正直に言えば、うれしい。慶次郎と自分の間に突然割り込んできた異物。それが、自ら立ち去ろうとしている。しかし、釈然としないものを感じた。そんな星の気持ちには気づかぬように、冬華は続ける。

「だから、せめて慶次の思い出だけでも、洛陽に持ち帰ろうかと」
「……左様か」
「ええ」

冬華は、にっこりと頷いた。

「それでは、次は私の番ね。慶次とのなれそめからお話ししましょうか……」

「お話、どうもありがとうございます」
「いえ、私こそ」

冬華は星に向かって頭を下げた。星も冬華に頭を下げる。気がつけば、太陽は真上に上がっていた。そろそろ、昼食の時間である。慶次郎も戻ってくるだろう。

「お茶の礼には不足していたかもしれませぬが」

「いえ、十分でした。……これで、心残りはありません」

もう一度、冬華は頭を下げる。そして、星の瞳をじっと見つめた。

「趙雲殿」

「はい」

「あなたは強い人です。……悔しいけれど、慶次の隣に並び立つのに相応しい」

「水仙殿？」

「あの人のこと、よろしくお願いしますね」

そう言うと冬華はさらにもう一度、丁寧に頭を下げた。

やはり、おかしい。愛しい許媚のいる者の態度ではない。何かを隠しているのではないか。そう思った星は冬華に問いかけようとした。

「水仙殿。あなたは……」

「冬華」

「冬華？」

「私の真名です。あなたに預けましょう」

「……なぜ、それを私に」

「それを預けるに値するお方と、判断したまで」

その真摯な瞳に、星は意地を張ることの無意味さを悟った。至誠

には至誠を持って返さねばならぬ。

「……私の真名もお預けしましょう」

「趙雲殿？」

「既にご存じかと思いますが……星と申します」

「……なぜ、それを私に」

「はは。あなたが私より『いい女』に見えたことがしゃくに障りました。……まあ、意趣返しですな」

「まあ」

二人は顔を見合わせて小さく笑った。星は冬華の笑顔を見ながら、若干の寂しさを感じた。確かに、慶次郎をめぐっていがみ合いもした。しかし、考えを変えれば彼女は自分と同じように彼を慕う仲間でもある。意外と、気が合う女性であるのかもしれない。

冬華もそう思っているのかもしれない。自分を見る彼女の表情が、これまでになく優しく見える。その表情のまま、冬華は星に最後の頼み事をした。

「このこと、慶次にはくれぐれも内緒でお願いします」

「……それでよろしいのですか」

「はい」

「しかし」

「良いのです」

冬華は微笑んだ。

第5章 決意(5)

慶次郎が愛紗と語らったその夜 冬華は一人、屋敷の庭にあるあずまやに座っていた。その建物を囲んで、結界が張つてある。結界の中にいる限り、外からその姿、そして気配は感じることはできない。

月明かりの下、慶次郎と愛紗、そして星が一緒に酒を飲んでるのが見える。時折、笑いが起きた。むきになつた愛紗を星がからかい、それを慶次郎が笑う。そんな風景が繰り返されていた。

<……本当なら、私もあの場所にいる筈だったのに>

彼女は唇を噛んだ。その時、冬華の背後に人影が現れた。振り返らずに、彼女は言う。

「遅いじゃない」

「すまない。北郷の奴が、なかなか離してくれなくてな」

そう言うと孫乾 『左慈』は苦笑いをした。

左慈の笑顔が気に食わなくて、冬華は黙り込んだ。自分がこんな気分ですわっていたというのに、この男ときたら そんな冬華を見て、左慈も口を閉じた。屋敷の縁側から、楽しそうな笑い声が聞こえてくる。対照的な沈黙が、あずまやの二人を包んでいた。やがて、冬華が口を開いた。

「それで、何の用かしら？」

「つれないな。『仲間』だろう？」

「さつさと用件を言って。……私、あなたのように暇じゃないの」

左慈は冬華の表情を探る。その表情はどこまでも冷え切っているように見えた。感情をどこかに置き忘れた、氷の女。それこそが、左慈にとつての冬華である。だからこそ、下？の一行の到着時に彼女が示した態度が気になった。

臥牛山の鏡池から下？の一行よりも一足先に小沛の街に着いていた左慈は、門前で小沛の『天の御遣い』をめぐって趙雲と言い合いをする冬華を見た。そして、その男に対して輝くような笑顔を見せる冬華を見た。その一連の過程で彼女の示した表情は、とても演技であるように思えなかったのだ。

左慈は縁側に目をやると、つぶやいた。

「……『天の御遣い』とは、うまくやっているようだな」

「何を言ってるのかしら。今回、私は一言たりとも『彼』と話した記憶はないけれど」

「お前こそ、何を言っている。あんなにうれしそうに話すお前、オシは初めて見たぞ」

「え？」

「ん？」

二人は顔を見合わせる。話がかみ合わない。左慈は首を傾げながら、冬華に告げた。

「まあ、いい。その天の御遣い……悪いが消させてもらっぞ」

改めて、沈黙がはずやまやの中を支配した。冬華は、戸惑った。天の御遣いを……北郷一刀を消す？左慈もまた　自分と同じように　管理者として壊れてしまったのだろうか。冬華は問うた。

「……どういうこと？」

「奴は、例えるならば病原菌だ。悪しき影響がこれ以上広がる前に、消毒しなくてはならない」

「何言ってるのかしら。繰り返しのお役目に、頭が壊れたの？」

「壊れているとすれば、それはお前だ。自分の役割を忘れたのか」

「……必要最低限の役割は、果たしてきたつもりよ」

「ならば、オレの言うことも分かるな。オレも自分の役割を果たす」

どうにも話がかみ合わない。やはり、この男は壊れてしまったのか。無理もない。左慈はこれまで頑張りすぎた。よく持ったというべきかしら　そんなことを思いながら、冬華はとりあえず話しかけた。

「左慈。あなたがその役割　北郷の抹殺を狙う『悪役』を演じるのは、まだまだ先の『予定』でしょ。北郷はまだ、中華の統一どころか徐州しか得ていないじゃない」

「……管轄」

「何よ」

左慈は冬華の顔を見た。まさか、知らないのか。あの男が『何者』であるのか。

「天の御遣いとは誰だ」

「馬鹿にしてるの？」

「答える」

「……北郷一刀。未来の日本から呼ばれた一七歳の男。この世界の

救い主を演じる男」

「やはり、な」

「左慈。……何が言いたいの」

左慈は冬華を見た。氷ですら暖かい。そう思えるほどに、冬華の表情は冷えていた。彼は当初、それが彼女ならではの冷静さによるものであると思っていた。しかし、今はわかる。逆だった。彼女は怒っていた。いや、激昂していた。その感情はあまりに大きくて、彼女から表情を奪い去っていた。それはいつ、吹雪になってもおかしくない。左慈は慎重に言葉を選んで、冬華に告げた。

「今回、天の御遣いはもう一人いる」

「……！」

「といつても『本当にそうであるかどうかはわからない』。実際、オレもお前もそのことを知らなかった。……貂蟬や于吉なら、何か知ってるのかも知れないが」

忌々しげに、左慈は吐き捨てる。そして、『そのこと』を告げた。

「その天の御遣いらしき男は、北郷と同様に小沛の南に現れた。名を 前田慶次郎という」

冬華は呆然とした。一瞬、頭が真っ白になる。

何。何を言っているの、この男……。

その表情を見て、左慈は頷いた。

「やはり、知らなかったようだ。管轄」

「あの男 前田慶次郎は、理由はわからないが自らが別の世界から来たことは伏せている」

「年齢不詳、経歴不詳……何者であるのか、さっぱりわからない」

「だが、北郷はあの男を知っている。それどころか、憧れの存在であると言いつつ切っていた」

そこまで言つて、左慈は冬華の表情を確認した。相変わらず、まったくその表情は変わらない。だが、自分を見失っているようでもない。左慈は安心した。やはり、彼女は管理者だった。これならば、自分の主張に対して異議を唱えることはないだろう。

「そこでだ、管轄。オレたちのやることはわかるだろう？」

「オレたちは管理者だ。北郷一刀が中華を統一するように、この『外史』を管理せねばならない」

そして、この『特別』な外史において、彼の友たることが自分の望み。悪役を演じることもなく、遠くから彼を眺めるのではなく、その人生に寄り添って生きるのだ。左慈の口調に熱が入る。

「だが、あの男 前田慶次郎は、北郷に影響を与えすぎる。恐らく、北郷が中華を統一するにあたり、最大の障害となるだろう」

「だからこそ、その可能性を抹消しなくてはならない。この外史において病原菌のごときあの男を」

「……黙りなさい」

「最後まで聞けよ。できるだけ早く、あの男を排除しなくてはならないんだ。だから管輅、お前もいい気分はしないだろうが、管理者として協力を」

「黙りなさい、と私は言った」

冬華の手元で、白い光が走った。

慌てて首をすくめる左慈の目の前を、小刀の刀身が流れた。思いも寄らぬ冬華の行為に、左慈は叫ぶ。

「何をしゃがる！」

「あなた。さつきからうるさいわ」

「管輅！」

「……あの人に手を出したら、ただではおかない」

冬華の右手には、小刀が握られていた。片刃の、反りが入った小刀である。その黒柄には、龍の模様が刻まれていた。冬華は、躊躇せず、それをもう一度振る。その表情は変わらず冷えたままである。左慈は後ろに小さく飛んだ。

<こいつは……本当に管輅なのか？>

左慈は冷や汗をかいた。冬華は、管理者の中でも『予言』という特殊な役割を果たしている。そのため、左慈や于吉、そして貂蝉とは異なり、武力自体は一般人と変わらない。にもかかわらず、左慈は危うくその刃を首に受けるところであった。それは、彼女の並々ならぬ覚悟の程を示していた。本気、なのだ。

彼はふと、管理者にまつわるあるルールを思い出した。管理者は、この世界ではほぼ不死身である。ただし 『管理者は管理者が殺せる』。それは、役割を放棄した管理者を粛正するためのルールであった。そのことに気づいて、左慈はぞつとした。目の前の冬華がまとうもの。それはまごうことなき『殺気』であった。左慈は深呼吸すると、冬華に告げる。

「落ち着け、管輅。お前らしくもない」

「お前らしくない？……あなたにそんなことは言われたくないわね。不愉快だわ」

「……す、すまん」

自分が殺されかけたにもかかわらず、左慈は謝ってしまう。何だ、この重圧は。

「いいか。もう一度言うぞ。オレたち管理者は、あの前田という病原菌のごとき男を」

「……あの人にそんな言葉を使うのは止めて。本当に不愉快だわ」
「……すまん」

また、謝ってしまう。ええい、オレは何をしているのだ。顔をぶるぶると振ると、左慈は気合いを入れた。

「いいか！理由はわからんが、あの男の北郷への影響力は半端ない！ 仮に、あの男が北郷以外の勢力に所属した時のことを考えてみる！……極端な話だが、北郷がその勢力と戦いを選ばない可能性すらある。その場合、北郷が『中華を統一しない』可能性すらあるんだ！」

「それが、どうかして？」

「な！？……それにだ。あの男の北郷の『力』を削ぐ力も半端ない。

あれを見る！」

左慈は酒を飲んで語らう三人組　慶次郎と星、そして愛紗を指さした。

「本来なら、北郷の仲間になるはずの趙雲がああ男の下についている。そして、あの関羽ですら心を許している。……昼間、奴と会った黄忠、そして嚴顔とて、恐らくはそうだろう」

「だから、それがどうかして？」

「まだわからないのか！あんな男がこの外史にいる限り、北郷が中華の統一を成し遂げる可能性は限りなく減少するんだよ！」

「別にいいじゃない、それで」

冬華は平然と答えた。左慈は息を呑む。何を言っている、この女。信じがたいことに、管理者でありながら北郷のことはもはや眼中にないらしい。そして、この世界の行く末にも関心がないようだ。

管理者たる彼女が、たった一人の男にそこまで執着するとは予想だにできなかった。そんな執着を見せるのは、管理者として未熟な自分だけだと思っていた。

少しだけ、彼女に親近感がわいた。だが、北郷の未来のためには、やはりあの男をこのままにはしておくわけにはいかない。排除することはできなくとも、少なくともあの男が北郷に関わることだけは何としても避けなくては。

「管轄。このままの状態が続けば、この外史はいつもとは違った終わり方をするだろう」

「……」

「そして、『天』の奴らはこう思う。それは、病原菌　いや、あ

の男のせいだとな。そしてこうも思うだろう。次回の外史では、こんなことは絶対に起きないようにしよう、と」

「……何が言いたいのか」

食い付いた。左慈は内心ほくそ笑みながら、何食わぬ顔で冬華に告げた。

「恐らくは、お前があつた男と次の外史で出会う可能性も消えるだろうということだ」

「……っ」

冬華が唇を噛む。その表情に満足しながら、左慈は話を続けた。

「しかしだ。あの男がいても、北郷がその役割を 中華の統一を成し遂げれば、天の奴らは目をつぶってくれるかもしれない」

「……そんなこと」

「可能性はある。……繰り返される外史の中で、これからもあの男に会えることを想像してみよう」

「……」

冬華は無言である。やがて小刀を鞘に仕舞うと、その懐にしまい込んだ。その姿を見て、左慈は胸をなで下ろす。

「……それで。あなたはどうしたいのか？」

「そうこなくちゃな」

「言っておくけど、彼を排除するという話ならば、私は絶対に協力しないわよ」

「わかってるって」

左慈は額の汗を拭いながら答えた。話を通じる可能性は五分五分だと思っていた。彼女が狂気に陥っている可能性もあったのだ。だが、そういうわけでもなさそうだ。まあ、恋には狂っているようだが。そしてだからこそ、説得ができる。

「管輅。まず、お前はあの男から離れてオレたちと一緒に来い」

「！」

「それで、管理者たるお前とあの男の関係は切れる」

「左慈！」

「これは取引なんだよ、管輅」

「……」

自分が話の主導権を握っている。そう確信しながら、左慈は話を続けた。

「そして、あの男と北郷をできるかぎり接触させないようにことを進める」

「……」

「そうすることで、北郷に対するあの男の影響力を抑制できる。また、北郷配下の武将どもがあの男になびくのも防ぐことができる」

「……」

「理由はわからないが、あの男は北郷のように天の御遣いとして振る舞うつもりは毛頭ないらしい。今のような状態のまま、のんびり過ごす腹なのかもしれない。だとしたら、あの男がこの世界に与える影響は限りなく少なくなるだろう」

「……」

「だとすれば、オレたち管理者がとやかく手を出す理由はない。放っておこうじゃないか。きっと、天だって許してくれるさ。そして、

次の外史でお前はあの男とまた会える。たった一週間の逢瀬でも、それは貴重な時間だろ？」

左慈は両手を軽く挙げて微笑むと、冬華の顔を見た。

冬華も左慈の顔を見た。自分の目論見通りに話が進んでうれしいのだろう。こぼれる笑みを隠せていない。その顔を見ながら、冬華は冷たく思った。

この男、天を甘く見過ぎている。

自分の思考が恨めしい。運命に酔えない自分が悲しかった。慶次郎が『天の御遣い』の可能性がある。左慈からその言葉を聞いた瞬間、頭が真っ白になった。そして次の瞬間、頭が冷えた。そして決意した。何とかして、慶次郎を守らなくては。

左慈は、慶次郎のことを病原菌であると言っていた。すなわち、慶次郎は本来この外史に存在してはならないものである、と。いわば、慶次郎は何らかの『アクシデント』によってこの世界に呼ばれた存在である。そのように彼は考えているようであった。

しかし、冬華の頭の冷静な部分が、それは恐らくありえないと告げていた。そのようなミス为天がするだろうか。するわけがない。十中八九、慶次郎は何らかの『意図』によって天に選ばれ、この世界にもう一人の天の御遣いとして呼ばれたと考えるのが妥当であろう。

だとすれば、彼が次の外史でも呼ばれる可能性がないわけではな

い。しかし、この外史においてのみ『特別』に呼ばれたのだとしたら。恐らくは、後者であろう。そのように冬華は結論づけた。何しろ、これまでの外史は比類のない安定ぶりを見せてきた。そして、その安定を崩す理由は現時点では見当たらない。

だとしたら、自分がすべきことは愛する男をせめてこの世界では『殺させない』ことだ。左慈が慶次郎を殺そうとする可能性を、できる限り排除しなくてはならない。世界の管理者たる左慈にかなう人間など、『この世には存在しない』のだから。

私にとって、数万回に一度かもしれない奇跡。その奇跡の世界で、彼には生き抜いてほしい。私にとって唯一の『思い出』となるかもしれない、あの人には。

だからこそ、冬華は左慈に向かってあえて過激な態度をとった。それこそ、狂人に見えるほどに。そうすれば、彼は自分を説得するための交換条件として、慶次郎の身の安全を持ち出してくるだろう。そして事実、そうなった。

冬華は、左慈の顔を見た。この男に、説得されたふりをしなくてはならない。いずれにせよ、このような状況となった以上、自分が慶次郎から離れれば彼が死ぬ可能性は激減する。彼が生きていてくれれば、それだけでいい。そう思った。それだけで、いい。それだけで、いいのだ。

「わかったわ。その条件を呑みましよう」

「商談成立だな」

「その代わり、約束してくれるかしら。……慶次には今後一切手を出さないと。絶対に」

「……ああ。約束しよう」

左慈がそう頷くのを見て、冬華は目をつぶった。そして、左慈に告げる。

「それでは、明日の夜半。また、ここで」

「ああ。……それじゃあな」

左慈の気配が消えたことを確認すると、冬華は目を開けた。屋敷の縁側から、楽しそうな愛紗、星、そして慶次郎の笑い声が聞こえてくる。

冬華はそんな三人の姿を、ただじつと眺めていた。

その翌日、冬華が星と話す時間を持った日の丑の刻（午前二時）頃。左慈は屋敷のあずまやで冬華を待っていた。昨晚と同様、煌々とした月の光が差し込んでいる。ただ、風が若干強い。流れる雲が、時折その光を隠した。

また、その光が雲で隠された。その時、左慈の視界に白い人影が目に入った。それは屋敷から出てくると、ゆっくりと左慈に向かって歩いてくる。冬華である。左慈はあずまやを出ると、冬華に向かって歩いて行った。屋敷とあずまやのちょうど中央で、二人は落ち合う。左慈は冬華の顔を見て頷くと、屋敷に背を向けた。

「さて。行くとするか」

『どういふだね？』

「「!」」

左慈と冬華は振り向いた。しかし、そこには誰もいない。空耳か
いや、そんな筈はない。確かに聞こえた。『あの男』の声が。

『丑三つ時に駆け落ちかね。……風情がないのう』

<上か!>

左慈は屋敷の屋根に目を向ける。空が暗い。一巡の風が吹く。雲
が流れた。月の光が屋敷を照らしていく。

冬華は、両手で口を押さえながらつぶやいた。

「慶次……!」

屋根の上に、朱槍を肩にかついだ偉丈夫が座っていた。

第6章 対峙(1)

慶次郎は朱槍を右手に持ったまま、屋根から飛び降りた。猫科の猛獣を思わす動きである。体の大きさはうらはらに、ふわりと地面に立った。

「おぬし、孫乾といったか」

「……」

「駆け落ちするのは構わぬ。だが、こそこそするな。おぬしも男である」

「……」

「それとも、後ろめたいことでもあるのかね」

左慈が無言で右手を挙げて振る。ぶん、と鈍い音がした。風がやみ、静寂が訪れる。

「……庭一带に、結界を張った。これで、邪魔は入らない」

「ほう」

「慶次！」

冬華が慶次郎に向かって叫ぶ。その顔は無表情である。だが、その頬は小さく震えていた。

「どうして、ここに」

「星がの。おぬしの様子がおかしいと言ってきた」

「でも、その槍は」

「ああ。これはわしの『勘』かな」

そう答えるやいなや、慶次郎はその朱槍を左上方に振り上げる。

重く、鈍い音がした。左慈の上段回し蹴りが槍に阻まれている。右手がしびれた。朱槍を振るわねば、確実にその脚は慶次郎の左側頭部をとらえていただろう。

「左慈！」

「状況が変わった。消すしかない」

「そんな……！」

左慈は冬華から目を離すと、慶次郎をにらむ。そして、呪詛を吐いた。

「もともと、気に食わないんだよ。お前」

「ずいぶんと嫌われたもんだな」

「オレの『友』の道を妨げる。……オレの『仲間』の心を惑わせる。

……この世から消してやる」

「そう簡単にいくかね」

「ふん。……人間風情が。調子に乗るなよ」

左慈は、北郷一刀の友にずっとなりたかった。

一刀は、未来から呼ばれた単なる若者に過ぎない。そのことを誰よりも知る左慈である。そして、その若者がどんな時でも身に合わぬ大役を引き受けることを、どんな時でもあきらめないことを、そしてどんな時でも大切な誰かのために命をかけることを、彼は誰よりも知っていた。

『凡人』が『英雄』となる。その不可能を可能にしたのは、一刀の真摯さであり、不屈の精神であり、そして優しさであった。その心

のありように、左慈はいつしか惹かれていた。万能の管理者だからこそ、その凡人の生き様に憧れた。

繰り返される外史の中、何度も一刀たちにとどめを刺されながら、左慈は叶わぬ夢を思った。ああ、北郷。いつの日か、お前の友になりたい。語り合いたい。そして、一緒に馬鹿をやりたいぜ。冷え切った彼の精神の中で、それだけが唯一の熱源であった。

そして、その夢が実現する機会がこの外史において遂に訪れた。貂蝉から天の伝言を聞くやいなや、左慈は後先を考えずに行動を起こした。一瞬たりとも、この可能性という名の時間を無駄にはしなくなかった。その行動の結果が、今の一刀の立場である。

その友の立場を脅かす男。そして、仲間の心を惑わす男。もはや、迷いはない。この場で、確実に消しておかなくては。

左慈は慶次郎に向かって、左半身の姿勢を取った。

慶次郎は内心驚いていた。昨日の昼間に会ったとき、この孫乾冬華が『左慈』と呼ぶこの若者は、いかにも秀才の文官といった秀囲気であった。年は若く、色は白く、体も細い。

だがその姿形とはうらはらに、先程の回し蹴りはその速度といい、重さといい、角度といい、まず一流といって良かった。そして夜という条件を考えれば、あの蹴りを避けることができる人間は限られるのではなからうか。

慶次郎はこの世界で反則的に強いのは『女性』に限ると考えてい

た。しかし、その考えは訂正する必要があるかも知れぬ。そもそも、『左慈』といえば仙人であった筈。そして、若者は自分を『人間風情』とのたもった。……ただ者ではないことは確かかなようだ。慶次郎はゆっくりと腰を落とした。

「ふっ！」

「！」

一息で左慈との距離を詰める。そして朱槍を左から右へ思い切り振るった。

それを避けて、左慈は後方へと跳ぶ。そして、慶次郎から二〇歩ほど離れた場所にふわりと着地した。驚異的な跳躍力である。そして、口元を歪めて笑った。

「ふん。なかなかやるじゃないか」

「そうかね」

「だが、この程度、で……！」

がくり、と左慈の体が傾く。慌ててバランスを取ろうとする。

その右足が、太ももから離れて地面に倒れた。

「しづとい奴だな」

「なかなかと死なないようにできておってな」

「不便な体だ」

「まったくよ」

戦いを始めて一刻（二時間）。左慈と慶次郎は笑い合った。左慈の姿は、戦いを始める前とまったく変わらない。しかし、対する慶次郎は満身創痍であった。傷は少ない。だが、その体は至るところで内出血を起こしていた。無論、その表情はそれを微塵も感じさせない。

慶次郎が踏み込んだ。一瞬で距離を詰めると、朱槍を左から右に横なぎにふるう。左慈が上に飛んだ。慶次郎はその膂力をいかして強引に朱槍の軌道を変える。強引に下から上に振り抜いた。左慈の右腕が吹き飛ぶ。それは地面に落ちると、軽く跳ねた。

しかし、左慈の体からは一滴の血も流れない。落ちた右腕は霞のように消えた。同時に、左慈の右腕は何もなかったかのように『復元』する。ご丁寧に、服まで元のままだ。

世界からバックアップを受けている管理者は、その意思がある限り無限に復元することが可能である。それこそが、管理者にかなう者が『この世にはいない』理由。どんなに強くとも、『有限』である人間は『無限』に勝つことはできない。

そしてこの一刻の間、同じような光景が繰り返されていた。慶次郎が打ち込む。左慈の体のどこかが吹き飛ぶ。復元する。そして打ち込みの幾つかは時にはかわされ、その都度左慈の蹴りが鈍い音と共に慶次郎の体に当てられた。その度に、まるで鉄棒で打ち込まれたような衝撃が慶次郎を襲う。

打ち合いならば十中八九、勝っている。しかし、確実にダメージを蓄積しているのは慶次郎の方であった。

「きりがない、の……」

ぐらり。慶次郎の体が初めて傾いた。思わず、冬華が声を掛ける。

「慶次！」

「手間かけさせやがって。……そろそろ、引導を渡してやる」

「左慈！」

冬華は左慈と慶次郎の間に割って入った。瞳に涙をためて、左慈をにらみつける。

「管輅。……そこをどけ」

「いやよ」

そういうと、冬華は懐から黒柄の小刀を取り出した。慶次郎は目を見張る。それは、この世界に来る直前、彼が髭を剃るのに使った小刀であった。柄には龍の紋様が入っている。彼がこの世界に来る契機ともなった小刀でもあった。鏡池でほかの武器と一緒にあったのを、半ば強引に冬華がねだったものだった。

冬華はその鞘を払うと、慶次郎に背を向けて左慈に対峙する。慶次郎は、思う。冬華では相手になるまい。この左慈という男、冬華のことを『仲間』と呼んでいた。よもや殺すことはないだろうが、万が一と言つことがある。時を稼がねば。慶次郎は左慈に問いを発する。

「なあ、おぬし」

「何だ」

「今さらで悪いが、教えてくれぬか。なぜ、わしを殺そうとする」

もはや勝利を確信しているのだろう。左慈は鼻で笑った。

「冥土の土産に教えてやるよ。お前は这个世界に存在してはならぬ
いからな」

「ほう。それはなぜかな」

慶次郎は続けて問う。この機会を生かして、息を整えている。

「……这个世界に『天の御遣い』は、ただ一人と決まっている」

「ふむ。北郷殿か？」

「そうだ。だから、お前は天の御遣いじゃない。いわば『病原菌』
さ」

「びょうげんきん？」

「ふん、田舎者にはわからないか。お前はオレたちの……这个世界
の『敵』ってことだよ」

「なるほどな。おぬしの言うことが本当ならば、わしは『天に徒な
す奸賊』といったところか」

左慈は口元を歪ませた。

「そんな立派な言葉を許すかよ。良くてお前は『害虫』といったと
ころさ」

「『一寸の虫にも五分の魂』という言葉知らぬようだな、若造」

慶次郎は完爾と微笑んだ。

冬華は思う　ああ。なぜこの人はこんなときに、こんな顔がで
きるのか。

「冬華。そこを下がれ」

「で、でも……」

「おぬしがそこにおっては、その男を倒せぬわ」

「！」

「わしを信じる」

慶次郎はにかりと笑う。慌てて、目に涙を浮かべたまま冬華も微笑む。笑わなくっちゃ。それでも堪えきれず、その瞳から一筋の涙が流れた。と、同時に崩れ落ちる。

「！」

冬華を左慈がそっと抱きかかえた。首筋を手刀で打ったようだ。そして、ゆっくりと地面に横たえた。

「……せめてもの情けだ。この女が気を失っている間に駆除してやる」

「おなごを泣かす男は許せぬな」

「ッ……泣かしたのは、てめえだろうが！」

怒りの表情を浮かべて、左慈は慶次郎に向かって突っ込んだ。これまでで一番の速さである。慶次郎も朱槍を構えると、迎撃のために腰をかがめた。と、左慈が眉をひそめて足を止める。

「？」

「そこまです」

ずん。

衝撃が、背後から頭に来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4214x/>

恋姫十無双・慶次伝 ～空の彼方に～

2011年11月28日19時53分発行